

川柳塔

平成十三年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年（通巻八九二号）



白川協加盟

No. 892

九月号

第7回 川柳塔まつり

＜同人総会＞

と き 10月7日(日) 午前10時～11時半

ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 生駒

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車・TEL06・6772・1441)

議 事 平成12年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成13年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

＜各賞表彰式・記念句会＞

と き 同 日 午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F 金剛 中・西

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・茴香の花賞・一路賞
各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

おはなし 「続・うがちからうがちへ」

兼 題 「深 い」 (横 浜) 橘 高 薫 風 清水 潮 華 選

「い つ も」 (出 雲) 竹 治 ちかし 選

「予 感」 (米 子) 政 岡 日枝子 選

「見 る」 (鳥 取) 土 橋 螢 選

「う ど ん」 (堺) 板 尾 岳 人 選

「燃 え る」(事前投句・9月10日締切) 河 内 天 笑 選

◎各題2句・欠席投句拝辞

出句締切 正午 午後4時半終了予定

会 費 2000円(記念品呈)当日いただきます

＜懇親宴＞

と き 同 日 午後5時～7時半

ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F 葛城

会 費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8000円(朝食付)

○事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌同封のハガキに明記の上、9月10日(月)までに本社事務所宛お願いします。

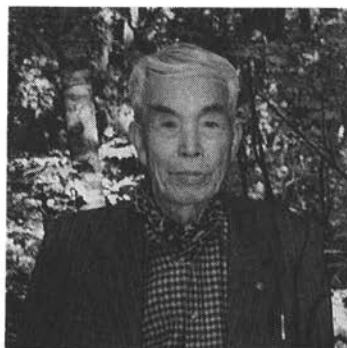
○懇親宴・宿泊のご送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願い致します。

○記念句会・懇親宴には同人・誌友にかわりなく、一人でも多くの方々の御参加をお待ち申し上げます。

主 催 川 柳 塔 社

ああ東野大八先生

河内 天笑



平成4年 奥入瀬にて

「とてもいい気分で、ふわりふわりと広いお花畑を歩いてゆきました。」阿倍野区松崎町にあった「以和貴荘」で開催された昭和五十年七月七日の、路郎忌句会で柳話をされた東野大八先生は、「年にいちどしか姿をあらわさん七夕みたいな男でして」とユーモラスに前置きされて、第二次世界大戦に従軍記者として派遣された中国大陸で

の臨死体験をつぶさに語られました。お話はつづいて「しばらく歩いていましたら、関所のような所に出ました。そこには閻魔さんが居て私にこう言うんです『お前さんはまだこの世でなすべき仕事がたくさんあるので、ここを通す訳にはいかん』と。あの世の入り口で門前払いをされ、丹下左膳みたいな格好でこの世へ帰還した次第であります。」

コップの水でひと息つかれた後も、戦地での奇妙な出来事や体験をテンポよく語られ、場内はびしやりと水を打った如くに先生のお話に聞き入りました。三、四十分のお話はあつという間に終わりました。人を惹きつけてやまない軽妙な語り口に、一同はしばし酔わされたことを、昨日のことのように思い出します。

閻魔さんの言われた「この世でなすべきたくさんの仕事」については、閻魔さんもびっくりするほどたくさんの仕事を成し遂げられたのではないでしょう。昭和五十年から「川柳塔」に連載された「麻生路郎物語」は絶賛を博し、八月号まで「川柳の群像」で健筆をふるって下さったことはご承知の通りです。

七月二十日のお葬式には名神高速道路での大渋滞に遭い、お見送りを断念せざるを得なくなりとても申し訳なく残念でした。これほど大事な先生をお送りするのに、なぜ前日から現地に赴くゆとりを持たなかったのかと、後悔してもし切れません。せめて今年中には大八先生のご仏前でご冥福をお祈りし、おわびしたいと思っております。

東野大八——本名 古藤義男

戒名 法輪大八居士

甲 句

おおよつと来たなと笑う閻魔さん

合 掌



座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

自分の句

若者に明日の風は嵐かも

長谷川

淳

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 ああ東野大八先生	河内 天笑	(1)
詩幅を広げよう	野村太茂津	(2)
川柳塔 (同人吟)	河内天笑選	(4)
自選集		(54)
水煙抄	板尾岳人選	(59)
愛染帖	波多野五楽庵選	(85)
追悼 東野大八先生		(88)
野村太茂津・八木千代・板尾岳人・田中正坊・早川盛夫		
俳風柳多留二四篇研究 33		(94)
茴香の花	宮西弥生選	(96)

詩幅を広げよう

野村 太茂津



「なんば偉い選者でも、作者の心の底の底までわからしめんんでエー」
ある小句会でのことである。

大阪弁の、はんなりとやわらかい笑顔？であつたが、怖い人だなと思つた。

筆者も時々、中小句会の選者を仰せつかることがあるが、作者の心の底あたりまでは解つてゐるつもりである。しかし、「底の底」までは神さまでない限りわからない。

また、「わからん句」はあるが、これは作者の罪であつて選者の罪ではない。しかし、選者・読者も先入観で、この句の作者はこんな人だから、とその場で決めつけて批判することは慎まねばなるまい。

「てにをは」まで変えてしまうことは(初心者の添削指導は別だが)、作者に対する侮辱ではないか。

「一般常識人の十中八、九人までに理解と感銘を与へ得る句」なんて、そのような完全無欠な句は、まあまあ無理としても、それに近い句は今までに発表されている。

秀句鑑賞「同人吟」

「水煙抄」

「シンプル」

一路集「人妻」

「うるさい」

初歩教室「引く」

エッセー わが柳眼の中欧記

八月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／八田 敏）

柳界展望

九月各地句会案内

■編集後記

桜井千秀……（98）

春木圭一郎……（119）

板垣草丘選……（100）

中井アキ選……（100）

渥美弧秀選……（101）

吐田公一……（102）

早川棲世……（104）

……（106）

……（113）

……（129）

楓葉・朱夏……（130）

……（132）

座右の句

月見草ひとりの湖をもつひとに

自分の句

歳月やゆるし合うより他はなし

（智 子）

西山 幸

しかし、これも一人に理解はされても、別の一人には何ら感銘を与えないばかりか非難されることだつてある。

思想、詩想、人生でたどってきた道、学識レベルなどによつて、受け取り方が異なるからである。

以前、ある大会の選者を仰せつかったが、従来の「句風」と比較してずいぶん幅が広くなつてゐることを知つて非常に勉強になり、楽しく真剣に句と対峙した。

そしてできるだけ幅広く選句した。一党一派や傾向に捉われず、つまり偏らずに選に集中したので、終わった時はフラフラになる重労働であつた。

痛切に感じたことは、一個所の句会の中だけに停滞することなく、そこをホームベースとして、他の句会へもどしどしチャレンジして視界を広げ、詩幅を広げてほしいと思つた。

新人の中には、少し抜けると自惚れがもたげ、思い上がる人がいる。作者を育成する立場から、寛容で抜いてくれているのだ、という選者の思わくのある場合も考えずに。俗言の「ナメタライカンゼヨ」といいなくなる。

一方、全没になつただけで、句会にも出席しない憐れむべき人もいる。

誇るものないが穢れた掌はまたぬ 太茂津
妥協する焦点すこし暈しく
死にみやげひたすら種を播いている



河内天笑選

米子市 林 瑞枝

志賀直哉と仲良く丘に路郎句碑

山と海の絶景で脳のストレッチ

路郎師も愛す木槿がいま盛り

人間魚雷だった頑固おやじの駄菓子

山脈を抜けると川は向きを変え

女三人残って文殊の知恵の旅

箕面市 岩 津 ようじ

ジャイアンツ齒ざしりイチロー ササキ ノモ

三十度か それじや明日は涼しいな

運悪く熱が下がった診察日

親方の人気頼みの参院選

新聞でくさされるほど出世する

真紀子さん負けるな外務省ごとき

横浜市 菱 田 満 秋

七月忌 母と娘と師と友と

近頃は子を掛けさせて親が立つ

お前とは差別語ですと妻が言う

真夏日が骨の髄まで焼きにくる

式場の遺影の歳をささやかれ

寝転べば雲は流れるものと知り

川崎市 和 泉 あかり

水瓶はニヒルで六月に猛暑

わからない人種が増えていく日本

炎熱の中で破調の工事音

日傘ごと会釈を交わす昼下がり

真夏日がつづいて夏の彩が濃い

掴むもの見つけて縋る蔓のささ

島根県 榊 原 秀 子

お釈迦さま咲き出しました沙羅の花

初生りのこの茄子の色 茄子の艶

蛙鳴くだんだん夜を深くする

八の日の市へお義理の物を買う

味噌のかび表示が嘘でないあかし

友だちと会う約束の日が近い

竹原市 森井菁居

腎不全栄養学に強くなる

透析は嫌でメニユーに気をつかい

スモッグが晴れず菌痒い日が続く

脇役の方がピエロの性に合う

開き直ってからは何とかなっている

せつかな日本朝へパンが売れ

鳥取県 新家完司

わたくしを洗ってくれる夏の雨

花火師は目立たぬように仕事する

まだ刺していない無実の蚊を叩く

狒犬はスフィンクスの孫の孫

溝掃除には出て来ないお医者さま

強盗が来たら金庫を見せてやる

米子市 政岡日枝子

逆襲を考えながらブランコ漕ぐ

塗り替えた鱗でしばし彷徨える

座禅くむ静かな熱気身を任す

高い処は冷たい顔の人ばかり

一段と明るい末席のひかり

これからを言えば誰かの薄笑い

唐津市 宗水笑

問いかけにまばたき一つせぬ埴輪

炎天の瓦職人仰ぎ見る

情なや盗られた駒に攻められる

集印帖 違和感なしの多神教

セーラーを脱いで厚底サンダラス

春を売る女の数の親が居る

倉吉市 野口節子

ときどきは枯野に欲しい温い風

まだ独り私男性アレルギー

血液が水を水をと命乞い

ハイテクの落し子でした大汚染

ドングリの中で背のびをしています

白百合の白が思わぬくわせ者

富山市 舟渡杏花

しこしこと枘目を埋めている暮し

消印に透けるおとこの憎い笑み

バツイチの自業自得の飯が吹く

無理をして笑わなくてもいいんだよ

優曇華の花を待ってるろくでなし

ホームレスの館へシャネル風に乗る

倉吉市 牧野芳光

一人だけ笑い転げて馬鹿をみる

世に飽きぬようにいたたく不幸

俗化せぬ古寺に重たい扉あり

ハンドルを握ると口が悪くなる

悲しい指が敵と味方を選び分ける

表彰状貰えないのは励ましか

弘前市 高瀬霜石

花道に運鈍根の旗がある

ふるさとの風は強いが心地よい
生きている証拠ガタガタ音がする

川の字の頃の匂いのするカレー

それぞれに責任がある指五本

朝の胃にジューズとニューズ流し込む

黒石市 相馬一花

諸肌を脱ぐと調子が出る太鼓

泳げない教師飛び込む水の事故

勝ち負けが顔に出てくるパチンコ店

不都合なことは忘れる処世術

夏風邪に追い討ちかける冷房機

燃えるゴミ燃えないゴミを嘲笑う

東京都 播本充子

若いなあ十年先を描いている

ゆったりと構え強さを覗かせる

イチローのTシャツで寝るホームレス

苛められっ子だった正義の味方

深刻な話に蟹が乾きだす

何をあくせく人相が悪くなる

横浜市 清水潮華

メールより電話やさしい声を聴く

流行に乗って改革口にする

格安のLはMだと着て分り

身の程を弁え肩の凝りが消え

この夏を乗り切る猫へ買う刺身

お互いにやり取りしてるお中元

京都市 小西未佐子

今入れたメール ラジオの声になり

街角に小泉さんが待っている

敬老パスはいこれまでと言わないで

抵抗のあった仕事を好きになり

休日を如何に使う花丸日

心だけゆたかアハハと今日も過ぎ

和歌山市 桜井千秀

知っていてとぼけ通すも難しい

盆施餓鬼 父母と夫と子の供養

人生指南 離婚歴から微に細に

やることはとことんやってから飛ばう

変人になれずに青いシャツを着る

飲まされた煮え湯で若さ取り戻す

和歌山市 福井桂香

ケータイの向こう危険な海に出る

長針はいつも私を急き立てる

ダメダメダメ扇風機まで首を振り

ストレスを一ぱい詰めた冷蔵庫

乱雑に並べてみても花は花

すんなりと眠りに落ちる砂時計

和歌山市 木本朱夏

脇役のわさびがすこし効き過ぎる

握手した指の先から健忘症

人間のふりして鬼のご乱行

平成不況ドミノ倒しがまだ続く

ケータイも持たず世間に一歩ずれ

ブランドの首輪 平成のお犬様

和歌山市 川上大輪

農耕民族だから美味しい握り飯

助手席で女軒をかいている

情けない姿で足の爪を切る

真夜中のポスト溜め息ついている

昔むかしの話結局自慢なり

ネクタイを解く私の持ち時間

吹田市 山本希久子

一点をみつめ昨日を回想す

おとなしい女が抱く起爆剤

憎しみの一歩手前で引き返す

素直さと寛容老いを生きる知恵

赤ちゃんが笑ってくれた今日も晴れ

習いごとしよう六歳 六十歳

箕面市 出口セツ子

君の愛メインディッシュにして無敵

物忘れ上手で楽天してる明日

最後まで信じる馬鹿になりきろう

十八番ホールに溜める底力

人の世の虚構を喰うよう花火

汚されたくない思い出を折りたたむ

枚方市 寺川弘一

ベアルック占有宣言するため

大胆な水着の女泳がない

不本意に歩く花道だってある

一本道を歩いていてもある迷い

地図にある道は歩かぬ探検家

ドアチェーン外してくれるまで通う

寝屋川市 坂上高栄

セクハラに大声の出ぬ淑女です

失敗の数を重ねた年齢を踏み

使い捨てしつぺ返しの日イオキシン

一途なる信義に生きる盲導犬

同化作用 夜は植木を外に出す

豊満な胸の膨らみ誰のもの

寝屋川市 江口度

恥ずかしいと思いませんかゴミの山

洗濯機回るとシャツを脱がされる

力こぶ少うし邪魔になることも

売り切れと言われますます欲しくなる

無駄づかいするな下手なコマーシャル

枇杷食べたお皿に雨の音残る

東大阪市 指宿 千枝子

瞑想は昼の電車に身を預け
ブレイバック夏の日の恋 青い海

蝶よ花よ姉さんだけがほめられる

時どきは自分をほめて励まして

湯豆腐にオー デリシヤスと異人さん

七十に届く余生をたのしまん

東大阪市 北村 賢子

貧しさの中であたため合うところ

始まりは親に背いてまでの恋

風の子を消してしまった塾通い

顔見れば何も言えなくなる親父

変わったねは女に酷な同期会

ご近所の空気も丸い路地住い

八尾市 井尻 民

五人の子育てた母の小さい背な

自己評価低めひくめでいい笑顔

帳尻の不足は猫のエサと書く

里がえり持てるだけ持ち娘はかえる

とばっちり受けて器も左遷され

湯けむりへ女同士の声弾む

八尾市 長谷川 春 蘭

のんびりと波打つ春の心電図

散歩するのも億劫 花粉症

物の芽のなかのひとさわ山椒の芽

貝割菜したたか辛し刺身づま
湯のおう男の裸許されよ
婦省子が都会言葉で笑わせる

八尾市 吉村 一風

風読んでいるのかひとりしゃべらない

あちこちの捻子締め直す梅雨のあけ

きれいな虹まだまだ夢は捨てられぬ

逆境を越えた笑顔が素晴らしい

ひまわりに元気をもらうスニーカー

ひとり言ほんとは誰かきいてほし

八尾市 高橋 夕花

朝の茶ばしら内ふところにしまい込む

美術館すこし素敵になれそうだ

きれいごと泣き事並べる日記帳

ほおずきを見事に鳴らす茶髪なり

新しい傘たつぷり濡らす梅雨最中

誕生日とくとく思う父母の恩

八尾市 高杉 千歩

ハトマメ マス分る仲間と世を憂い

句集などもつてのほかと遺書にない

とにもかくにも拾う二千数百句

浮きしずみ思い出させる夫の句

パソコンに脳が目醒める夏盛り

死の恐怖文字の乱れにある句帳

羽曳野市 安芸田 泰子

一呼吸置けぬ短気が悔まれる
聞かされた秘密が詰まるのどばとけ
邪推する心淋しいひとりばち
雑草が待つて居ります旅帰り
雷が帰って行った虹の橋
セールスへ惚けた振りの電話口

松原市 小池 しげお

内緒事詰める袋が破れそう
紙芝居のおっさん死んで亡くなった
豆の木がないので天に昇れない
石橋を叩きに行つて帰らない
工事場へ生コン尻を向けにくる
応接の時計朝からよく動く

大阪狭山市 矢野 梓

選挙戦みんなおいしい事を言い
不況への怒り選挙へぶつつける
古里に友と歩いた道がない
年甲斐もなくお世辞には乗り易い
アドバイス自分の出来ぬ事を言い
いい映画でした余韻がまだ残る

富田林市 中井 アキ

ブルースをアルバムと聞く梅雨さなか
母も娘も七夕生まれひとりっ娘
同じように育ててみても長女次女

父母の星からエール贈られる
写経千巻 母の頁のすわり胼胝
想い出の皿に家族の絆盛る

藤井寺市 太田 扶美代

かすみ草少し心が騒ぐ日に
病院で使うとお世辞あたたかい
坂道の真ん中辺で見た悪夢
カラオケで自分の哀しさたしかめる
自分史の終りを飾る天使の絵
押しつけるつもりなかったボランティア

藤井寺市 高田 美代子

ミニスカートがまだ似合つてゐる幼妻
Tシャツだけれどわたしの一張羅
捻子も簞もゆるみ取扱注意
老後のことに頭かかえてゐるロダン
平和な地図に防空壕の跡が無い
ばばさまが杖とリュックで街へ行く

藤井寺市 楠 昭子

淋しくてひとりばちの馬鹿騒ぎ
作る手間はぶいて今日は冷奴
嫁さんのメニューが少し油濃い
いろは坂右に左にゆれて降り
図書館の冷房が効き眠くなる
足ることを知ったときからほとけさま

河内長野市 加島由一

殺したい男を膝で寝かしてる
楽しんでるかお金は足りてるか

何時だって来い鍵なんかしてないよ
子のことになるケンカになる夫婦
内情を話すと神ももらい泣き
ギャルみこしずらり日曜カメラマン

大阪市 西出楓楽

胸底で亡母の影が揺れ止まぬ

安定剤増やす自分に負けられぬ

始めよう介護ロボット買う貯金

バクバクと食べる人には気を許す

おいしいもの少し食べたい歳となり

栄養をとにかく言う和不味くなる

大阪市 小林周信

すつきりとせぬがこの世は多数決

錆ついた頭をほぐす手酌酒

癪の種負けた感想聞きにくる

ノラクロの中隊長に会う散歩

逆転の発想はない蝸牛

変人を個性派と呼ぶ誉め上手

大阪市 津守柳伸

天職があるじいちゃんの向う意気

ヘッツイさんある邸宅の貸家札

はばかりず携帯かけている車中

ゆずられた席青い目の日本語

豪快に切った鮑に四苦八苦

大丸の袋を提げて高島屋

大阪市 神夏磯典子

突然に体に鳴った非常ベル

盲腸がまだあつたんかと笑われる

辛抱をし過ぎて出来た深い傷

年齢を悟りなさいと神の声

午前四時ナースコールを押すつらさ

全快の祈り届けと天の川

大阪市 本間満津子

ニュースでもっと聞かせて欲しい善い話

よく切れる鋏を下手法使いよう

ポイ捨てのすぐ後要ること出来てくる

割引は無かったとして貯めておく

余所見している間にチャンス逃げてゆき

蓄みな開いて花瓶も嬉しそう

大阪市 板東倫子

温もりに馴れて感性枯れて来る

何回も読み返してるいい手紙

消去法愚かな打算のみ残る

噂ひとつかけ巡る日の不整脈

戦争放棄してしなやかに生きている

ITを知らぬとせせら笑われる

大阪市 川久保 睦子

ふつふつと豆を煮てますいい音で
サイフォン沸いて私の劇場へようこそ
本音聞くつもり酒をこことわれ
年金でつなぐ二匹の猫と居る
連綿とヒト科の夢は天の川
いびつでもトマトやさしい味がする

大阪市 榎 本 日の出

いい人と出合い人生観かえる
お互いに弱音を吐いて長続き
手の届く所へ置きたい品ばかり
掃除機が早く早くとうなり出す
ハイハイと返事ばかりの重い腰
都合よく忘れる母に疲れます

堺市 齊 藤 さくら

あわてても二十四時間縮まらず
思い込み過ぎて行き先間違えた
譲らねば話が前に進まない
逃げるから追いかけたくなるのです
泣いたって川の流れは変わらない
御中元々々小さくなってきた

堺市 志 田 千代

茶髪にはハローと声をかけましょう
ジベタリアン地球のぬくみ知っている
もつと子をほめたら美女になったかも

美しい花はたちまちもらわれる
方向音痴だってもらえる免許証
霊柩車我が家の前で時間待ち

堺市 宮 本 かりん

入道雲もくもく夏の威丈高
不満などないがいらいらしてばかり
ひと呼吸入れて反論ばかりする
口下手が言うおおきにある心
当然の権利を主張する恐さ
半眼で見てくれている仏さま

堺市 村 上 玄 也

絶景へ行くほど高くなる土産
読書家と言うより本の収集家
少子化を一番嘆く小児科医
心おきなく飲んでる妻の留守
一杯のつもりの尻に根が生える
人前で威張って後で妻に詫び

尼崎市 奥 山 美智子

水中花 涼しい話してくれる
てのひらをさらすと浮いてくる本音
病んでからちよつと視点を变えてみる
寝たきりでなくてよかった手を合わす
ささやかに生きよう夢をたずさえて
真剣に向かえばきつと果たせそう

伊丹市 山崎 君子

梅雨あけか空気も甘い蟬の声

笹かざる遠い人の名 星まつり

天気予報でてる坊主に味方する

相合傘小さすぎます俄か雨

三面鏡今のしあわせだけが

同窓会楽しい過去を連れてくる

西宮市 西口 いわゑ

小泉さんアイドル並に騒がれる

イチローのおかげ野球がおもしろい

この国を変える選挙であるらしい

玉手箱に夫婦の過去を入れてある

パソコンの中にあなたをとじ込める

幻か夢か睡蓮ほの白し

姫路市 古川 奮 水

祖母のうたママ受け継いだ子守唄

大衆の酒場 不景気風見えぬ

即席カレー提げて農繁期に慰問

二次会はお好み焼に生ビール

募金箱汗の匂いも差し入れる

祝福の花はドライにして家宝

宝塚市 嵯峨根 保子

モナリザの笑みより深い露仏さま

熟女とはこうでありたい花しょうぶ

昨日まで泳いでた貌クール便

こっそりと貰ってそつと礼を言う
婦りしな言うたことなどすぐ忘れ
どうせなら崩れる前に倒れたい

川西市 西内 朋月

取り敢えず薬を入れる旅鞆

立飲み屋やもめ同士で話し込み

這いだしてみみず干涸らぶアスファルト

久し振り旧友と石並べてる

それっきり貸した友から頼りなし

友達の彼女に好きと言いだせず

三田市 北野 哲男

定期券どうも年齢詐称らし

泣いている顔が似てると笑われる

ウエイトレスどいてどいてと言う歩き

不器量を証拠隠滅したジューズ

満開のバラも冬には棘ばかり

寄贈した緞帳社名消えている

兵庫県 大谷 幸次郎

サラ金が仏の顔で人誘う

世を丸く渡る術だけ長けてくる

若嫁の里のみやげは磯の魚

のんびりと育ち小回り身につかぬ

涙腺のゆるむ仕掛もある喜劇

まっ赤な陽沈む故郷が懐かしい

鳥取市 岸 本 宏 章

海の日を祝う言葉が浮かばない
父の歳超えてようやく父を知り
美辞麗句 酒にすんなり溶け込めぬ
アンテナの高い人とも手をつなぐ
どちらとも取れる笑いで逃げておく
紙コップ僕に似ていて使えない

鳥取市 岸 本 孝 子

おだやかに話せば耳を貸してくれ
好みまで似たね二人で茶漬食う
ありったけの真心こめてプロポーズ
そう言えば晩酌つがぬ妻になり
幸せは雑魚でよかった友の数
食卓が早くかたづく休肝日

鳥取市 田 賀 八 千 代

新札で人の温みをまだ知らぬ
拘泥りは消して流れに添うてみる
交差点曲ると遊び人になる
ほろ酔いに遊び心が騒ぎ出す
ほどほどの距離を保つていい仲間
ときどきはガラス細工のハート見せ

米子市 鷺 見 正 子

ケータイは止めてくださいまねき猫
ポスターを買って政治に期待する
桃栗三年だんだん遠くなる実家

ご学友狙つてうちも産むと言う
顔に出る暮し修業がまだ足りぬ
歯が抜けて素直になつたお父ちゃん

米子市 中 村 金 祥

給料をもらうこの身をいとおしむ
言い方を誤りカヤの外にいる
縄電車 役はそれぞれ持つていた
名も知らぬ花にパワーをもらつて
無に近い庶民の声に山動く
しょんぼりとしては良い句は浮かばない

鳥取県 さ え き や え

庭師さまさま死に体の木が芽を吹いた
家に座をとりもどしたな こんたくん
波浪警報無視やりきれぬ行方不明
盆だ祭りだ手抜きするなと亡夫の声
かつがれていると知つても笑うとく
こぼれ話に人のぬくみがつまつとる

鳥取県 西 原 艶 子

紫陽花も少し重そう雨の中
諭されて七日七日のお念仏
妻という鎖が溶けていく予感
携帯も電話も通じないあの世
どの辺に居るのか返事でもしてね
独り身へ皺寄せというものが来る

鳥取県 羽津川 公乃

早寝早起きたった一つの長所です

バズル二度当り七月好きになる

胡瓜二本植えて恵みを持て余す

缶ビール一番小さいので足りる

泣き笑い七十年の走馬灯

臆病で半端な遊びしか出来ぬ

鳥取県 石尾 かつ乃

出欠の届けに迷う農繁期

可能性信じ滅茶苦茶突っ走る

御破算になって肩の荷下りました

枝豆を茹でる近くで待つビール

すみません呑気な姑のしたこと

乗り越える勇気をくれた空の青

鳥取県 上田 俊路

ブランド着て百円ショップ買いに行く

欲しいもの買って要るもの忘れてる

お一人様一品買いに駆り出され

老人ホーム八十はまだ序の口だ

老人達の昔話は惚けてない

寮母さんの笑みが長生き支えてる

鳥取県 土橋 はるお

斜向うで飲んでる女に引かれそう

坊さんとなぜか近頃意気が合う

銭が溜まらぬヤダネ イヤダネなぜだろう

わたしの太陽は道草を食っている
癌告知さすかの魔女もナモアミダ
ついたち十五日わたし呑気にしています

出雲市 岸 桂子

留守勝ちを咎めず花は咲いている
歓声を上げて洗濯物かわく

窓開けて風に抱かれて見るもいい

共存と決めて雀が舞いおりる

捨てかねて一輪ざしにする器

救急箱の薬で足りている平和

倉敷市 小野 克枝

足りぬ分足さずに居れぬ母愚か

思ひ出を語る優しい蓄音機

横揺れの夫の看板支える手

一ランク落せば歩幅楽になる

読むつもり読んだつもりで埋まる棚

いい笑顔この子生涯車椅子

広島県 藤 解 静 風

いつまでも捨てる文化をつづけるか

捨てられるために装う箸袋

麦飯がヘルシー食となる平成

一病息災 女医さんが診てくれる

ひかえ目の恋いとしさを倍にする

坂の道 潮の匂いと句碑が合う

滋賀県 中 宗 明

田植え済み蚊遣り焚いてる夕涼み
セールスは品物並べ迷わせる
中元期呼鈴鳴ると気を遣い
十字架を意味なく胸に飾る娘ら
年老いて時々子の名全部呼び

京都府 稲 葉 冬 葉

その時の気分で煽てにものるよ
フラワーアレンジ寄せ植えに凝っている
胸騒ぎ顔見るまでは眠れない
無位無冠 恋の勝利者にもなれず
嘘八百を聞いている同窓会

京都市 都 倉 求 芽

一呼吸おいて見分ける右左
これも欲ごちそう運ぶ蟻の列
体ごとケータイにして話し中
ひらめきが欲しくてトイレへゆきました
照り返しの中で短足の影法師

京都市 高 島 啓 子

織姫も楽しむ出会い系サイト
河馬ほどの声でひと夏牛蛙
年上の蛙に負けているジャンプ
新郎の方が少ない友の数
トラブルがあつて覚える大使の名

京都市 山 海 友 熙

悲しくて泣いているのでない初秋
正直な風に出合った森の中
庭で鳴く虫に初秋の詩があり
わからないことを教えてくれる秋
私の小言を聞いてくれる秋

亀岡市 井 上 森 生

孫台風続く2号ももう間近
高層に棲む活力が香港に
変人が全国民の血を湧かす
学童のむかしの名前でEメール
遠き日がホタルになつて舞い戻る

大阪市 岡 本 久 峰

怨霊の仕業か凍土事故多発
鉢植えの花と添寝のわび住い
偶に金持つと肩こる貧乏性
ガン転移一人去りまた一人去る
角サンの片鱗 真紀子のぞかせる

大阪市 小 糸 昭 子

たそがれのとときめきすぐに月が出る
指相撲負けて勝つてる和の絆
林檎剥く さくさくさくと歯を入れる
天空ショー皆既日食五分間
速攻に脱帽します真紀子さん

大阪市 榎本舞夢

細い目で羅漢口マンを語ってる
誘われて出かける内は華がある
思いやりある風くれる扇風機
つり皮に足の疲れをあずけてる
雨の日は化粧ほどこしうつつ晴らす

大阪市 大塚節子

甘いもの禁止された日菓子届く
点滴一本 魔法のように立ち直り
恵方ばかり向いていられぬ風見鶏
女ですあたり見まわしBランチ
湯だまりになつてぼうふらのぼせてる

大阪市 川端一步

本当にやさしい人だ笑うだけ
困難に体当りする人が好き
夢見てる笑顔の人を起こすまい
還暦を過ぎて人間好きになり
夏バテに秘薬のひとつ恋という

大阪市 川原章久

借りた傘使うとすぐに雨が
美女はいい欠伸一つにある艶気
アホかいな挑むヤングの一气飲み
スタミナは無いが頭はまだボケず
目の毒が浜でウロウロして困る

大阪市 津守なぎさ

梅雨空がとても明るい手術あと
墓地当選生きているのも忙しい
使用済み切手集めるおばあちゃん
恋しい人老いてますます若返る
CMにゆらぐ女の虚栄心

大阪市 玉置英子

利き耳が弱い右耳ほどに落ち
歳の順違えて友は先に逝き
冷蔵庫故障明日は子の帰省
体重は減ったがウエスト変わらない
あらいやだ畳の縁に蹴蹴く

大阪市 奥村五月

良い人と言われ貯金はせずじまい
健康器 三日坊主と泣いている
三猿でかばい合ってる嫁姑
万歩計いらぬ二人の散歩道
母さんと呼ばば出て来る捜し物

大阪市 長谷川会美

ネプタ絵の志功の美人ふくらと
砂踊る富士の水湧くフツフツと
梅香藻が春の流れにゆれうごく
朝になり景色も変る女風呂
男湯の咳を合図に出る温泉

大阪市 辻川慶子

美しい友真つ白い齒で笑う

乾杯へ会えてよかった久し振り

マネキンと比べて試着あきらめる

お月さんきれいと電話かけてくる

妹がくると元気になるわたし

大阪市 鶴田遠野

生活のリズム狂わす熱帯夜

頼まれた馬券を買って行く見舞い

休日の雨たまに良しごろ寝する

食欲はあるが体重減る不安

蚊も蠅も耐えているのかこの猛暑

大阪市 前 たもつ

孫弟子も比翼の句碑を誇るなり

この歳でまだほめられる食べっぷり

読めぬ字へ筆のかすれをほめておく

結果より過程をほめてくれた父

引越したまちで出逢った夏まつり

大阪市 渡部 さと美

公園に車乗りつけお犬様

夏本番梅雨の雨傘要らぬまま

化粧する倍程かけてひげをそり

夜別に昼は一緒のフルムーン

大ジョッキ旅の女性の元気さよ

大阪市 鈴木とよ子

梅雨晴れ間傘も笑って深呼吸

賽銭泥棒老いの心を凍らせる

他人の痛さわかる人には鳩が舞う

ほのぼのと淡い口紅喜寿の春

立ち話犬も仲間に入れてやる

大阪市 中澤伽羅

老眼鏡二つは入れてあるカバン

友だちの癖が私に移ってる

親友とたまに揃えの靴を買う

ほどほどで止せばいいとは解ってる

新札を使う一瞬ちゅうちよする

大阪市 清水利武

ミコシギヤル肩の力を姉に見せ

土用丑こないうちから熱帯夜

枝豆で安く飲んでる缶ビール

菊水丸毎夜やぐらで音頭とり

赤蜻蛉秋の夕日を浴びてとぶ

大阪市 松尾柳右子

甘辛の人生だから強く生き

話題ない二人へ孫がやって来た

折り返し再人生へ眼の手術

夏雲に励まされてる重い靴

久々の電話遠くで義姉が病む

大阪市 町田 達子

池田市 岡本 吉太郎

三条大橋鴨川渡る梅雨晴間
半年振りの墓参京都の暑いこと
墓石を洗う仏の笑顔見ゆ
突然に一羽の鳥歌い出す
行く度に情緒が消える古都の景

大阪市 寺井 東雲

リストラの鮒はドブ川泳いでる
同年で離婚する人嫁ぐ人
死ぬ前に食べる御馳走きめてない
梯子酒回る軒数減るばかり
赤信号急いで走る事出来ぬ

大阪市 津村 志華子

がらくたに思い出あって捨てられず
我が道をゆけばきびしい風にあう
本当の愛は掴めぬEメール
ことわざをたんと知ってた亡母の影
方円の器の中でもがいてる

池田市 栗田 久子

八体のみたまに慰霊続く夏
何ごともなく三食をとっている
蚊の羽音幾度わが頬叩くやら
早稲の穂の花粉が白く光り出す
道祖神その足おおう彼岸花

親友とくらべられ嫌だった日
玄関を通らずくる友悪友だった
影うすき男なれどもいざの時
八十路来て野心が消えて日日楽し
年老いてあいまいにする事覚えけり

池田市 藤井 計光

鮮烈なデビユー メジャーを塗り替える
砂を噛み歯をくいしばる地区予選
列島をくまなく染めた小泉さん
威勢よいギャルの御輿に湧く祭り
泣き叫び帰らぬ児らの地獄絵図

和泉市 岡井 やすお

掛け声の割に改革どうなった
政治とは曖昧模糊なものと知る
入院して知る なるようにしかならず
また一つ臓器取られて軽くなり
有難や年金暮らすつつかい棒

和泉市 中川 楓

蝦夷鹿の子を見る親の目の優し
ハンサムに弱し土産をたんと買う
オホーツクへと投げ放つ梅雨の鬱
梅漬けているが良妻ではないよ
二つ目の月下美人に客のなし

茨木市 島 元 ふ み

ありがとう礼を言いたい人ばかり
歩けない足でお遍路など想い
平成の姥捨て金と物はある
上げ膳据膳だけでも嬉し旅の宿
還暦の亡母の写真を遙か生き

茨木市 堀 良 江

枯れそうなたしの心にも雨よ
道祖神のたもとに綴る雨の詩
出棺を見送るパール三連で
にぎやかに喪服の一団乗り合はす
いつからか軽いかばんを持つように

茨木市 藤 井 正 雄

子とバズルようやく解けてやつと風呂
あたたかく気品が匂う諭し方
国道に尾灯連なる雨しとど
熱帯魚はめて書留判貰う
ジョギングの成果実った富士登山

泉佐野市 山 本 蛙 城

いまデフレもつとデフレと待つ財布
株下落 選挙公示というこの日
九官鳥カイカク叫び笑わせる
福耳のあんさんまでもリストラで
蟬が鳴く二度と会えぬというように

交野市 山 川 日 出 子

尾道に麻生夫妻の光る句碑
甲子園 宇宙飛行士始球式（若田光一さん）
小泉さん米の青シャツ大人気
サッカーは情熱の足跡の技
まりつきは軍歌だったとおばあちゃん

交野市 森 本 弘 風

父の日にやっぱり酒が息子から
父の日に若返るシャツ娘がくれる
乗り越しはヘソ出しルック見とれ過ぎ
時々狂って欲しい万歩計
逆らうと一品が減る妻の膳

河内長野市 井 上 喜 醉

凡人でいる楽しみがある日課
陰口を上手く聞くのも芸のうち
泣き笑い共に主役の夫婦坂
緊急を待たず電話のオルゴール
退屈で空白だらけの日記帳

河内長野市 水 谷 正 子

外海へ出た事のない蝶の夢
外構え見事な邸 黒い霧
同人の祝 五婆のちらし寿司
Tシャツが八十だんねん言うてはる
新しい包丁買って使わない

河内長野市 植村喜代

青春を思い出してまた夜市(堺)

焼夷弾背負って逝った同級生(大浜空襲)

逆らわず波が寄せたり返したり

生き残り愉快な仲間も歳を取る

散らかった部屋に通した見舞客

岸和田市 原 苑子

底抜けと笑う元気な飯茶碗

リーゼントに席をどうぞとゆずられる

仲の良い夫婦の顔でまた旅行

特等席 花火大会火の粉浴び

筋書きのない人生で万華鏡

岸和田市 木村正剛

なんどでも塗り替えのきく面の皮

生きがいと惰性ぶつかり渦を巻く

暇なのに手抜き料理がうまくなる

陰口の聞こえる補聴器使わない

蹴躓き危機感つのる古稀の歳

岸和田市 井伊東吉

人の道教えぬ教育悲劇生む

靖国に迷惑掛けるA級犯

この暑さ雑草だけが元気なり

どの家もクーラー音が鳴り止まず

水遣りが休める慈雨がやと降る

岸和田市 高須賀金太

御堂筋 銀杏にロマンズが芽生え

字を書いて褒めてもらったことがない

舗装した道では靴が歌わない

タイミング計り赤信号わたる

一番になれなかったが悔いはない

岸和田市 原 さよ子

譲り合う心にふれた温かみ

すれちがう高校生のいい匂い

あんたかてうちも底抜けお人好し

折角の多機能 携帯もて余す

里の土つけてお芋の宅急便

岸和田市 藪野けい子

首相の人気で政治に耳がむく

青シャツ着てマイクを向けるアナウンサー

チャンネルを時事に合わせる老夫婦

筋書に推理まとめて午前二時

筋書の舞台は海の見える街

岸和田市 岩佐ダン吉

星条旗につづけと勇ましい総理

半分の背なに母さんなっていた

核ゼロに玉虫色は似合わない

聞き上手に奥の深さを見せられる

実になっていない苦勞を聞かされる

岸和田市 池田 寿美子

冷酒一杯 鯛のさしみが身にしみる

花心 日増しに染まる日記帳

神様のお招きいつかケセラセラ

北国の旅路ゆたかにラベンダー

海開き夏山開きに無事祈る

堺市 柿花 紀美女

リズムよく一日動き手を擦る

助け合い何はともあれ飢餓の子へ

娘の結婚 映画のように進行し

此の辺で常識のねじ切り捨てる

ベテランで家計省略うまい主婦

堺市 神原 文

米百俵信じて待とう笑える世

tototo当ててひとりにんまり熱帯夜

失敗へ外人さんも照れ笑い

パパの壁 時にはシヨック症候群

今を咲くあじさいパワー貰っている

堺市 和田 つづや

妖精が泣いてるような草の露

野あざみの刺は乙女のを塞か

午睡には蟬の時雨が子守歌

冗談の言える女とコップ酒

紙バック酒もミルクも味気ない

堺市 矢倉 五月

ひとつ追いまたひとつ追い坂登る

百花繚乱わたし落ち着く場所がない

言い切ってくれる主治医が頼もしい

風呂上り我が身諫める鏡あり

乗り切ったから星回り言うてやり

四条畷市 吉岡 修

空手形そろそろ妻にあやまろう

散骨はやめる空まで汚染する

俄雨ここで決心せよと降る

狙ってる服のバーゲン待っている

段々と遠くになった女性知事

吹田市 石原 靖巳

七夕の星も羨む比翼句碑(路郎・霞乃句碑建立)

贈られたネクタイ締めて気が重い

そろそろと帰る積りへ生ビール

我慢した拳をそつと褒めてやる

つまずいた石から貰う知恵ひとつ

吹田市 穴吹 尚士

年金が許す範囲の楽隠居

機密費という項目のない家計

ブライドは捨ててしまった丸い背な

ばら一輪捧げて妻にごまをする

再会に美しい夢こわされる

吹田市 大谷 篤子

肺いっぱい酸素を吸って生きている
だまりこみ雲行きばかり読んでいる
としよりに人恋う心あるなんて
北斗星梅雨の晴れ間の通夜帰り
心ブラとしゃれて娘とカニたべに

吹田市 瀬戸 まさよ

時流る女人禁制徐々にとけ
天然の生地に執着するお洒落
マニユアルの言葉と笑みのアルバイト
政権を執ればスジ論消える党
見場だけの若さ内臓若くない

吹田市 早川 棲世

自分史が雷鳴り地裂く昭和史だ
新聞の過去に反省ない新聞
王さん趙さん柳さん日本棋院なり
驚かんけど化粧した男生徒
冥途へひとり方向おんちの妻やれぬ

高石市 浅野 房子

突然にびつくりさせて逝くなんて(川見絹子さんへ)
唯一の取柄 健康ゆるぎ出す
のど飴をポッケに夜の例会へ
飛んできた吹矢ジョークでお返しを
当っても使う間がないだろうくじ

高槻市 江原 秀夫

百までは生きる気はない大ジョッキ
心の窓開けて仲間の輪にとける
虚と実の狭間に徒花根を伸ばす
手土産は何にしようか黄泉の旅
踏み込んだ話が詰まるししおどし

高槻市 井上 照子

朝露の清さに迷い覚まされる
足弱か瞬間地面顔を打つ
翔ぶ気さえあれば楽しく生さられる
幼なじみ尽きぬ話で居つづける
お茶席の和菓子甘くて品がある

高槻市 傍島 克治

口裏の合せ上手な友が近く
七十の手習IT講習会
少子化に無人ブランコ揺らす風
蟬時雨止んで広がる秋の空
茶柱を信じて狙う穴馬券

豊中市 安藤 寿美子

海見つつさしつさされつ比翼句碑
路線バス待つとくなはれと言え待ち
蚊をたたくしかしたたけた事がない
べんちゃらでええから若いと言うてんか
古浴衣私のおしめにするんです

豊中市 田中正坊

富田林市 藤田泰子

空つばの白木の箱で兄帰る（レクイエム）

死んだのは南（ミナミ）の果てニューギニア

いつの日か訪ねてみたい終焉地

支那事変従軍記事いまもあり

靖国にいないと思う兄の霊

豊中市 吉田あずき

富田林市 片岡智恵子

鉾立てがあちこち京の夏番

祭囃子遠い郷愁呼びさます

家族みな指定席ある夏の家

塗り重ね初心の色を忘れてる

夕映えに蠢くごとき沙羅の花

豊中市 松岡久留美

富田林市 大橋鐘造

お人好し無欲な瞳美しい

雑草も綺麗な花を咲かせてる

お喋りが過ぎて良縁逃げてゆく

折り紙にたくす優しさ母心

山盛りの弁当に見る母の愛

豊中市 井上直次

寝屋川市 岸野あやめ

ソツなくて何故か人気の出ぬお人

お隣と比べたくなるゴミの質

何くそと頑張り後は灸と針

気を抜くと怠け根性すぐに出る

タイミングずらし笑わす爺の芸

情熱が発火しそうな草いきれ

私には自慢に聞こえる愚痴の数

パールハーバー兄は藻屑になりました

垣根越しほどほどというお付き合い

乗客はみんな同姓ローカル線

富田林市 片岡智恵子

あの意見聞くべきだった曲り角

失意の日朝からジャムを炊いている

老いて子に従わずして共白髪

内科外科まわり眼科で厭いてくる

働かぬ脳だときどき首を振る

富田林市 大橋鐘造

エレベータ二人になって身構える

国のためになるなら浪費致します

気疲れをシャワーで流す仕舞風呂

介錯を任せた妻が先に逝く

変り身の早い男で生き上手

寝屋川市 岸野あやめ

病名にあたふた娘たち夫婦（眼底出血）

自立する女をなめるものでない

こわれてもいい母さんの目玉焼き

寿命だよ犬の十五は天命だ

飼犬が死んで無口な家になり

寝屋川市 太田 とし子

情熱のカケラが残る薬指

働き蟻一網打尽にする善女

京の街浴衣で埋めるコンチキチン

一通り理屈があつて旧と新

息子にも叙勲あげたい定年日

寝屋川市 堀江 光子

鞆からおもむろに出す週刊誌

一枚のメモへ鞆をかき回し

これという用は無いけど来るという

財と呼ぶもの持たないが友が居る

近頃のテレビの作られた笑い

寝屋川市 北岡 波留吉

美しい山の恵みで今日の幸

人気上昇こらで籐を締め直す

大物の魂抜いたのは女

油断せず尽してますと恐妻家

まだ八十路粗大ゴミとは何事ぞ

寝屋川市 籠島 恵子

娘が嫁ぐ肩の荷すこし軽くなる

五十五歳たんと生きてゆきたし

踏み込んだ一歩失うものがある

こだわりをひとつ無くした日の夕日

会うよりも電話ですますたなごころ

寝屋川市 高田 博泉

誘われる期待でピンク着て出かけ

国民をバックにマキコ吠えまくる

天気など気にもとめない父の留守

改革と言えば国民皆味方

通帳がカラのカードが三ツ四ツ

寝屋川市 柴田 英千子

朝シャワーの湯疲れもよし梅雨明け

カーテンはまだ閉じたまま七時半

ブランチと称し気ままな食事する

猛暑つづく黒い日傘を買いましょう

この巢にもことし燕の子がいな

寝屋川市 富山 ルイ子

不況風貸家空いてるまま三とせ

悪女とは足掬われるまで知らず

人前で化粧思わず目をそらす

昔のままおかず行き来の残る里

冒険心旺盛異に気付かない

寝屋川市 酒井 勇太郎

生きがいは充実の日々過ごすこと

私より妻が光ると子らの評

プロジェクトX感涙止まらない

階段を昇りつめての天下り

パニックをタイタニックに教えられ

寝屋川市 平松 かすみ

誕生日どなたがみてもおばあちゃん

ブランコにゆれて童子に戻ります

一言へ傾きながらももう午睡

手の平を染めて思ひは紅生姜

梅干しの塩分控えこまめなり

寝屋川市 森 茜

なおざりを責めてはならぬ疲れよう

つゆくさの藍どくだみの白 雨期最中

人間関係に悩む吊革のおとなり

価値観の違う話をもつれだす

出会い系サイト静かに牙を研ぐ

羽曳野市 徳山 みつこ

父さんに頼むとおかず高くつき

銀行でなくてもティッシュくれますねん

英会話ついていけない笑うとく

老父訪えばよう来てくれた来てくれた

いい秋へススキがおいでおいでする

羽曳野市 酒井 一壺

振り向かず若くして妻星となり

誘われてその気になった星月夜

蛙たち冬眠中に土地売られ

跳び方の下手な蛙が庭に居る

歩道橋お玉杓子が売られてる

羽曳野市 吉川 寿美

火も水もくぐって渡った川いくつ

輪廻転生めしやのめしと深い縁

いつからか妻が抱いてる不発弾

とっておきの笑顔で逢いたい人が居る

カード氾濫他人ばかりの街に住む

羽曳野市 三好 専平

校門に監視カメラを据えつける

満ち潮になると壊れる砂の城

訓練の誤爆 民家を打ちまくり

添削のきかない顔が愛らしい

捨身説く人も酒だけやめられず

羽曳野市 川口 信子

この指に止まった夫と五十年

年金の歩幅で渡る丸木橋

音たてて四季が流れる古希の坂

お姑に今また嫁にする我慢

株価みなしだれ柳のように見え

羽曳野市 西村 りつえ

降りすぎも降らぬも困る米俵

骨太もひびが入ればいる副え木

大事にと消毒しすぎ枯れた花

化粧落ちびつくりしてる宿ゆかた

肉食に人もだんだん牙をむき

東大阪市 谷 口 義

友だちも同じ目薬さしている
請求書それとこれとは別やから
晩年運あるとはたちの時言われ
たいていの事はなんとかなって来た
趣味のない男きつちり御飯食べ

東大阪市 安 永 春

暑いから炊事場磨き汗を出す
気まずさも話分かれば吹っ切れる
クラス会のもので飲ませて終電車
気炎あげお好み焼の大ジョッキ
浴衣縫い上がる頃には盆おどり

枚方市 森 本 節 子

プロジェクトX見て感激の涙ふく
身代わりに愛犬関節炎になる
旅支度一番たのしい時間かも
厳禁吸煙お国柄の文字目に入る (香港にて)
対岸のビルを眺めてアフタヌーンティー

枚方市 鈴 木 政 子

クラスメートもう歳やからと弱気吐く
来世も女に決めた婦唱夫随
今年ももう土被りに来た雀二羽
ラッシュアワー切ってやりたいロングヘア
肋骨折り足までイタタで寝起きする

枚方市 宮 川 珠 笑

二三歩で忘れる掲示の善い言葉
なあ心いちど洗いにかけようか
道を問う十代標準語を話す
景色より顔の写りで選る写真
木の陰が通り去ってもまだ寝てる

枚方市 海老池 洋

ライブルをしつかり褒めている余裕
反芻の牛に推敲教えられ
閻魔様も騙されそうなうまい嘘
秋風とプールで遊ぶ赤とんぼ
飢えていた頃の思い出ある木の实

枚方市 安 達 忠 央

褒め言葉ピエロ役へも忘れない
滅多には褒めない人に褒められる
褒められて嬉しいときのレモンティー
盲導犬車を止める威厳あり
パソコンを駆使する社長車椅子

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

全身に夏を感じてシート干す
朝顔の雑種見事な彩で咲く
上品に夏を過ごそう香を焚き
限定のメロンパンなら並びます
腕組みをして盆栽を誉めている

藤井寺市 中島志洋

夏ばてに追い打ちかけてくる残暑

不景気な話に飽きた招き猫

結び目が緩んだらしい倦怠期

驚いた振りをしてやる子の手品

松茸の香り忘れた鼻ばかり

箕面市 椎江清芳

遺言の紙一枚が血を裁く

札束をほどくと風が怖くなる

酒の味だけが確かな総入歯

働いた汗は匂わぬ風景画

本心を見透かすように仏の灯

八尾市 神原まさと

腕白が昼寝でパワー溜めている

西日にはこれが一番霞責張る

日の入りを待つて掃除をする暑さ

クーラーに弱く熱帯夜が怖い

餌やれば糞のお返しする土鳩

八尾市 村上ミツ子

ホイホイと愚痴なら誰も聞いてくれ

亡夫ならうれいことも話せるが

なかなか慣れぬ突っ支い棒のなくくらし

呻吟を温い涙で読み返す

義姉という姑の元気に安堵する

八尾市 内海幸生

仏壇に逃げたゴキブリ叩かれぬ

孫からのジャブは平気な顔なのに

自分史に恋の数など飾ろうか

マニュアルの専門用語に辞書が要り

家くるま会社の冷房夏の風邪

八尾市 生嶋ますみ

ぬいだ靴ママの躰がよく見える

許さねばならぬ妥協のお茶を飲む

お守りと思つて保険かけておく

食パンのほのかな香り母に似て

梅雨あけるタンス預金を虫干しに

八尾市 宮西弥生

歳の差がない者同士飲みくらべ

すこしだけ余裕が出来て風の旅

過去現在未来が見える鈴一つ

安近短旅づくりも高齢化

暑氣払いリズムに乗っているミシン

八尾市 宮崎シマ子

鍵探しあぐねて一日何処も出ず

人間にシッポつけたらシヤンとする

同じ程度のくらし隣と仲が良い

階段の上は嫁さん住むお部屋

暑がりの母を案じる熱帯夜

大阪府 澤田和重

あつさりと詫びられ出鼻くじかれる
人が見てますとステテコ叱られる

毒舌と優しさ合わせ持つ恩師
母の日も母キッチンに近い席
ヅカ退いて女に戻る男役

大阪府 米澤俣子

早口に脳の回路がついて来ず
ここだけの話が心重くする

マニユアル通り行かぬ手順を持ちあぐむ
暑いから熱い濃いめのお茶どうぞ
風にさやさやとうもろこしも茶髪

大阪府 初山隆盛

満天の星が掴めるマウナケア
舟盛りの鯛がヒクヒク主張する
終着駅へ超特急でなぜ急ぐ
美味いもん食べると横に君の影
トラブルに出番を知っているおカネ

可児市 板山まみ子

寝そびれて用もないのに起きている
咲いた花見てもraitたい庭いじり

父親と相似形です汗ふく子
早朝の散歩いつもの顔に会い
新品の半分は要る修理代

愛知県 早川盛夫

雑巾になって最後のご奉公
ストレスの溜まった妻は怖ろしい

年金で本二冊買うのがやっと
遅くまで働いている貧乏人
夕食後妻と張り合う六千歩

神戸市 池田善守

何事も他人気にして自色なし
大声で笑った妻の記憶なし
下駄箱でも私の靴は隅にある
ハイエナの群れの順位も雌が上
介護ゼロ目ざし毎日一万歩

神戸市 山口美穂

フラメンコは悲しい歌と知った旅(セビリア)
地平線までひまわりの黄うめつくす(コルドバ)
ドンキホーテのふる里風車が麦を挽く(ラマンチャ)
水道橋を守って二千年マリア様(セゴビア)
真夏の陽白い村なお白うして(ミハス)

相生市 中塚礎石

握り飯 機械がにぎる米の国
道端であくびしているはぐれ蟻
縄電車子供も孫も途中下車
リストラの魔物がひそむ摩天楼
泣けるとき泣いたらええで母の愛

尼崎市 長 浜 澄 子

ガングロがチラホラ夏の狂想曲
信じてたバラにもあった裏の顔
年月の無情を思う茄子の馬
日焼けした腕に今日まで来た自信
句碑祝う七夕さまの笹飾り

尼崎市 春 城 武庫坊

オリンピックの夢夏空に散華する
眼を修理 皮膚の齢がよく見える
星見えぬ都会の空に夢がない
辛口のカレーが欲しい街炎暑
祇園囃子が駅に流れて夏招く

尼崎市 春 城 年 代

くすり絶てばうつらうつらと朝白む
羊の群れと別れて三日経っている
まなこ閉じてあかるい夢をかき立てる
ねむれぬ夜を遊び心に委ねよう
さて今夜やっぱり飲まぬことにする

尼崎市 田 辺 鹿 太

振り向けば吾が人生はつづら折
逢いに行く朝はとことん歯を磨く
クーラーをこよなく愛す皮下脂肪
お越しやすハイさいならの諭吉はん
税務署の応対ぶりも貧富の差

尼崎市 内 田 美也子

天の川 音沙汰なしの亡夫を呼ぶ
夏花の短い命 仏花
現実の厳しさ逃避出来る歳
十二階 浮世離れのマイホーム
出合いこそ大事な宝 旅一夜

尼崎市 松 下 比ろ志

祖父祖母の里を話題に西瓜食う
鱧皮の品書き増えたのれん街
生け簀の鯛 組板までの旅路かな
海峡のしじまに浮いたノスタルジア
歳月は足跡だけを置いてゆく

芦屋市 黒 田 能 子

亡父と亡母身近に思う盆のころ
お盆には帰る一年すぐに経つ
この歳でまだ暗唱も出来ぬ程
健康を爪の色見て確かめる
百円ショップちゃんといつてる消費税

伊丹市 檜 谷 郁 子

遠い日の面影探し御挨拶
騒音も私に癒しくれている
過疎の村私の夏を置いてくる
掌に温み残し夫逝く早や五年
その昔越えた八月不安月

川西市 米原雪子

こっそりと孫にねだられ恵比須顔
せがまれた絵本を亡母のトーン真似
初挑戦曲った胡瓜実り出す
帰り待つ美味しい温度気にしつづ
愛着と尻込みさせる修理代

川西市 松本ただし

次の世へ残す帳尻書きはじめ
出し切った力に軍配など要らぬ
ジュータンに裸のまま寝てしまふ
デフレとはこんなもんかいたこ焼屋
人権が悪の味方になりたがる

三田市 久保田千代

爪伸びる速さ時間の速さかも
泣くことも武器のひとつと淑女言う
私にも飛ぶ権利とやあつたのだ
世の中はこういうもんやと諭される
ネクタイの紳士取り出す漫画本

西宮市 牧渕富喜子

不確かなことばとりと水たまり
咳しきり世の中五日置き去りに
月下美人ねむりの中を咲くでない
七月の生気をもらうねじを巻く
七月の暑さよ京都議定書よ

西宮市 奥田みつ子

金婚に四年のこして何故急ぐ
もはや聞こえぬ耳に一言ありがとう
その日から空を見ることが多くなり
まさぐる手傍らになく闇深し
ひとり居て昔のままの椅子五つ

西宮市 門谷たず子

唐突に友の計がくる稲光
幸うすき友の黄泉路に花添える
風すこし欲しくて踊り場で休む
鉄槌にだんだん打たれ強くなり
二度と来ぬふたりの今を刻まねば

西宮市 山本義子

ここ一番ふんばる太き足をもつ
生きるって日替わりメニユーみたいやな
約束は破りやぶられまたあした
老いたりや若いなりの知恵つき候
内緒だが町内向けの面を持ち

西宮市 緒方美津子

目立ちたいだから私は髪染めぬ
気づかわぬふりして暮す嫁姑
ナビよりも私信じてくれたのに
暑いから熱いおしぼり出すことに
子を叱る声に風鈴緊張し

西宮市 亀岡哲子

小学校に命の泉やご育つ
小学校の授業のぞいて行くトンボ
校長先生花壇に水をやっている
給食当番びわはころころ二つずつ
木造の校舎繕う夏休み

西宮市 秋元てる

母からの野菜土つけたままあげる
背中搔いてなどと言えないマニキュア
夢の事は言わず出張見送りぬ
表向き口を出さない女でした
これ以上望めば罰が当たります

西宮市 井上松煙

七変化器用に咲いて生きのびる
蒸し暑い寢床にひびく救急車
ハイミスの車とばして憂さ晴らす
褒められて年甲斐もなく嬉しがる
好奇心百円ショップを見て歩き

奈良市 米田恭昌

言い訳が妻の凶星にうろたえる
窓際に使い古しの首並ぶ
調子いい男の腹にある打算
酒そそがれて満面笑みの路郎句碑
七夕の笹も微笑む夫婦句碑

奈良市 天正千梢

かなしみの穴に喜びが落ちていた
露おきし牡丹に声をかけてみる
漬物をそえて新茶をすすめられ
金華山しつかり土をふみしめる
やすらぎは宮城なまりの宿につき

香芝市 大内朝子

ほろほろの辞書に記憶を笑われる
一匹の雑魚の正義を疎まれる
瘡蓋をじんわり剥ぎにくる噂
悪たれを言うて気を引く好きらしい
まだ女捨て切れなくて五色豆

橿原市 居谷真理子

ライバルが逝ってマニキュアもうやめる
群れ泳ぐ鰯孤独な顔をして
エリート眼鏡居酒屋でも光る
箸だつて逆手に持てば戦える
耕さず捕らずに食べてダイエツト

大和郡山市 坊農柳弘

世界遺産祈りは深き原爆忌
引き際の美学カンナも向日葵も
灼熱に耐えた稲穂の恵み待つ
マリンブルー夜明け爽やか海の家
小夜しぐれ濡れてやさしい鬼あざみ

大和高田市 岸 本 豊平次

茄子二本初老二人に出来すぎる

通院の手順にも馴れ回復期

野仏にも素通り出来ぬ気の弱り

親切に見せかけ土足で探り込み

健康食 所詮旬の物でよい

和歌山市 福 本 英 子

詰め込んだ雨具に自由奪われる

日本に幾つあるだろ夫婦句碑

情熱はあるのに手足ついてこぬ

千光寺夫と歩いたこの辺り

思い出を辿ると亡夫は若すぎる

和歌山市 古久保 和 子

ばあちゃんの居眠りそのうち猫になる

大輪の花火の音も直下型

道路地図いつも一筋通り過ぎ

日本がじわじわ縮むマイライン

冷凍室の中味はととてもミステリー

和歌山市 吉 村 さち子

老眼鏡かけて納得する掃除

多事多難これが生き甲斐かも知れぬ

口下手が意外と座持ち上手い人

ジャンケンのバーは私の欲深さ

まだ一花咲かすつもりでいるお洒落

和歌山市 田 中 み ね

ベッドから落ちてそのまま寝てる孫

昼間からビールの世話になる猛暑

嫌な性格美人を見ると腹が立つ

ばやくなかれ君が選んだ奥さんや

田中真紀子もバニくる時がある安堵

和歌山市 牛 尾 緑 良

手花火のやがて消えゆく物語

父母に少々辛い夏が過ぎ

朝ごとの会話が弾む茄子の色

無人駅風の無駄話がつづく

やがて皆老人の日の主役達

和歌山市 榎 原 公 子

うぐいすが頻りに浅漬がうまい

真夏日の農家に落ちる金の雨

農婦一年ジャンボスイカのまずさかな

ひまわりをでんと咲かせている支柱

焦げ味の豆ふつくと煮えブル

和歌山市 青 枝 鉄 治

政治屋の握手攻めには騙されぬ

磨かれた芸で悪役演じきる

七癖の一つで堅い椅子のまま

聞きもせず上司の歌へ拍手する

掌中の珠を嫁がせ父無口

和歌山市 松原寿子

刃物研ぐ姿みせぬと決めている
両えくぼ添えた意見を躲される
真正面から秘密が洩れていたような
踏み込めぬ一步のなかにある痛み
楽器店すきな音色に癒される

和歌山市 山口 三千子

来年も咲かすアジサイ切り詰める
差し木した鉢を並べる梅雨の庭
試行錯誤しても出口はただ一つ
ストレスを溜めた体が狂いだす
わたくしの耳の中でも蝉しぐれ

和歌山市 楠見章子

予定には無かったケーキバイキング
孫の名付けもうイチコロと決めてあり
隔世遺伝できたらいいね娘のバスト
夏野菜わたしに欠けるものばかり
何べん来ても旅はわくわくしてしまふ

和歌山市 玉置当代

十字架を背負う秘密を抱いている
出来るなら嘘は言いたくないものだ
気まぐれにわたしを焦らす猫じやらし
積み上げた努力むなしの砂の城
夏草のパワーが欲しい更年期

和歌山市 西山 幸

かもめーる来る海恋し 恋恋し
覚悟して検査入院くりかえす
くすりまけに飲む薬あり病んでいる
欠点だけがはっきり見える老眼鏡
忘れずに見る広告の裏おもて

海南市 三宅保州

波瀾万丈でなければならぬ立志伝
大げさに告げねばならぬストライク
ゴミを出すことも立派なスケジュール
少子化で定員割れの縄電車
チンと鳴ったらハイハイハイと言う妻よ

和歌山県 中後清史

頼りない親に殊勝な子が育ち
追いつ風に乗ると忘れる向かい風
ハンドルへ五月蠅い助手席の指図
居酒屋の敷居の高さに合う
偶然じゃないぞと響く神の声

鳥取市 徳田ひろこ

天窓の一等星に睨まれる
イントロの甘い響きに魅せられて
ジャンプほどほど向い風きつくなる
風下に温いコントがおりてくる
脱皮する人はからくり持っている

鳥取市 植田 一京

カレンダー予定の多さに呻いてる
ギヤグばかり言って正体つかませぬ
思い出の方も白髪がふえました
誤解されそう振り仮名つけておく
悠々人生これからが勝負

鳥取市 岩原 喬水

火消壺まだ燃えあがるパワー持ち
もつれ糸すつきり酒が解きほぐす
時々妻に王手で詰めよられ
笑わせて泣かせてコント幕にする
長所だけ褒めて仲人後言わぬ

鳥取市 倉益 一瑤

風はセクハラちよいとモンロー真似てみる
時々生年月日忘れとく
倒れたらあなた起こして下さいね
肩パッド外すと息が楽になる
遊びだよ言いつつ欲が顔を出す

鳥取市 近藤 佳子

喪が明けてみても悲しみ離れない
山男ふつくと炊く山のめし
飽きられる前に逃げゆく聡いひと
追憶に恩師と呼ぶを許されよ
化粧映えすてき女の変化球

鳥取市 美田 旋風

騙すのも騙されるのも好きでない
たが緩み旅の二次会歌も出る
口だけは達者で敵に囲まれる
健康に励み年寄りまた増える
止り木で老犬元氣よく吠える

鳥取市 春木 圭一郎

朝顔が綺麗心も澄んでくる
朝市へ元氣を買いに行つて来る
早朝の散歩意外なひとと会う
定退後 朝湯朝酒多くなる
酔い醒めの水が美味しい朝である

鳥取市 武田 帆雀

鎌の柄でエイツと一撃鬼あざみ
別々の齒科へ夫婦の好き嫌い
ギョッギョツと鳴る靴爺がめつつちゃ好き
草の根の虫も一票拝まれる
僕んちにご馳走がある猫の鼻

鳥取市 山本 益子

日頃から丸い豊かな心掛け
少しづつスランプの傷癒えて行く
コウノトリ嬉しい知らせ運び来た
山水の庭に魅了し正座する
お互いにアレルギー性馬が合う

鳥取市 上田 宣子

五分だけアイトリングをして起きる

こんなにも鈍いわたしも全自動

BGMこれはわたしを濯ぐ川

山鳩が緩んだ耳に棲み始め

バランスを考えている波がしら

鳥取市 夏目 健一

遊び上手は世渡り上手かも知れぬ

頭脳派が増えて野生派減ってゆく

生きるとはのんびりできぬものらしい

病んでからとても優しく脱皮した

決断を大きく金が左右する

鳥取市 杉本 孝男

倒れたと聞いた銀行立っている

子の前だぐらぐら見せぬ父の意地

一喝に毒気抜かれた役員よ

よろしくと頼んだ裏で金が必要

水溜り飛び越せないで遠回り

鳥取市 福田 登美

傘踊り夜を彩る街の景

心の窓 他人の視線に磨かれる

丸洗いで見たくなる脳の錆び

情熱は余生に背伸びさせている

躓きも生きる道への糧とする

倉吉市 松本 よしえ

空き缶がひしゃげ悲しい顔になる

焦点が合わずに今日もすれ違い

焦点を決めてからもう迷わない

ゲーム機で遊び日焼けもしていない

並べると不満の種子はふえて来る

倉吉市 最上 和枝

ご詠歌は母に捧げるレクイエム

たゆまない汗が実って技となる

呑気には過ごせぬ花は散り急ぐ

小半日呑気に過し肩が凝る

昼寝して脳にカンフル剤を打つ

倉吉市 米田 幸子

蓑になり笠になりした母も逝く

女房は生まれながらに口が立つ

鉛筆の芯をとがらす果し状

伝統の技を盗むに五十年

校庭も広場も遊ぶ場所が無い

倉吉市 淡路 ゆり子

ベアルック年甲斐もなく似合ってる

ワックスをかけては少し若返る

真実は言わぬ積りのふところ手

子の盾になるには歳を積みすぎた

雷鳴へ一目散の新記録

倉吉市 猪 川 由美子

新二千円札あれは一体何だった

ゴミ出して流行のビールよく分かり

自分より目立つ女は雇わない

ケータイで街のでんわが廃れゆく

離縁にはきれいごとなど有り得ない

米子市 田 中 亜 弥

まわれ右うしろに母が居てくれる

夏豆をバリバリ食べて一人いる

封をした中味に悔いが残される

一生に一度とおれる道がある

小休止 愛をいくつも溜めている

米子市 光 井 玲 子

清流を泳ぎ切れない自己嫌悪

どうしても私の殻が破れない

くるくると人を信じぬトンボの目

孫たちと同じ目線にもう立てぬ

深山のみどりにそつと逢いにゆく

米子市 本 吉 宗 光

消費税二年たつたら倍になる

おかげさま内臓だけは丈夫なり

曲神戸生まれ故郷の唄である

当たり屋にうまく取られた十万余

お若いネ亡妻に言われたノゝ苦勞

米子市 青 戸 田 鶴

季節変るたびに大きな波がくる

女性みな支えていそう小泉さん

おだやかな友にあやかる日々である

自問自答しながら暦とつている

癒しの歌聞いて私も眠くなる

米子市 永 井 三津子

我身医者に託して麻酔深く吸う

体中耳に主治医の言葉聞く

母と言う仮面の裏に持つ弱さ

母の夢食べて私の今がある

詮ないと知りつつ消えた視力恋う

米子市 木 村 富美子

冷凍庫七つの海のおいする

あきらめた峠の花が美しい

たどりつく峠の茶屋で生きかえる

もめ事に一番ほしい父の声

夕焼けが忘れられない西の窓

米子市 澤 田 千 春

朝の海 生きる力を寄せてくる

おだやかな顔で出てくる寺の門

掌に私の進む道がある

晩酌が笑い袋をひいてきた

晩酌をしたか真つ赤な不動明王

米子市 中井 ゆき

水色のデルタの夕陽淋しすぎ
安心を頂きました阿弥陀の目
目をよめば本当のあなた見えて来る
後半生読みそこなったかも知れぬ
徹夜して読書あくる日ぐったんこ

米子市 野坂 なみ

まん中に曾孫ゆたかな家族の絵
老父がしたように土産は守り札
まだ老母の出番待ってる奥座敷
海と森 水は一つで結ばれる
岩穴は魚のドラマを抱いている

米子市 神庭 詩郎

本心が分からず少し距離を置く
根回しがあつたと知らぬ多数決
肩書が上座の席に来て座り
マンションが増え薄れゆく両隣
減反が続き美田も荒れて行き

米子市 白根 ふみ

北壁を裂くと氷室に突きあたる
北山をおりて露天風呂と語る
いい庭だ広いところを植えてから
要点を書いたら女神もう眠る
嬉しくて筆がおどってご免なさい

米子市 木村 春枝

深読みをしないと明日へ進めない
飼い主に似たのかポチに拗ねる癖
似て来たな丸い背中も亡母の歳
肩叩き似てらしたので御免なさい
お疲れさん晩酌が声掛けてくれ

鳥取県 西川 和子

改革へ応援したくなって来る
世直しへ清き一票捧げます
IT革命老いの頭に活入れる
婦人部の旅です妻を忘れよう
ふたありで笑えば福が寄って来る

鳥取県 岩崎 みさ江

紅をひくまだ終らない旅芝居
愚痴聞いて貰えるほどに娘は育ち
身を守る刺は秘かに茄子きゅうり
幸不幸 癌とは知らず友が逝く
旅人の憩う大きな樹を思う

鳥取県 土橋 睦子

初盆の仏も座る蓮の花
自然の気貰う緑の樹が伸びて
諸行無常わからぬままに経あげる
アツハハ山程貰うトマト籠
一途さにツンツン伸びる彼岸花

鳥取県 田 村 きみ子

誤解とけそれから昼寝とつくりと

シヨパン聞くさりと気分宙に浮く

煮ころがし母に合わせる塩加減

人が好きで指切りばかり繰り返す

ニラの花もう咲きました胃が重い

鳥取県 谷 口 次 男

本気では喧嘩をしない仲のよう

戦争はないがだるそう日本国

気力なら負けぬと歩く蟻の列

リストラよどつこい夢は持っている

くだらない話ただでも遠慮する

鳥取県 石 谷 美恵子

五時からの男よ僕は夜勤です

悪友の長所ジョークがすぐ返る

藤の花好きだが屋敷には植えぬ

封筒も色褪せ何もかも時効

くされ縁だろうか結び目は固い

鳥取県 太 田 幸 枝

玉串を捧げ新婚船出する

音痴だが楽譜が読めてピアノひく

合併で多くの友と磨き合う

貧しさに耐えた昔がなつかしい

大臣の顔に生気が甦る

鳥取県 津 村 八重子

真っ先に鏡にうつすいい笑顔

一時もたのしくしよう身のために

鼻歌で階段のぼる若い足

温い目で禁煙かこむのは家族

古くても思い出たんとあるかばん

鳥取県 国 森 武 子

古い帯柄色 技に息をのむ

木工を十年少し木をおぼえ

人妻と知らず恋した若い子よ

年取るとはこんなものかと朝や夕

何事も家族たよらず一人する

鳥取県 裕 寛 子

生きてるのから始まった長電話

することが皆ウラ返る一人ぼち

バスツアー話題ないまま雲と行く

要検査脅しにやのらぬ診せはせぬ

孫相手のせてのせられ過食気味

鳥取県 林 露 杖

追憶の東満の月はオレンジ

夏草や兵の日嗅いだ草いきれ

わが家にも党派があつて地方選

遠吠えの如く薄暮の選挙カー

店員の愛想に一品買い添える

鳥取県 乾

喜与志

鳥根県 堀江正朗

八月十五日とても大きな物語
戦時死のはずの娘が孫つれて
泣くことを忘れ禿げあたまで転ぶ
丸坊主なでて呑気な唄にする
定年の年金があり貯金あり

鳥取県 原

みさを

鳥根県 堀江芳子

漏れるところには張り紙をして笹の笛
生きてゆく武器の涙も枯れてきた
肩の荷の一人娘をとつがせる
嘘を本当にほんとを嘘に酒がする
ふる里の精霊舟が蛇行する

鳥取県 山本正光

鳥根県 森茂美

噴火でも地震でもない外務省
大山と四季を奏でる花回廊
悔い幾つこのした妻の墓碑あらう
腹の虫笑い転げて潰される
葬列の尻尾で遺産などのこと

鳥取県 権代康女

出雲市 佐藤治代

行き先と帰りの予定言つて出る
ぼんぼんと言うけど悪気などはない
ふんばつし出来た墓石の素晴らしさ
トラの子もタンス貯金で眠らせる
腰痛をこらえておれど口に出る

これも妻あれもと頼ることばかり
戦盲にとまどうニユース多過ぎて
白杖と心安らぐ道を往く
僕の愚痴笑い励ますのも主治医
打ち水の風のおいしさ庭の良さ
すまぬなあ言いつつ怒鳴る夫いとし
かもめーる みんな会いたい人ばかり
ご機嫌で飲んだ寝息に聞捨てて
ひとしきり降って止む雨ほめてお茶
車窓から拝む荒神さんの森
孫あやす顔は日本一のかお
貧乏性そんな夫婦の見るチラシ
盲いても声が見えます香もみえる
友だちの亡骸くわえ蟻の葬
虫がなく森の小さないのちたち

お姉ちゃんと昔を駄弁る花あかり
短足をうつして曲がるカーブミラー
何故だろう疑問符多くなる世相
私用の大きな椅子を買ってくる
過ぎてから気付く私の誕生日

出雲市 吉岡 きみえ

母上と書いた手紙が梅雨明けに
手なぐさめ植えたナスビをもてあます
唄って踊って平和の鐘を撞いている
笑うなら大きな声でワッハッハ
初生りのトマト仏よ召し上がれ

出雲市 青山 久子

口下手でいつも反省ばかりする
石投げて水の深さを確かめる
ポケットにいつでも振れる鈴がある
そして今老いて静かなエビローグ
枝先のスリル楽しむこともある

出雲市 小白金 房子

敵味方もたぬ紫陽花まるく咲き
花屋には花の心が満ちている
美容院の椅子で安堵の舟をこぐ
早朝の願いかしわ手強くうつ
滑らかな言葉で打診されている

出雲市 小玉 満江

海開き海岸通り活気づく
斐伊川の水が濁って雨走る
すらすらと世界の国名天才児
忘れ物厚底靴を追っかける
露天風呂が二匹大騒ぎ

出雲市 竹治 ちかし

一括り雑草という逞しさ
青春の匂いを貰う青い空
親しみは家紋が同じだけのこと
自然体なんにも怖いものはない
人間と暮して糖尿病の犬

出雲市 板垣 草丘

エアコンの排気 庭木も暑かろう
寡婦五人残る五人と兄弟会
洗濯が乾かない日も息子脱ぐ
急患は隠岐からだろウヘリポート
同じ日の句会に袖がちぎれぬように

出雲市 岡 あきら

カラオケの操作疲れる慰労会
クローラーより話の好きな青田風
ブライドにもう暇をやり群れている
サラリーの差額は知らず神巨戦
基敵へ先ず電話する雨の午後

出雲市 板垣 夢 醉

意地と意地顔には出さず胸で燃え
何もかも友に話して身の軽さ
度忘れを女同士で笑い合い
料亭の打ち水 心誘われる
母ゆえに重箱の隅つつくなり

出雲市 園山 多賀子

背伸びする歳ではないと自己暗示

咀嚼して愚痴は再び胃に戻す

白い足袋女のいくさ未だ続く

花柘榴つぶらな夢に甘んじる

散るべきを知るや知らずやカンナの朱

出雲市 久谷 まこと

ひたむきに生きる足腰湿布貼り

小銭入れすぐに嵩ばる消費税

運不運いく度出会う生きる道

嘘の一言 釘が効きすぎる

言葉じりピンと上がった低気圧

出雲市 城 多喜

風は気儘今日もわたしを弄ぶ

ふり返り道しつかりと跡がある

むき合ってただそれだけの刻といふ

につこりの遺影につこり返せない

雑踏に狐狸とまぎれ込む

松江市 佐野木 みえ

湧きいでる泉に白い手が白く

一杯の水に蘇る長ランナー

出雲路の名水尋ね今日も来た

海までの距離は歩いて丁度いい

一歩ずつ登った山を振り返る

松江市 津川 紫晃

新しい夢を産声からもらう

この仮面はずせば元のお人好し

水虫にもうすぐ夏と教えられ

返り血を浴びない位置で憂さ晴らす

言葉より笑って返事する効果

松江市 銭山 昌枝

真つ直ぐに切手貼るのも難しい

大事なものを守るためなら嘘も吐く

ときめきを残して古希のペアルック

清貧に幸福の木が繁り出す

再会へ相手好みの服を選ぶ

松江市 川本 畔

割れ落ちた皿の涙が止まらない

わたしより疲れた靴が歩き出す

かくれんぼしながら月を歩く道

足許をどんどん逃げていく青さ

酒の酔いとんだところでひびき出す

岡山市 小林 妻子

葬式もお墓も釈迦に叱られる

鎧は抜ける心配だつてある

再会が仏間になつて悲劇

帽子だけ阪神になる草野球

リストラ百姓とつても下手な頬被り

岡山県 富坂 志重

台所悲しい日にも湯氣を立て
こんどこそ土産のいらぬ旅に立つ
口だけに弱い体を支えられ
憧れを胸にたたんだまま八十路
街角で旧姓呼ばれビツクリする

岡山県 矢内 寿恵子

ささやかな幸せ何時まで続くやら
雑草で生きること世は風任せ
浮雲にまぼろし浮かぶ空の青
ゆらゆらと亡母の浄土に蓮が咲く
ひたすらに磨く心と写経筆

岡山県 山本 玉恵

余命表と加減乗除の預金帳
美人ではないがブスでもないつもり
暑いさむいとひとりの体の置き所
久し振りはんのり匂う妻の髪
むらさきも赤も似合うて翔び上手

岡山県 大石 あすなろ

沸点のままで怒りはおさまらず
ちよつとしたはずみで乗った口車
タクト振る昭和一桁まだ主役
ブレーカー パタンと落ちて熱帯夜
生傷にふれてくるのは低気圧

岡山県 福原 悦子

お隣へ乱れぬほどの車間距離
期待せぬ客にリズムを狂わされ
人生の歩いた道に地図がない
再会へ照れ笑いして名が出ない
煩惱を捨てたい雨に濡れました

倉敷市 井上 富子

マイカーの旅は気ままな予定表
友達になりたいような笑い声
贅沢は言わぬ質素なフライパン
華やかなドレスと踊る薄明り
慎ましい花が咲いてる裏長屋

竹原市 三宅 不朽

父の語をやりわり母は子に訳す
だれよりも大きな拳もつ父で
走馬灯孫も黙って膝に来る
濡れてよし母子がはずむ水溜まり
カンナ炸裂遺産でもめる盆が来る

竹原市 時広 一路

運転手は孫で縄電車が走る
次はなに入れてあげよか握り飯
ハープの香脳の洗濯してくれる
人の面 鬼の世界に有るらしい
水平線目指すわたしの手漕舟

竹原市 岩 本 笑 子

飼い主に少し似ているネコである
手が二本あるので今日も飲んでいる
バラの道 貴婦人という香をまとう
海を干す夏の顔してタコゆれる
回り道だろうか時計また見つめ

竹原市 石 原 淑 子

あけぼのの光のショーに酔いしれて
雑草とよばれ嫌われひきぬかれ
学名もちゃんとあります草主張
花と実のコーディネートが茄子おしゃれ
炎天を避けて夕顔愛ひらく

竹原市 古 谷 節 夫

尾道の海が見えます師の句碑よ
師に会えるこの坂道よ石段よ
尾道の海だ美美子に会えるかも
甘えてはならぬ妻には刺がある
妻のメモ命令形と少しラブ

広島市 森 田 文

若者も交じる釣り師の明けぬ浜
釣った人も釣れないひとつも釣談義
責任の軽いことばが受けている
子宝の湯は熟年の組で混み
祝卒寿しきりに過去を懐かしむ

宇部市 平 田 実 男

淋しさは叱ってくれる人が減り
プラスにもマイナスにもなる酒が好き
ミス着物帯は他人の手を借りる
結婚を前提とせぬから楽し
歳の順だから座れた床柱

美祿市 安 平 次 弘 道

一線を越えると女強くなり
陽は西に殺意はとうに消えていた
アリバイはないが昨日も生きていた
天国に行くには修行まだ足らぬ
七人の小人ちよっかい掛けてくる

唐津市 山 門 幸 夫

タツチの差トマト烏に先越され
番鳩 春夏秋冬庭で恋
梅雨晴間田舎香水風に乗る
干し物を早く入れると梅雨蛙
御中元酒ビン並べて悦に入り

唐津市 山 門 夕 ミ

私の人生幾何代数はいらなんだ
夫婦共読み書きソロバンあの世まで
借金と何であの世に持てぬのに
知らぬ間に天をついてた竹竹竹
苦闘越え熟成されたい夫婦

唐津市 久保正剣

小泉よりでかい巨泉を担ぎ出す
特養で老いる悲しさ見てしまう
倍にして返す台詞の賭場通い
灰皿はもう備品ではない会議室
八人を殺した事実だけ裁け

唐津市 山口高明

近道と朝の学童群をかけ
面籠手を外すとおんな匂い立ち
メール友 柱の陰で吟味する
鏡には写らぬ貌もある女将
イタズラな風が盗んだ娘の下着

唐津市 井上勝視

余命など考えもせぬ挿し木する
ふっ切れず今宵は長い経を読む
瘦せたネと見馴れた妻がポツリ言う
生前を美化して囲む鯨幕
落書きをやめぬ右手が好きである

唐津市 仁部四郎

新聞がちがい総理の値がちがう
もう一紙 新聞を読む立ち話
食言を重ねてはすむ立ち話
難病救済判決というお墨付き
お墨付きの壺鑑定には出さぬ

唐津市 市丸晴翠

封印の小箱が風に歌い出す
今日もまたあつてはならぬニュース聞く
真夏日を草書で過すこと覚え
涼やかな父の遺影が問いかける
幼児に戻った母と指相撲

熊本市 永田俊子

やさしさをうれしく止めるホッチキス
うしろ手に戸をしめ断ち切る今日のミス
しみじみ独り葡萄一粒ずつの味
大正の風つれてくる渋うちわ
パンドラの箱開けるなど鳩が言う

熊本市 岩切泰子

採りたての茄子を褒められ分けてやる
宿題をやつてないから目を伏せる
光る物ちよつと着きたい六十路坂
ご多弁に呆れて目と目サイン出し
立腹の限界 夫へ貝になる

熊本市 高野宵草

もぎたての胡瓜が甘い隣人愛
人類に核が天敵かも知れぬ
散骨という手もあった天の川
末期の血吸わせてやって蚊を叩く
汚されて地球だまって見ていまい

北九州市 梅田宣司

香川県 成重放任

戻り梅雨 暑中見舞を書きそびれ
患者食盛りつけさえも味の無さ
カロリーの単位単位の糖Ⅱ食
一番に家族に電話胃かいよう
手掴みで選り出したる運でした

香川県 池内かおり

口程に動けばスリムになる身体
俄雨 善意の傘が見当らぬ
チケツトが届いて阪神巨人戦
冷房に神経痛が顔を出す
ステテコがウロウロしてる休刊日

香川県 清川玲子

真つ直ぐに歩めば世間恐くない
ゆつくりと話せばしこり溶けてくる
色紙も折って手を貸すボランティア
長々と挨拶されて誰だった
軽かった初産少し拍子ぬけ

香川県 瀧井勝

美人来て暑い上着を引っかける
西瓜盗る夏の鳥も暑からう
夏水仙 我が世の春の顔で咲き
吹っ切れた男行く手に躊躇せず
身に覚えあるので脅し効いている

少子化に雷おやじ姿消し
六甲の水 外人が先に売り
苦渋にも耐えて白髪夫婦みち
雨傘が日傘に化けた旅の空
毎日の暑さ夏枯れ呼んで来る

香川県 川崎ひかり

碧い海色とりどりの夏帽子
葬式で年金話に花咲かす
墓地を買うぐらいのお金貯めてます
ほどほどでいいよ毎日暑いから
白旗に悔し涙のあとがある

香川県 神保坊太郎

時どきは呆けた真似などしたくなる
恋人に心の襷をはじくられ
八十六こんな半端じゃ死なれない
天の川で君と拾った星の砂
噂より早い地獄耳を持ち

松山市 宮尾みのり

上にまで届かないからこそ本音
団体ツアーさみしがりで盛り上がる
売約済みへほっとして見る絵画展
今風な仲で別れるのも早い
泥舟に乗った狸が喰えない

松山市 丹下 美津子

背伸びはすまいわたしのレベルこれぐらい
痛いなあご免ごめんと注射針

サヨナラして何故か心に残る背な

改革が進む前途にある不安

再出発ゼロから進む靴を買う

愛媛県 中居 善信

B29の数を数えた少年期

八月やリングの唄を歌ってる

六十を過ぎてても妻は妬いてくれ

背伸びした男がタクト振りたがる

べらべらの男に腹を立てている

高知県 赤川 菊野

ふっ切れた後の夕日が美しい

母の愛ひとりじめして介護する

好い事は何にもないが米を研ぐ

母子手帳 一度も手にした事がない

特大の笑い袋を嫁ぐ娘に

横浜市 小野 句多留

絵ハガキの氣にいったのはとっておき

生返事それでもくれないよりはまし

直帰り称して四時の縄暖簾

初孫に夢中の妻にオーイお茶

ポイ捨てにベンツの窓が泣いている

横浜市 菊地 政勝

戦争を知らない妻のカボチャ好き

エアロビを終えて仲間とケーキ食べ

若者と笑う入れ歯が噛み合わせぬ

今日もまた誉めたおかずが責められる

ブランドのバッグ誇示するクラス会

横浜市 保田 絹子

七夕の星天率に愛を賭け

乱気流抜ければ青い空がある

北海のゴメも漁師もウニ狙う

幻のレブンアツモリ草に会う

買わないと言って土産を増やしてる

横浜市 田中 笑子

旅の夜病談義で幕とじる

飲む程に敬語とんでく仲となる

良い笑顔ふるまう過疎のおばあちゃん

真ん中にまだ座れない嫁の位置

食べ歩き妻に従う老いた脚

横浜市 山下 省子

定年後なお氣を回すお中元

主婦業に希望退職ないだらうか

脳ミソの摘出手術ないかなあ

いい歳もブルーベディキュアどこ行くの

他所者にしないで句会の御歴歴

静岡県 蘭田 猿香

新世紀こんな力残つてた

空梅雨に作物挫れて草が伸び

朗報を聞くと祝儀をはずみたく

卒然と長寿二人が逝く暑さ

空腹を満たすだけなら回転寿司

富山県 増田 紗弓

妻無風戦闘開始準備中

どうせ礼言なら一くちより十くち

風任せ蜘蛛には蜘蛛の策がある

電話機の向こうにもいたひとり酒

人生の旅でみつけた自由席

富山県 島 ひかる

引き返す勇氣に氣付く登山靴

松かぜへ無我になれよと朱の袂紗

指切りを忘れたことのない港

生きるとは愛しい人と居る時間

このままでいいのか歳をまた重ね

弘前市 岡本 花匠

さんさんと手話コーラスの満ちる愛

新じゃがの顔 貌 がおに有頂天

妥協して未来へ和む鬼の面

自我の芽を摘めず合掌岩木嶺

今を生き感謝を詩う揚雲雀

弘前市 蒔苗 果林

生きたいか死にたいのかと山笑う

逝きたくば早いが勝ちと背を押され

素裸になれば迎えが来るだろか

温泉に垢を流せば立つ気力

ながらえるほどいいとおしいのこり時間

弘前市 高橋 岳水

今生の絆確かめ合う介護

団欒の余韻を映す窓明り

被爆死の魂宿るホタルの灯

草に寝て十五の頃を咀嚼する

終業のチャイムへ耳朶の身繕い

弘前市 宮崎 ヒサ子

まっぶたつに割つた心に見る本音

七月の北を見たさに海くぐる

啄木碑遠い海鳴りきいてくる

背のびせず淡々とゆく我が歩幅

迷わずにいつ気にも夏を駆け抜こう

弘前市 小寺 花峯

星が酔い月が眠れぬ祭り笛

砂浜の水着を求めるサン格拉斯

三合の酒に人格ポロリ落ち

ときどきは野生のままで生きたくて

秋少しネブタ棧敷に見え隠れ

参拝をしても隣国よく騒ぎ

弘前市 須郷井蛙

スピードを守る運転安堵させ

少子化に子が宝石に見えてくる

ママの留守パパの見事な目玉焼き

ブレイキを父が見守る人生路

弘前市 相馬銀波

花影を残しロマンの無人駅

友見舞う面会謝絶に立ちつくす

絵手紙に旬の野菜を詩い上げ

占いの小銭が沈むまで祈る

糸電話児等の本音を待ってみる

弘前市 今愁女

夏風邪の咳こむ胸の裂けるよう

酒好きの墓に供える純米酒

仏前にカラフル酒瓶の詰め合せ

独り焚く門火に来ますいく仏

門火消えさらばさらばとさびしがり

弘前市 一戸ツネ

老いてなお明日の出会いのスケジュール

知らぬ夢追いかけているひとり酒

五勺の飯 仏と分ける朝の貌

嘘ひとつ感情線が太くなる

締めくくるその日その日の無量心

仏滅の大特典のブライダル

弘前市 福士慕情

書棚からどっこいしょと広辞苑

繋がれて人恋しさに吠える犬

旬の味知ってる猿が畑に出る

ライバルが見えてアクセル強く踏む

砂川市 大橋政良

雑兵のいのち消耗品になる

道草を覚えた父に艶が出る

蜜一つ出ぬのに蝶々離れない

遠吠えをするが噛みつくことはない

輪の中で一人ぼっちの椅子になる

十和田市 阿部進

子守歌聞けば古里想い出す

かばい合いいたわり合って喜寿迎え

居酒屋に元気な雑魚が群れて居る

本音だけで生きて行けないバーのママ

草餅がよくできたのでお裾わけ

青森県 西谷大吾

足跡を消しても影がついてくる

レントゲンいのちが透けて寒々し

陽炎にこの世の果てがぼかされる

遠い日の記憶の底の炸裂音

砂浜を掘って埋もれた夢探す

弘前市 櫻庭順風

京都府 丹後屋 肇

一気飲み生死が喉で絡みあい
一気飲み町を挙げてのお祭り日
一気に飲んだ盃に酔いしれる
ゲートにもなれず一気飲みに溺れ

十和田市 小笠原 敏 人

貸与した田圃の辺り散歩する
塗り替える好機をいつも追い続け
友人知人一気に増える選挙年
資源ゴミ汗の分別歌流れ

さいたま市 八田 敏

背が屈み腹出て亡父の体形へ
夏風邪に予約していたよう懼り
選挙権ないのも燃えて参院選
暑気に耐え秋夢見つつ菊つ

富士宮市 渥美 弧 秀

抜いても抜いても庭の雑草
夫の軀に夜明けからまた不眠
医者に縋り詩と音楽の米寿坂
初皇子を待つ国民の大歓声

富山市 酒井 輝

腕時計正確過ぎて気忙しい
床柱捻れたままで活きている
拾い読みして真心の母に触れ
独りして仏間で語ることがある

手の甲にナース数値の走り書き

胃カメラに写る恋患いの痕

看護婦に麻酔のままの身を任す

ダンボール箱に詰め込む忍び恋

奈良県 渡辺 富子

あの星にきみとわたしの予約席

夏を病む母にせめての金魚鉢

夏季講座 最前列で舟をこぐ

心の垢ほろほろ落とし聞く法話

海南市 谷口 義男

老いたとて不倫して居る夢も見

友達であつても本音で言えぬ

損得を捨てれば迎え来る浄土

山程の珍味を前に迷い箸

豊中市 岸田 知香子

暗やみに無灯火出合い立ち止まる

年と共にバランス悪さ思い知る

喜寿の坂 元氣印がケガで消え

豊中市 湯浅 馬洗

クリニック 老いのサロンのように見え

まじないの防犯札に留守まかせ

ローマ字のJCばかりきゅうり畑

人の子も脇芽摘みますトマト並み
朝露に三文の得知るきゅうり

吹田市 野下之男

大阪はせわしてならぬ観覧車

雑技団 技と汗には手が痛み(中国)

口先で蒔かぬ種まで生えてくる

キムタクに少し似ている電話口

枚方市 二宮山久

初産の娘待つてる里帰り

お隣が息子夫婦となるローン

定年がまちかになった妻の愛

あと少し定年刻む腕時計

大東市 児玉蛙

春雷に忘れられない人がいる

風ひいたとまた催促の卵酒

オルゴール蓋を開けるとさみしさが

愛された昔の吾にかえりたい

守口市 結城君子

茄子きゅうり産地見くらべ色比べ

カンタンな男料理の彩に酔う

買わねば損するかばちの黄いろ

買ひ物の最後はくれないの薔薇

守口市 井上桂作

一言の嫌みもいつか糧となり

線路わき騒音いつか二十年

鼻毛まで白髪になったお爺さん

何色で梅雨が明けるや紫陽花の

八尾市 篠原いつふみ

歯の痛み妻の軒でなお疼く

君のため断わっている保証印

サンガラス取ると小さい可愛い目

言い勝ってそれから後の苦い酒

大阪市 安達はじめ

青春に召されて鉄の雨に遭う

ロボットが見事鳴らした大太鼓

孫抱いて見栄を張ってる宮参り

信心と遊山を兼ねる老いの旅

大阪市 杉澤汀

犬はハウス妻は居眠る午後三時

むこうから喜寿が勝手にやってきた

どんとこい男の城の床柱

まだいける叩いた腕の力瘤

大阪市 清水絹子

姉に会うそれだけでいい星印

年年歳歳姉妹の友も友達に

省令に蛙も途方休耕田

受話器取る前に思案の箇条書

堺市 黒田真砂

ヘルパーさん優しく娘ふえたよう

苛立ちを押え水中花と対峙する

流行に敏感 娘の服筆笥

庭散歩、心をいやす小半刻

和泉市 西岡洛醉

底辺の砂漠も生きる貌がある
年金の自負それなりの道進む
無為無策 日記の白が攻めて来る
引出しに野心収めて古希を過ぎ

岸和田市 田口穰一

握手して票入れたのは別の人
ヤアヤアと笑顔ふりまく選挙戦
世話かけて当選したら知らん顔
開票の前に結果が出る不思議

尼崎市 的場十四郎

すこやかに動く五体は宝もの
もうあかん言って飛び込む赤のれん
雨たのし傘一本に寄せる肩
好きなことできて楽しい八十路坂

西宮市 刈田泰司

絵にならぬ男二人の雨やどり
友の社の上場祝う二〇〇株
友と逢う安定剤になる笑顔
乾盃のコップよ気取ることはない

西宮市 菊池トミエ

雨しとど紫匂う菖蒲園
過去の夢思ひ出させる月見草
異人館過去はまばゆい街神戸
遠距離も電話の声はすぐ隣

鳥取市 西村黙光

指先が老化現象映し出す
講師より孫の実習身に響く
パソコンが思い知らせる石頭
パソコンで夢の世界を漫步する

鳥取市 前田一枝

返事にも二伸の方が長くなる
粗大ゴミ捨てるつもりをまた拾い
選挙前 今一票に声もかれ
垣根越し覗き見る花美しい

鳥取市 富山檳榔樹

一病壮健背負う老いの身風温い
無限への道 悪魔に仏道連れに
生涯を哀歎で盛るコント編
思い出を充電してる老春期

倉吉市 山中康子

朗報に胸のつかえがどつとおり
朝市の新鮮母をよろこばせ
うなぎ食べ腹をくくって夏の陣
代償は求めぬ母の瞳が丸い

米子市 門脇晶子

亡父の胸中をいく度読み返す
一つずつ忘れる姉の数え歌
地震から不安の続く街に住む
安心の出来ぬ検査がまだつづく

鳥取県 奥谷 彩子

五百羅漢 千の眸に癒される
胸の炎隠して丸く輪に融ける
自動ドア今朝の元気を計られる
いい友といいカクテルでいいパーティー

鳥取県 黒田 くに子

川柳の友に肩書など要らぬ
仏花替えて心みたしている祈り
方言がいつぱいつまる里の駅
難聴も手話のぬくみへ助けられ

鳥取県 近藤 春恵

念仏に送られ永遠の旅に立つ
咲き誇る花へたつぷり水をやる
風向きがいきなり女夜叉にする
昼の月パン食い競技見て笑う

鳥取県 橋本 多哥由

七人の敵を味方にする凄さ
困り果てあちこち回り婿もらう
老いてなおバラ一輪に恋をする
泰平の夢に封して芝居する

鳥取県 吉田 孔美子

日本地図広げて風になる夜半
熱弁に呼応黄色いつむじ風
花の譜の庭を義父からもらい受け
葬式は数え切れないまだ続く

松江市 小川 注湖

ダイエットうまく続けるわが財布
ラインダンス ロケットという伸びる脚
宍道湖の夕日自慢の出雲弁
議員談 金返したと軽く言う

松江市 安食 友子

心痛がりんりんんでけろっとした
すたすたと去る未練追うプラトニック
いそいそと臍繰りが歩いてばれた
自慢たらしいが摩周湖に霧がなかった

出雲市 富田 蘭水

肩書きを捨てて奔放生きのびる
曇天に慣らされ決断ふあふあと
モニターになると良い事ばかり言う
さくらんぼ どうしてベアを見てる

出雲市 石倉 美佐子

此方から彼方へ渡す千鳥掛け
しっかりと心を決めて玉結び
かな文字に確かな負けを意識する
針千本飲む約束も反古にして

鳥根県 伊藤 寿美

鶯の片言を聞く過疎ひとり
洗い残した薺が乾かぬ梅雨最中
投げ捨てた言の葉 風に拾われる
どんとと歩いた道だ振り向かぬ

岡山市 井上 柳五郎

玉音のとぎれとぎれをあの日聞き

女系家族ひ孫にやつと鯉のぼり

新世紀覗けた竹馬友僅か

年金に似合うた軽い贅をする

岡山県 荻野 鮫虎狼

姑の自慢 明治は良き時代

浄土まで巡る札所の風に乗り

特売日女財布の口広い

意思疎通したか無言の花贈る

高知市 北川 竹萌

卒寿くる長い世渡り糧として

五十年無事故運転免許証

早起きへアメリカ芙蓉大二輪

野牡丹の良い苗 女友にくれてやり

唐津市 樋口 輝夫

横文字の好きな息子はパラサイト

携帯のメール飛ばしてカンニング

三面にはのぼの嫁の介護談

乳首からDNAが湧いて出る

日時—10月3日(水)17時開場 18時締切

会場—サンケイビル本館3F 千円 席題なし

題と選者—△初・山本希久子△群れ・榎本信治

△すれすれ・川島諷云児△激しい・磯野いさむ

第11回「太平記の里」全国川柳大会開催要項

主催 太田市・同市文化振興事業団・同市川柳協会

後援 太田市教育委員会・(社)全日本川柳協会ほか

日時 12月2日(日) 9時30分から 締切11時30分

会場 太田市福祉会館(0276-4518291)

東武鉄道伊勢崎線太田駅南口下車徒歩10分

第一部(当日参加者)

課題及び選者・各題2句詠とし表現方法自由(但し新作

「開く」今川乱魚・「逃げる」川俣喜猿・「平然」

竹本瓢太郎・「掌」荻原柳絮・「心」羽田桐柳・「渋

い」田中寿々夢・「マンネリ」太田紀伊子・「掘る」

てじま晩秋・特別課題「暴走」木村伊須夫

参加費 2000円(昼食・発表誌呈、当日払い)

第二部(郵送での参加者)

宿題 「探す」選者 斎藤大雄(北海道) 関水華(神

奈川) 大野風柳(新潟) 西来みわ(東京) 橘高薫風(大

阪) 磯野いさむ(大阪) 山本翠公(大阪) 小松原爽介

(兵庫) 吉岡龍城(熊本)

応募方法 二句詠、参加費1000円を添えて郵送

第一部、第二部の特選句の中、最優秀句の句碑建立。

前夜祭(5000円) 出席・宿泊の方はお申込下さい。

締切 9月29日(土) 当日消印有効

申込先 〒373-0851 群馬県太田市飯田町八一八

「太平記の里」川柳大会係(TEL0276-4518291)

自選句

橘 高 薫 風

田 口 虹 汀

句碑除幕先ず人情の除幕から
師の背なを流さんばかり酒供養
この歳で屁糞葛の仲間入り（腸閉塞を病む）
いつまでも肚のくくれぬ役者かな
五十年花径辿れば香爐峰

八 木 千 代

両 川 洋 々

手立てこそしたが不安な旅支度
山また山のバスと折り合いつけながら
ふたたびは望めまい尾道の坂
情熱の碑からひろがる夕映えよ
事なく昏れて空が白めば去に支度

野 村 太 茂 津

藤 村 女

書き損じばかり書齋で嘘ばかり
亡父が呟く机に一つ疵がある
星は流れて骨壺の砂が呼ぶ
汗を洗って九月の午後は逢いに行く
せめて九月はセンチメンタル恕されよ

石に彫る詩は三途の川で詠む
神仏へのお茶とお水は僕の役
未熟さが詩に頭脳を傾けぬ
解らないから逃さぬ政治座談会
小泉さんの動きをじつと見てるだけ
休耕の土から果し状がくる
水溜り空の青さと仲が良い
根性がないから鬼と手をつなぐ
善人を君は演じるから凄
芽の出ない僕が根腐れしたらしい
縫いかえて亡母の匂いを着る結城
どの塔も歴史の匂いしてる寺
趣味一つ抱いて豊かに母は老い
さわやかな朝が欲しくて窓を拭く
野の仏包むたわわな彼岸花

西田柳宏子

生きてゐる悦び冷水が美味い
亡父譲り頑固で涙もろいとこ
子の育ち無理に矯めればすぐきれる
二〇〇八年大阪五輪夢と消え
会議室黙りこくつてゐる地雷

森下愛論

寂聴のテープで熱くなるころ
幾千の愛の昇華をうけて飛ぶ
今日孕み明日を背負うて陽に飢える
叛かれて人間像を無為にする
汚染した雨にうるんで酔えぬ酒

越智一水

一〇〇年祭子規が素顔を見せつける
南無大師へんろの道は欲を捨て
軍隊でおぼえたボタンだけはつけ
友は背で笑つて勇氣つけてくれ
あわてなとまた風邪を引く衣更え

正本水客

湧き水のように話がとぎれない
まだ続きあるのかお茶を入れに立つ
定年になつたらなつたらという話
葱さざむ音になつかしさがある
昔むかしで始まる話まだつづく

芳地狸村

ジュリエッタの像にカメラが忙しい(ヴェローナ 5句)
二千年オペラが生きてゐる遺跡(アレーナ)
いろいろの傘がひろがるひるの市(エルベ広場)
思索へと静かに誘うダンテ像(ジュネーヴリ広場)
ロマネスク誇るドウオモの建築美

木村あきら

地球儀を洗う恵みの雨が降る
碧空へ天を目指しているヒバリ
激流を小舟で越えて来た翁
ヌルマ湯に浸ると視界狭くなる
転がると重い命が飛んでゆく(タンボボ)

工藤吟笑

院の庄桜の幹に十字の詩
老い桜まだ咲かそうと灰を撒く
折り返し点から夫婦仲がよい
日本晴信じて生きる車椅子
街路樹に睨まれている排気ガス

恒松町紅

弁当を開き胃カメラ呑む話
川端にトンボが居ない塾通い
歳のこと忘れ止まらぬ夜行性
醜聞へ辞める気配のないバツジ
風鈴も諸行無常と鳴つてゐる

舟木与根一

メークインと言うじゃが芋の肌に惚れ

夏帽子戦争などは知りません

お地蔵に出合い息抜きする古利

日めくりがいつも遅れる隠居部屋

八十路坂見えて同期をまた亡くし

野田素身郎

目が覚めた生きていた今日一日を楽しもう

雨の日は悲恋物語でも読もう

多くても少なすぎても困る雨

夏やせの始まり梅雨のむし暑さ

新刊書帯つけたままそのまんま

斉藤 昴

鬼灯の花としつとりした話

ふる里の話が弾む蕎麦枕

夢売りが帽子に摘んだのは苺

えんどう豆こんもり採れて誕生日

スピードを落とそうラベンダーの道

玉置重人

菖蒲園ノルマを越えた万歩計

目標はまだ先に置く万歩計

クーラーの音がいつそう暑くする

駅員の倍は働く改札機

補助輪を外し天下獲った顔

河井庸佑

感情に走り正道見失う

子と思う心通わず悩む母

さりげない気遣いを知る苦労人

筋書きの通り行きすぎても不安

余計なこと口にはしない二度の職

黒川紫香

梅雨どこに尾水道晴れに晴れ(句碑建立に参加して)

無念なりはるか句碑を拝むだけ

師を偲ぶ名句吟風を呼ぶ

尾道にまた一つ建つ文学碑

しまなみの波音聞きつ夜を寝る

月原宵明

口笛が昔のように鳴らぬ森

昼寝から覚め雑草が真つ青だ

片減りの靴と出会うたのは茜

左遷され疑似餌の釣りに凝っている

わが村を茜に染めて寺の鐘

遠山可住

山掛けばみな富士になる幼稚園

余生もう迷うことなし古希の愛

十円の差をスーパーで迷っている

にんまりと妻が着こなす特価品

好きすっぱ飲んでた方が生きている

土橋 螢

人間万歳乾いたら水を飲む
羅の女ごころは恋ごころ
魔を抜ける空念仏を高らかに
負けん気の男に捧げる飯を炊く
晴れくもり満ちたら欠けるお月様

宮口 笛生

梅雨あいて蟬オクターブ声を上げ
梅雨あいて冷しそうめん旨い昼
梅雨あいてビヤガーデンの生ビール
梅雨あいて夏本番の海の人
梅雨あいてプール子供の声に湧き

小西 雄々

不夜城に目的があり昼寝する
人妻も聖女と魔女がいるだろう
勇気づけしたのは私細い眉
日に一度スリルを追って若返る
モナリザの微笑へ足搔くのはよそう

川島 諷云児

花火師のいのち夜空を染めあげる
食べて寝て起きて一日無為無策
色恋はとうに卒業食い気だけ
夫婦でも一足す一が二にならず
さあ今日も歯科に眼科に針きゅう院

竹内 紫鏑

技師は流暢 スライドの暗がり
西暦の引き算に慣れ高齢者
西暦に言い換え昔話する
足と眼で学ぶ濾過池の透明度(水道週間 2句)
太陽電池の矩形も光る浄水場

藤井 明朗

節約我慢そこに景気の芽が伸びる
生めよ殖やせよ二十一世紀の政治
病院の出入り栄える過疎の町
親の無慈悲を涙のまま果てる
健康な笑いを忘れている日本

八十田 洞庵

潮騒は憤怒の父に聞こえぬか
夢遊びせんとや花の下に住む
丸まった石に流転の秘話がある
しみひとつ抱いて気おくれする女
人間の悪知恵地球腫瘍抱く

西村 早苗

安定剤飲まずに済んだ雨の音
一合の冷や酒ほしい五目そば
目の高さ合せて誘うトンボ採り
折り切れのハンカチ英恵で捨てられぬ
手折られぬ花眩しくてそして散り

波多野 五楽庵

守護霊の一人は母でいて欲しい
ひらかなでやんわり釘を打ちにくる
葛藤や時々違う茶の味覚
釈迦の手の中で汽笛を聞いている
弟切草 敵はきつと取つてやる

小林 由多香

食べて寝るだけの暮らしへ陽がのぼる
何が気に入らぬか苗が伸びなやむ
五線譜にわたしの夢を踊らせる
何事か夫婦そろつて出ていった
成人式迎えて髪を黒くする

石川 侃流洞

エプロンの白さに映える茄子の色
まだ死ねぬお迎えも少し飲んでから
野良猫ゾロゾロ町内温い人ばかり
これからのことしんみりと老夫婦
逆立ちに構えて蜘蛛の待つ殺意

堀端 三男

人間は弱い悪い方へと連想す
以心伝心言葉のいらぬ老夫婦
ご苦労さんのひと言で足るボランティア
梅雨晴れ間選つて見舞の梯子する
ゲームでもする気で犯すひつたくり

榎本 吐来

午後夕べ明日へ流す懈怠感
口論が支えてくれている夫婦
姪婿の葬儀に癒す言葉無く
スナックへ義理人情が運ぶ脚
本音には遠く律義な苦笑い

阿 萬 萬 的

苦労性何かこまごまメモしてる
まとまらぬ思案くすぐる蟬しぐれ
下手な洒落相手が傷つくとも知らず
Tシャツで老いに鞭打つ万歩計
八十路坂きれいに死にたいとも思う

板 尾 岳 人

独語で小さな声でサヨナラ(奥田みつ子氏の夫君)
母という文字を辞書から消して逝き(友人山中勉氏の母室)
木曾川の水豊かなり昼の闇(東野大八先生)
末永く直哉と近所付き合いだ(路郎夫妻句碑建立)
いつ来ても母に逢えます風の盆

河 内 天 笑

蹴とばしてやりたいヘルスマーターめ
禁煙は出来たが禁酒むつかしい
旨いけどビール一杯だけにする
記憶力ためすゲームをくり返す
足の裏揉んだら軒かく妻よ



板尾岳人選

横浜市 長島 亜希子

東京都 清原悦子

元氣そうなんて言われる歳になり
父の忌に母はベッドで手を合わせ
スリットを深くしようか夏が来る
行動を逆回しして探しもの
いい人ができたか貯蓄気にしだす

横浜市 川島 良子

ひまわりと笑顔を交わす散歩道
深夜でもノックは無用Eメール
生きているだけでうれしい母見舞う
片隅のホットなニュースなごむ膳
墓参り貴方の好きなサクランボ

札幌市 三浦 強一

内視鏡一年間の罪と罰
正直な鏡で皺に嫌われる
下駄箱に歩き疲れた父の靴
セールの話術に乗った無駄遣い
青信号蟻一斉に出る一步

心配もあるが門出の披露宴
友が来て部屋が温かい
寄り道もプラスされてる万歩計
泣き顔に目をつけられた一目惚れ
栄養になると言われて食べ過ぎる

青森県 福士 トキ

今日よりも明日の命鋏洗う
帯紐をきり結んで女出来
郭公の声を背にして草むしり
見て来たい三途の川の橋の色
縄とびも三日坊主のダイエット

河内長野市 大西 文次

言う方も言われる方もいい加減
隣よりやや高くするうちの塀
我が胸の鬼をしつかりしばり付け
外泊でやっともどったうちの猫
あいた口塞がりそうにない世相

岐阜市 平野 あずま

横浜市 近藤 道子

古里の水は癒しの味に満ち
梅漬ける母の動きがリズムカル
Uターン等身大の夢が待つ
砂時計さらさら過去を振り向かぬ
I Tの風は我が家を除けて吹く

藤沢市 妹尾 安子

動くなと命じておいて蚊を叩く
新しい風にはすぐに乗る若さ
文字どおり裸で再起する女
近所では天気の話だけで止め
年金が悲鳴をあげる長寿国

富山市 松見 たえ

愛ゆえに母は鞭打つ子の蜷
満ち足りぬ不満で飲んだからみ酒
万歩計と漢方薬が手を握り
見るだけの百円ショップ無駄を買い
おせっかい時には感謝する他人

八王子市 井上 京一郎

脱線がある自分史に血が通い
人間と遇うから怖い夜の道
椅子取りのゲームに弱い御曹司
腹の虫ぐつと抑えている無口
客に背を向けたタクトの華やかさ

安物を買って老後の自衛策

サービス品賞味期限に急がされ

一票で政治の流れ変えられぬ

なだめねばならぬ気持を持て余す

チャンスとは気づかずチャンス待っている

大阪市 三浦 千津子

来た道に悔いない厚い日記帳

ブライドは捨てぬと寒い見得を切り

ひとりきり枝葉頼らず強く生き

手の平の窪みで妻に丸められ

顛顚の奥で不合理軋み出し

大阪市 大川 道子

結び目のゆるさに見える気の迷い

主役より探す蟲屑の斬られ役

気を揉んだわりにすんなり仲直り

エリートを自慢してても来る老後

佗しきは貧しさでない夢の無さ

和泉市 横山 捷也

目覚しは新聞バサツと落ちる音

土砂降りを好いお天気と言う畑

飼犬が隣の風鈴うるさがり

三月月の眉に隠している野心

誘惑に負けぬ断酒の墨の濃さ

岸和田市 亀井 蛟 月

歳老いて狭い歩幅で決意する
良く効くと聞いて試して捨てる羽目
明日開く花だ是非とも見て行こう
嫌なこと齒の浮くようなお世辞聞く
次男以下 古里総て村を出る

富田林市 山原 昭 水

梅干しで元氣に朝を動きたす
蜆汁食べたくなつて里帰り
中立を守りとおして歳をとる
居酒屋で社会学など学んでる
線香花火した頃父も母もいた

横浜市 吉田 裕 峰

輪の中に入り馴染みと里の盆
帰り際嫁は笑顔をやつと見せ
打ち水の涼を隣へ一寸だけ
団扇風 浴衣の裾をちらつかせ
骨太になるため痛み覚悟する

横浜市 芦田 鈴 美

日めくりがどんどん早くなつてきた
便利さを捨てたトマトの丸かじり
足枷が取れて歩幅が整わぬ
健康グッズどれかが効いているらしい
うわさ話が好きな女の更衣室

川崎市 塩沢 ひで

京弁が耳をくすぐる店の奥
月下美人不景氣よそこに豪華咲き
幸せと別に輝くシャンデリア
パパママと呼ばせて親の顔になる
不器用が花火揚げたと褒められる

横浜市 荒井 広 和

自叙伝の戯作を悔いるペンの先
姥捨てと見紛う無人駅の母
単調の暮らしに切れる乱反射
緑陰の風で汗拭く万歩計
リハビリの散歩励ます花菖蒲

鳥取市 山宮 愛 恵

極楽の便りききたい三回忌
お亡父さん息子やさしくなりました
灯明を消して仏の桃さげる
ネックレス女を少しとりもどす
ぜいたくな充電ハーブに凝っている

鳥取県 平井 栄 翁

老いの夢次つぎ論す心電図
コップ酒溢れる分が消費税
髪かたち変えて女の火の匂い
未だ女 からむ朝顔嫉妬する
まだ咲かす傘寿を過ぎて種がす

吹田市 須磨活恵

やり切れぬ未練残して日が沈む
散つてなお希望を抱く花の芯
可愛がりすぎても花は育たない
まだ望み捨ててはいない夏帽子
老いてまだ夢を追いますうす化粧

大阪市 星野きらり

衣替え白一色が跳ねている
元気がとただそれだけで子の電話
温もりが欲しくて夫を夢で待つ
娘がくれし水茄子情も盛りこんで
老いたのかひまをくれろと扇風機

大阪市 熊代菜月

百までも生きるつもりで四股を踏む
ストレッチャーのせられ私は鯉になる
秒針の早さにおくれ取っている
お若いと言われて買った派手な服
泣き虫が涙を置いて嫁ぐ朝

羽曳野市 福田悦子

低気圧が秋をだんだん深くする
お疲れは出ていませんか夏の声
カーテンを閉めて私のブライバシー
向日葵の迷路へ夏を置いてくる
クーラーが私を避暑に連れて行き

奈良市 乾春雄

忘れても他人が持っている記憶
アイロンの余熱のようないい夫婦
香典袋糸でつないでいる絆
眠りから醒めた史跡の深呼吸
派手好きな鏡が横を向き出した

生駒市 飛永ふりこ

ふる里の海は充電させてくれ
満月は見守るような母の顔
お互いの重荷気づかう夫婦坂
夫婦かてボーダーライン踏み込まず
人当りいいけど奥歯ひっかかる

川西市 井本清山

吊革に若いと言われ座れない
鏡さえ見なけりや老いを忘れてる
歳なりの歩幅で進む老いの坂
古希見えてだんだん細る志
お地蔵も負けそう妻の立ち話

倉吉市 前田喜美子

気配りの上手な人と居て疲れ
なんの芽も出ずに七十青い空
それとなく気遣い合って老夫婦
モデル見てその気になって買った服
悪の芽を出来心では許されぬ

島根県 福間 博利

満天の星にみられて露天風呂
父の歳越えて揃うた墓参り
振子時計お前も油足りぬのか
陳情で出来た道路をうるさがり
泣きはくろチャームポイントだった日よ

島根県 持田 多輝子

土壇場で出す切札は黙秘権
村雀当てにならない口封じ
あの言葉あまくみていた石つぶて
曲り角越えたら謎が解けてくる
満ち足りた今日一日の湯があふれ

米子市 猪森 スミエ

齧られた脛がそろそろ痛みだす
高軒あれは晩酌症候群
読み返し脳たどたとつて来た
耕運機明日は出番だ夕焼けど
うれしさを盛る受皿がこぼれそう

鳥取県 竹信 照彦

魚の骨喉に刺さったままの旅
梅雨の雨煩悩流し濁る川
指切りをした古傷が痛みだす
真夏日に陽炎になる僕の影
傘さして吊橋渡るよな夫婦

鳥取県 鳥羽 直市

怒らせた地球が花粉まき散らす
今すこし花でありたい老いの欲
平穏に大きく感謝して暮らす
長生きを介護の税が攻めてくる
錆止めをしながら今日を切り抜ける

鳥取県 蔵本 悦子

世の中がどう変わろうとバラを抱く
傷ついて時々ガーゼ取り替える
財産はないがでっかい愛がある
胸の内パワーシャベルで掘り起こす
でかいからスマートになる夢ばかり

島根県 武島 ちよえ

人情に触れて心の戸が開き
噂には乗らずこの眼で確かめる
油切れしたら膝の軋む音
肩パッドはずせば力抜けてくる
押し切ってからは後には引かれない

鳥取県 山下 節子

紋一つ背に大きくのしかかる
毒舌のうらに優しさ秘めている
痛いところ庇ってくれる人がいる
封をした堪忍袋破れそう
非常袋 我慢も少し詰めて置く

鳥取県 澤 裕子

ほどほどで手を打つ母の処世術
焦点を徐々に絞って行く余生
夢叶う魔法のこづち欲しくなり
痛いほど分かるがそつとしておこう
時どきは忘れてみたい何もかも

鳥取県 小谷孝美

あたためた想い涙とジャンプする
どん底で私の味方私だけ
岐路に立ち右か左かまだ悩む
縛られることがきらいな薬指
砂時計さらさら落ちる時の粒

岡山市 藤原一平

満点の妻がときどき欠伸する
この胸に消してはならぬ傷がある
石蹴ってみたい日もある車椅子
この杖は放してならぬ無二の友
介護の身そばに居る妻日本一

神戸市 山口光久

紫陽花に心が和む遍路笠
あなた好きだから禁煙しています
夫婦には越えてはならぬ壁一つ
坪庭に蝶が奏でる恋の舞
老いてなお恋と言う字が捨てられぬ

神戸市 両川無限

結び目をゆるめて油断してしまふ
ほどほどの手相で運を待っている
親として積み木遊びが恐くなる
出る杭の頭をそつと撫でておく
遺伝子ようとして短所ばかり似る

篠山市 谷田多美子

ストレスをゆつくり溶かす夕茜
家族らをしばし忘れておどろ喰い
幾山河越えて寄り添う夫婦独楽
厚底も用済み下駄箱でこけている
修羅越えて踏みしめてゆく人の道

京都市 山本 磔

にぎりこぶしのままポケットに入れておく
影の消える正午にそつと消え去ろう
筋書きのないドラマだな花火だな
風を読むかなしいことのないように
弱虫と言われ不思議に安堵する

京都市 勝山 美千代

古都の宵涼よぶ路地に囃子聞く
広げ干す今年も無事で紅の梅
托僧の木陰も慈悲のひと休み
乗り越えた節目ふしめに亡夫がいる
物売りの無駄に時間も買わされて

海 南 市 堂 上 泰 子

松 山 市 高 橋 宏 臣

熱帯夜青田がくれる慈悲の風

青葉木菟私と波長合う零時

身体ごと楽器になったオペラ歌手

超美技に書家東風の心意気

緑風を夫と共有して強歩

和歌山県 中 村 君 枝

母性愛溢れ子ばなれ出来ぬまま

身から出た錆よ早くに消せないか

縦よりも横に目配りたやさない

足のつば旅の一夜をなぐさめる

えいままよ汗がわたしを悩ませる

和歌山市 永 廣 昇太郎

公約は当選までのコマシヤル

我が家を支える妻の底力

粗食でと思えど飽食邪魔をする

泥かぶりに庭にでしゃばる藝蛙

傘寿今 晴耕雨読に礼忘れ

高知県 近 森 功

一病をお守り袋の中に入れ

よくもまああきずについてきたおまえ

フルムーン出雲の神が笑みをくれ

今一度義歯入れ替えて登る坂

すべらした口に後から封をする

古希の坂まだ走れるとネジを巻く
加速する老いに悟りが追いつかぬ
形勢を変える重たい黙り込み
結局は我が身を守る消去法
身を守る最後はトボケ武器とする

今治市 塩 路 よしみ

真実に生きて恥じないペンの先

親切が裏目になった四面楚歌

さわやかな少女がはしゃぐかき氷

頂点で油断はならぬ乱気流

本当の汗はなんにもしゃべらない

香川県 伊 勢 八重子

尾鰭つき噂が風に乗って行き

迷いからさめてぶつつり髪を切り

ときめきを少し残して下り坂

今だから話せる過去の二つ三つ

とげのある言葉も軽く受け流し

香川県 原 賢

大胆に水着が恋を砂に盛る

芋蔓の味を知ってる夏の汗

かけられた疑い晴れて弾む靴

余生まだ釘がじんわり効いている

手探りの人生だったと酒が泣く

生駒市 小西 稔

大自然休むことなきエネルギー

新世代威厳に欠ける父の声

茶髪にもゆかたが似合う蜚蜚り

世の中の先を見とおすがね無し

大阪市 中村 叡子

孫が来る弾けるような空気連れ

気が付けば笑わない日が多くなり

鏡見てこんな筈ではなかったが

楢山に行く気になって整理する

大阪市 伴 洋子

恋の罫一重二重に蜘蛛の糸

噛みくだく悔しさ喉を灼いて落ち

美酒に酔う逆転劇の夢ばかり

嫉妬心隠し女のはしゃぐ声

大阪市 尾崎 黄紅

源平の蜚はいまも競わされ

薬石の効ではないと強気なり

晩成ならず兎はいつも逃げました

僧籍の友と昼酒なむあみだ

大阪市 中川 千都子

親身ではないとつい言う頑張りや

遠い夏蟬の声だけそのままに

肝心のことは言えずに長電話

深呼吸今日はゆっくり生きてみよう

大阪市 小泉 ひさ乃

夏祭り着せたい人に縫うゆかた

新鮮な空気に飢える街の樹々

花鳥あの世もこんな所かな

散骨と決めた夫婦にある未来

大阪市 藤井 郁代

逝く夏に蟬の鳴き声物悲し

九月雨夏の終りを惜しみ泣く

手作りの茄子の浅漬け取り合って

夏づかれ九月の風が持つて行く

大阪府 前田 忠子

庭掃除雀も負けず起きだした

拾われた子猫にもある運不運

また来ると別れを惜しむ河童橋

秘境の湯 夜明けの月をひとり占め

和泉市 小坂 凡英

響聲のフォークス消えて淋しさも

遠き日の野望の渦が消えぬまま

ミス防ぐため病院を遠ざける

歯医者まで酒控えよとご親切

泉佐野市 備後 三代子

幼な子のないしよばなしがこそばゆい

よろけつつでも一歩ずつ試歩の朝

茶摘娘のきらりと光るイヤリング

真似鳥の本音どこかに置き忘れ

泉佐野市 稲葉 洋

万歩計夏休みですバテてます
末っ子もおふくろさんと言う歳に
もの思う秋 寡夫として老いとして
秋兆す農を継げとは言ひ出せず

河内長野市 木太久 正一

父の日にルビーのようなサ克蘭ボ
胡瓜買ひ妻に所望す胡瓜もみ
甘酢生姜無性に欲しい熱帯夜
足腰が丈夫な内のフルムーン

岸和田市 不破 仁 緑

お星様にどれ程願ひ掛けたやら
力にもなれぬが訳を聞きたがる
何処行きですか ちよつとそこでまでそうでつか
茶柱へ今日いちにちを賭けてみる

堺市 大橋 錦

朝顔が競い咲いてる朝の路地
十指みな元気に動くありがたさ
手も足も動き余生に夢があり
愚痴一つさらりと言える御仏前

吹田市 太田 昭

リハビリの友の筆圧撫でてみる
何もかも許して古希の坂に立つ
にぎやかに蛙が梅雨を連れて来る
五百羅漢不羈奔放の風動く

吹田市 後藤 志津香

あじさいの花が群れ咲く前に立ち
赤とんぼ追いかけて回す夏帽子
折り返し暦をめくり梅雨の朝
光陰の速さ身に染む古希の日々

吹田市 木下 敏子

草なりに花を咲かせている仲間
何も彼も中途半端な風の中
腹の虫泣かせ八分で箸を置く
白い歯がまだ揃つて磨いてる

高槻市 左右田 泰雄

何食わぬ顔で野心を胸に抱く
団欒の声で弾ける窓明り
せせらぎが教えた風の通り道
うぐいすの鳴く声を背に女坂

東大阪市 今岡 貞人

抜け道を探す六法繰りながら
ほおずきの明るさほどの夢を見る
緯度経度ピタリ帰つて来たつばめ
核心に触れると狂う風の向き

東大阪市 田中 美弥子

都会のころきつと栄養不足だな
プライドを全部吐いたら弱くなり
痛いこと言うてくれるは我が娘
夢ひとつこばれて続く小糠雨

藤井寺市 若松雅枝

夏祭り背中 of 団扇踊り出す

旅三日うちのお茶漬け恋しがる

母さんのエプロン白く朝の音

落ち込めば妻がジョークで引き立てる

八尾市 松葉君江

さりげなく歩幅を合やす一つ傘

夏バテの窓にやさしい虫の声

カブト虫 父権が戻る夏休み

農を継ぐ孫に期待の歟洗う

八尾市 山本宏至

口惜しさに酒が誘いをかけてくる

もう少し二人でいたいまわり道

立ち話女心のてんこもり

何よりも妻の元気がありがたい

尼崎市 軸丸勝巳

お見舞の花に娘のメモが咲き

欲望が先走りする回復期

羨とは盲導犬に見る行儀

トラブルになれば地が出る国訛り

伊丹市 延寿庵野 靄

許容範囲広げて生きるパラサイト

脇役の腰の低さを追う視線

シナリオの通りに行かぬ孫の守り

メリハリをつけて総理の振るタクト

篠山市 円増純子

夫婦坂思わぬ落し穴がある

さめた目がいつも騒ぎの外にいる

訪ねては行けず心配しています

母だけは信じています子のこころ

神戸市 木村忠義

その人の存在感のある手書き

同じ価値でも新札をかわいがり

カムフラージュ傷んだ壁にカレンダー

特別の妻の料理だテレビ消す

姫路市 北条てる代

生きていれば良い事もある夕茜

もつれ糸解けてさわやか今朝の彩

全身を耳にして聞く娘の電話

横道へ逸れるのもいる蟻の列

兵庫県 徳平毬子

病院で安心買って風和む

聞き流すつもりひと言胸にすむ

文の花届き異国の家族来る

実をつけて無事に暮らせと星まつり

兵庫県 安達厚

耕せばそむかぬ土を友にする

笑顔ではごまかしきれぬ妻の勘

よっこらしよ この掛け声を友にする

また一つ趣味を減らして老い生き

兵庫縣 山 本 泰 子

竹原市 正 畑 半 覚

叱られる役引き受けるお人好し
白い肌一匹の蚊に負けている
信心も素直にとれば楽なのに
ひとりの夜肩を抱く手をふと思う

倉敷市 家 守 政 子

十七歳切れる思想を抱いている
我が家にも十七歳の孫がいる
はるばると北の果て来て花を愛で
新世紀ますます女強くなる

岡山市 大 森 純 子

効いたのは薬でしょうかお祓いか
絵ハガキの薔薇もおれる熱帯夜
夾竹桃咲いて原爆語りつぐ
立ち読みをしているうちに消えたウツ

岡山市 清 水 金 太 郎

宝くじあたらず平和な日がつづく
同窓会口は達者な友ばかり
病氣とも上手に付き合ひ生きている
運命と諦めながら神だのみ

岡山県 国 米 きくゑ

成績はトップだったと過去を恋う
吾が家ではトップの席を決めてある
年の差は問わず楽しい趣味の会
反骨にやっと届いた父の声

偶然に隣あわせた福の神
美しい素顔がここから笑う
一病を友としバネとして生きる
何色の風が吹こうと野の仏

出雲市 加 藤 スズコ

残り火で余力を燃やす好きな道
夢を追ひ笑い袋と生きる日々
胃袋が仰天宿のバイキング
花菖蒲生けてお隣招くお茶

出雲市 伊 藤 玲 子

欲しいのにいつも届かぬ枝の先
紫陽花の心变りの訳を聞く
天と地の間で人として生きる
間伸びした返事嫌われたんだろう

出雲市 川 島 和 歌 子

絵手紙の墨の滴に迷う筆
裏方も人並燃える恋心
新世紀 家風を変える嫁が来る
物溢れ不況と見えない暮らし振り

松江市 松 浦 登 志 子

水草を愛しむように泉湧く
害虫も私も昼寝無防備に
花束を掴む男のひとり言
夏野菜たっぷりくれたいい人だ

島根県 毛利 幸

セクハラを恐れて話し中座する
ダイエット余る食欲邪魔になる
また会える望みを残し右左
うかうかと甘い言葉に騙される

島根県 多々納 テル子

ひと呼吸するたび忘れまた忘れ
白百合よ今年は一層美しい
笹ゆりの香りを自負しあなた待つ
何もかも省略したい歳になり

宇部市 高山 清子

コンビニが老舗の大戸降ろさせる
切り札を使い思わぬ勇み足
毒舌の裏に秘めてる思いやり
言い訳も嘘もつけないお人好し

唐津市 坂本 兵八郎

地べたとのスキンシップをするヤング
亡父の血が僕にスパルタ押しつける
衣食住女房好みで生かされる
横道の好きな講師で眠れない

北九州市 岡田 幸生

まだ癒えぬ痛みにも耐えているベッド
駄目ならばいいよと言われたやる気
菓子折でやんわり埋めた小さな溝
ご試食の少しが旨く無駄を買う

奈良県 古手川 光

ゴキブリにからかわれてる老い二人
孫が描く顔がだんだん顔になる
本読むと少し沈黙するみたい
改革と言う二文字に踊らされ

奈良県 江波 正純

ようもった蓼食う虫の二人連れ
大胆に妻の指図を聞かぬふり
後ろ指気にはなるけどこれも業
指図では生きられないで損をする

京都府 前上 英一

転んでもただでは起きぬ妻という
マニキュアを落として母の顔戻る
小回りの利かぬハンドル父譲り
そしていまもとの夫婦の日が長い

京都市 清水 英旺

雨だれのリズム鼓動と合う寝床
さて何をしようか迷うきようは雨
茜雲 あすはテニスができそうだ
蠅打たぬ一茶の境地超えられぬ

和歌山市 上地 登美代

十人十色低い鼻でももてている
変身を夢に描いて美容室
ホーレン草食べてポパイになつてやる
やきとりに愚痴を言ってる不発弾

和歌山市 土屋 起世子

走って走って摺り減っている父の靴

喫煙はだめよ父さん好きだから

携帯にパソコン持たぬ拗ねた家

やっと二人シルバー色の夢咲かそう

和歌山市 武本 碧

踏み台を幾つ積んだら見える虹

しぶちはみみずでだって鯛を釣る

だんだんと品薄になる得意技

終章が絵になるポーズ決まらない

和歌山市 松尾 和香

七夕に路郎夫妻の句碑祝う

知らぬ間に守るジंकウス身についた

すきま風我が家のピンチ連れてゆく

ほどのどの暮し仲良く元気です

和歌山県 村中 悦男

影法師ついて来るから腰伸ばす

性分とわかればあえて争わず

お互いの荷物はそっと隅に置き

考えをしばらく止めて慈雨を聞く

田辺市 大峠 可動

六道輪廻 蟻は遠方よりきたり

風も流れも男に返す果し状

射程距離 妻と投げ合う舌合戦

星一つ流れて闇へ身をこぼす

東京都 井上 つよし

居てくれるだけで心に花が咲く

もう少し話して行けよ酒もある

栓抜けて過去が渦巻き流れ去る

思い出の傘で巷を独り行く

横浜市 三村 八重子

セーラ服笑い転げて春讃歌

鮮やかな抜手に水は騒がない

ふる里をかざる言葉にあるギャップ

ポリシーを貰き受ける疎外感

横浜市 山梨 雅子

無料バスあえて一駅歩きます

草茫茫 植木屋たより手が出せず

冷房の温度差 家内別居する

甘えてはならぬ娘が優しすぎ

横浜市 生坂 サト子

熱心なセールス鎧着たくなる

長期予報左右されてる夏プラン

意識して今日は左で嘸む努力

一番星デイズニールアンド花を添え

横浜市 秋元 和可

想い出の後編作るフルムーン

返答に窮し咄嗟の黙秘権

長生きをして友達がいなくなり

夫婦して心を洗う美術館

横浜市 伊藤 ふみ

ふる里の茶畑想い元氣出す

老いてなお確かな道の句読点

常識が丸と四角でもつれあい

リストラへ新たな一步幕があく

横浜市 巖田 かず枝

弱いとこさらけ絆を深めあう

懐メロで母が元氣になつてくれる

食欲が旅の幹事も引き受ける

知らぬ子に挨拶されたうれしい日

横浜市 鈴江 純子

同居して互いに我慢強くなる

広告の目玉につられ無駄を買う

一言の余白の文字に癒される

戦列を抜けて夫の顔になる

横浜市 石原 三郎

若ぶつてみても歩幅に歳が出る

気楽にと神の配慮か遠い耳

美人見るだけで男が癒される

不器用な粥を風邪引く妻に出し

川崎市 浦野 昭志

とつときの酒仏壇へ封を切り

犬どうし飼い主同士遊んでる

水をやりながら話を花とする

おーいはい これで通じて靴を脱ぐ

川崎市 小林 久美子

投稿が載ると心が軽くなる

話すことないが阿吽の息づかい

物知りが口出し過ぎて疎まれる

花咲くと待ってましたと剪っていく

川崎市 大島 賛詩朗

他人のアラばかり探してひとりぼち

晩学の脳が繻を踏んでいる

年金で幸せの綱渡りする

長寿国閻魔大王おおあくび

川口市 原 沢 かね子

少子化で子の縁談のままならず

平凡な暮らしに一句のネタが無い

子と交わす会話で貰うエネルギー

健康法盛り沢山に悩まされ

新潟県 高野 不二

銀行に置いて金も金は働かぬ

免許証三年前の若さで居

支持率におつちよこちよいもいるだろう

平均年齢までは自信があるつもり

秋田県 湊 修水

目を閉ずと昔むかしがよみがえる

夢担きながら卒寿の声を聞く

何か残そう自分史を思いたつ

とにもかく米百俵で食いつなぐ

日立市 加藤 権 悟

南国市 小原 圭 二

八月の潮騒遠く聞く挽歌
一日の汗を労る大ジョッキ
本気でときには妻の乱気流
プロポーズするには丁度頃の酔い

静岡市 増田 扶美

無理やりに咲かせた花が気にかかる
筋書をそむいた女白い地図
方言が消えてふるさと遠くなる
決断の目覚め枕裏にする

富山市 沢江 和代

噛み砕くだけの奥歯はまだ元氣
うちわでは騙しきれない熱帯夜
思い切っておおきな桃をふたつ買う
過去捨てた女の背筋ぐつと伸び

高知市 伊野部 和江

頑張ろう頑張ろうねと蟬が鳴き
我娘見れば私の癖を知り
心まで病んでなると奥歯噛み
違います言えないかわり黙ってる

高知市 小川 てるみ

旅靴ときめきがある夢がある
感謝する言葉がふえる丸い背な
かずら橋ゆらして愛を確かめる
ライフスタイル違う親子の車間距離

老衰の通夜に安堵の笑みが洩れ
お互いに軒をばやく旅の朝
免許証に添削できぬ顔が居る
草を引く妻の野良着はピンク色

高知県 桑名 孝雄

護国神社僕は公私に関わらず
ブルドーザーの父が小さく見えてくる
日本語はいいな女傑という言葉
ベイ独楽に爺の存在感がある

香川県 松村 輝夫

二度乗れぬ生命線を補修する
煮詰まってそろそろ何か出る話
変人を押して期待の民の声
一雨が来そう話が先き流れ

愛媛県 花岡 順子

コメントに浮かれすぎてる僕がいる
旅好きの地図を眺めて小半日
飛んでみたけれど小さな地図の中
夕立の残した虹と二人居る

今治市 野村 清美

ときめきをそつと授かるワインの香
日の丸の小旗を偲ぶ無人駅
コーヒーにパワーを貰う朝のパン
心地よいお世辞が耳を通り抜け

今治市 中村好恵

守備範囲母は表に出たがらず
汗だくで見ているだけの夏まつり
歳なのか麦茶も熱い方が良い
ゴーストライター ペンが少うしきな臭い

倉吉市 大下智子

包み込む大風呂敷が穴だらけ
包んでも包みきれない母の愛
包まれて生きてることに気づかされ
包みたい金がこぼれていくばかり

米子市 足立由美子

思い出のどの頁にも亡母がいる
向上心いっぱい詰めている靴
情熱が通じ底から立ち上がる
家系図の延長線で今生きる

鳥取市 岡田信恵

気力ある自分のパワーほめてやる
古希の坂残るパワーを伝えたい
哀しみを胸底に秘め生きている
きつちりと言えは絆がほだけそう

鳥取市 加藤茶人

健康に良い物ばかり食べて病み
人間模様 父の死で知る敵味方
OLと主婦を味方にして稼ぎ
値打ちある長いお経は足しびれ

鳥取市 田村邦昭

へそくりを夢に誘われシャボン玉
雑音に邪魔をされずに生きてみる
菜園の不出来ばかりを食べさせ
年金を口実にして義理が逃げ

鳥取市 河田のり代

のんびりとほたるの乱舞気が和む
やけ喰いも時に和解の道教え
共白髪やつと喜寿までたどり着く
泣き笑い共にパワーを分かち合う

鳥取市 近藤秋星

過去の荷は降ろしたまえよ重からう
一人旅終着駅はまだ見えぬ
海の上に家を建てたら涼しかる
未来ある若い命を海は呑み

鳥取市 永原昌鼓

ふる里でパワー充電して帰り
身の程を知って流転に逆らわず
時々事件起きない日がほしい
重くても絆は人へ渡せない

鳥取市 録沢風花

生きている証に綴る四季のうた
里の部屋とろりとろりと眠くなる
握ってるカードをひとつ出しそびれ
痛むのはいろいろ七味唐辛子

紫陽花と女心の七変化

鳥取市 山口 千代子

父も在り母も在りて行く故郷へ
夫婦喧嘩 裁判官も裁けない
老いてなお夢追いかけて生きている

鳥取県 西 垣 美知子

着飾ると妻も女の香りする
何気ない一声急所ついてくる
初孫の洗たく物だ高く干す
波風を丸く封じた母葉

鳥取県 西 沖 彰 雄

所詮老い強がり言うも付焼刃
老い自覚夢でも敵は作らない
生きて来た道そのまゝの顔の皺
頼られた手前ついつい背伸びする

鳥取県 橋 谷 静 江

顔の皺私の生きた道しるべ
残り火が大きく燃える日を期待
こだわって暮せば周囲狭くなる
痴呆症進む姑の愚痴を聞く

鳥取県 鳥 羽 玲 子

化粧して一步踏み出す用意する
噂話のつて迷路に入り込む
となりから知らせが届くにわか雨
空気だと思つたあなた夫だった

巻き紙に秘める国盗り物語

鳥取県 福 西 茶 子

赤い糸手繰る糸巻見つからぬ
エプロンに技を盗られた熟女です
主役ではないが脇でもないパセリ

鳥取県 岡 村 孝 明

両肩にずっしり重い妻の声
体力はあるが職場がなくなつた
力では若者に負け技で勝つ
口実をつくる悲しい酒に酔う

鳥取県 細 田 裕 子

のんびりと見えるが実は不景気だ
のんびりと育つたせいか気がきかぬ
アレルギーと腐れ縁です手が切れぬ
正直に生きてりや何も恐くない

鳥取県 下 田 茂 登 子

土のパワーもらい八十路の坂を越す
脱皮した蝶には二度と近づけぬ
お隣がだんだん遠くなる恐さ
毎日の暮らしの中にある薬

鳥取県 松 川 行 男

破門されたか花びら一つ水溜まり
うつむいた悲しい花の物語
花びらに思いをこめて教えます
真紀子節 内の嫁さん負けないぞ

奈良市 田 中 賢 治

ツアー客名所名所で放し飼ひ
絵ハガキを真似てアングル教えられ
あと一人情け知らずのエレベータ

宇都市 中 田 忠 夫

精一杯生きたつもりに飢えがある
登校拒否あつた気もする少年期
更に老いこころの牙が取れてゆき

安来市 原 煩悩児

湧く雲に燃える力を試される
陽に耐えて百日紅が夏を咲く
上海で日本の過去はもう見えぬ

秋田県 秋 野 宏

公職とお別れをする日の脆さ
心臓の年中無休が恐くなる
正直なマイク音痴を知っている

町田市 土 田 今日子

パノラマの中でわたしが狼狽える
Eメール津々浦々を脅かす
惚けぬよう趣味にもおもり付けている

日高市 根 岸 方 子

カラ梅雨でテルテル坊主を逆につけ
カラ梅雨で天気予報に愚痴こぼす
休耕田父母はそれでも草を刈る

野田市 那賀島 雅 子

耳奥でストレスが吹く笛の音
変色の写真が過去を美化させる
貧乏性捨てるつもりが拾つてる

串間市 山 内 滝

老眼鏡外して蛍の軌跡追う
OLの囁る蕎麦には音が無い
消えていく飛行機雲は飛び入りよ

府中市 馬 場 利 子

掌の中で今日のシナリオ踊らせる
さわやかな朝シャンの匂い過疎のバス
いい夢を見たく枕を裏返す

府中市 岩 本 雅 代

無我夢中走り続けた七十路坂
丁寧な馬鹿がつけたい父に似た
梅雨晴れに憩いをくれた生ビール

静岡市 中 西 雅

地価知らず草のびのびと泳いでる
梅雨晴間洗濯物が踊つてる
戒名を頂き旅の準備する

唐津市 岩 崎 實

お付き合い一口どうぞコップ酒
よく振って一パイだけの養命酒
もう一度治りたいねと腰と足

和歌山市 吉田 比佐子

平凡が有難いこと今気付く
住み慣れた我が家が良くて一人住む
朝に夕支えあつての老い二人

和歌山市 芝 あつむ

親譲り機関車走る永田町
派閥など知らぬ大根生一本
雨止んで催促される万歩計

和歌山市 根田 美子

お日さまと向日葵きょうも話し込む
長生きを趣味にしたつていいじゃない
夢で良い極楽とやら見てみたい

和歌山市 前岡 健三郎

整骨と内科はしごで暮れる日々
虫取りに網躍つてる子等の顔
清流に蛍河鹿のページェント

和歌山市 宮本 三喜夫

党会談共にあら探しバツジ泣く
もう少し国民のために政策を
国外に逃げた人ですなぜ出るの

和歌山市 橋爪 佐一

イチローがいつもテレビの中に居る
生演奏チップ数えてアンコール
朝帰り妻が閻魔の顔に見え

和歌山県 森下 順子

裏庭で梅雨明けを待つ蟬の声
田んぼ道ふいに会った赤トンボ
どん底でファイト貰った歌がある

高知県 百田 幸

ほんやりと見えない未来考える
さし向かい夫と欠伸うつしあい
無駄骨も明日の糧になる自信

今治市 渡邊 伊津志

艶のある字が書きたくて墨を磨る
抑揚をつけておおきに使い分け
人間を面白がっている映画

愛媛県 黒田 茂代

朝顔の薄い命へ陽が昇る
好きでした暮らしの臭いせぬ笑顔
ダンゴ虫自信過剰だ保身術

愛媛県 安野 案山子

晩酌にファイトを貰う熱帯夜
サラ金の向かいのビルにパチンコ屋
張り切ったベースを悔やむ登り坂

愛媛県 宮本 末子

耐えてゆくことしか知らぬ今日の幸
信じ得ぬことの数々あつて暮れ
無党派で決めた総理の好感度

兵庫県 黒崎 美紗子

自負心の恥じる事なしわが暮し

笑いすぎ皺も仲よくクラス会

歳とって知る無期限の保険証

兵庫県 広瀬 房江

ストレスを花の根元に埋めておく

一言が足りなかったとふと思う

もう知らん言うて気になる高軒

兵庫県 岩本 美緒子

勘違いした日のガムが味気ない

手をつなぐ闊歩若いていいですね

矢田寺のあじさい縫う傘花帽子

神戸市 森本 みはる

友といつていつしか虹に囲まれる

中性脂肪ふえてグルメの輪の外に

しがらみがなくてはこの身淋しから

姫路市 服部 一典

さようなら言いつらいもう逢えぬかも

茫々と妻亡き後の前栽は

玉子焼無精卵爺ちゃんが食べ

西宮市 坪井 孝一

いやな味方どうぞと前をあけられる

同窓会リストラ内緒経済論

泣きつかれ先ずお茶を出し腕を組む

尼崎市 河津 正治

結論を先送りした暑い夏

雨の日は雨の仕事之母を持ち

投函のスリルポストの赤い顔

尼崎市 尾宮 弘治

本当は負けて勝った気の夫

あの笑みはきつと長生きへの自信

思い切り飛んで生きたい園の鶴

尼崎市 山田 耕治

茶髪して一粒種が農を継ぐ

嫂さんに掩護射撃を頼んだり

薫風に外れ馬券の紙吹雪

岡山县 土居 ひでの

洗濯機姉妹で水着もつれ合い

だし抜けの間に頭は空回り

ネクタイのセンスで担ぐ嫁談議

倉敷市 撰 喜子

ライバルに奥の手出されほぞをかむ

親友の秘密を知ってからのうつ

ヤンママの厚底靴に抱かれる子

横浜市 福田 由美子

開店と閉店だけがセールス日

環境を議論している喫煙所

目覚ましが家族をおこす狭い家

横浜市 布山 嘉信

松江市 山根 邦代

健忘症でもナツメロは覚えてる
幸せを信じた指輪置いて出る
売られゆく牛惜別の目を向ける

横浜市 北沢 街湖

出雲市 梅 ミツエ

隠す場所凝って隠した場所忘れ
物干しにプライバシーをばらされる
むし暑さ万歩計にも夏期休暇

横浜市 金森 徳三

島根県 松本 聖子

十年の金利思えば腹が立つ
援助にも米百俵のシール張り
健康の為に鏡と笑っている

横浜市 平達也

島根県 菅田 かつ子

空しくは無かった過去の隙だらけ
不幸です来る日来る日も安息日
なまじつか呆けてないので困ります

益田市 岡田 たけを

倉吉市 牧田 賀寿恵

要領が良いから一歩前をゆく
バスおける妻に手を貸す診察日
愛情が絡めば絆纏れだす

松江市 三島 淞丘

倉吉市 西脇 日出子

新調の靴に意地悪にわか雨
Eメール届きましたと電話する
私の心棒少し曲がった

食糧難豊富な膳が母忍び
老いの身をのんびりせよと娘の助言
釣天狗両手広げて悔しがり

米子市 森 脇 麗
晩酌へ昼間のウサも飲み干して
川柳へフル回転の辞書二冊
痛む膝足にやさしい靴を買う

米子市 小 塩 智加恵
ライバルも私と同じ軽い罪
核家族だから私は頑張れる
手作りのスゴロク上がりに近づいた

鳥取県 山 岡 久 枝
雷の合図があつて梅雨上がり
照り続き涼しい間朝仕事
人生を人間らしく歩みたい

鳥取県 奥 田 保 子
月明かり酔っ払いには明るすぎ
世の中をずっと知らずに生きて来た
悪いとこ責めずにひとつ誉めてやれ

鳥取県 岩 崎 和 子
鳥たちの分を残して枇杷をつむ
巻き戻しできない空の青を見る
夫留守なぜか聞こえる寝息かな

鳥取県 吉 田 弘 子
人間の弱さしみじみ蚊一匹
先ず親を教育せねば子の蜚
途上国道路工事と貧富の差（中国旅行）

鳥取県 小 谷 はるみ
先の先皆が渡る川がある
妬く程のパワーがあればまだ若い
魔女になりあなたのハート盗み出す

鳥取県 竹 森 富久江
目覚めるとそうよ私も小宇宙
かくれんぼしながら手帳コマメなり
人情をきっちり詰めてやる荷物

鳥取県 藤 山 弘 子
ブランドの傘が雨降り待っている
簡単に借りるとこわい利息とり
低金利働きつづけばけ防止

鳥取県 河 本 晴 子
見応えを得る国宝へ予備知識
スランプに似合った気力持ち続け
悲しいが世間へ嘘も避けられぬ

鳥取県 岡 嶋 金 子
一心に座禅する身に破門なし
破門には破門せざるを得ないです
弱虫も気長く思い海山に

鳥取市 渡 部 伯 坊
耳寄りな話いきおい膝立てる
老後こそ至誠通天夢を追う
夕立をいきなりもらい風邪もらい

鳥取市 横田 春名

苦言にもユーモア添えて座がゆるむ

茶髪の子虚しい心もてあます

カットして伝えた話気にかかる

鳥取市 宮脇 道子

山育ち海に煩惱すいとられ

足痛め老いの尺度を知らされる

愛もあり微笑む顔に牡丹咲く

鳥取市 谷岡 清子

お人好し丸い心がうのみする

朝の空仰いで空気独り占め

風になり風におされて時きざむ

大阪市 浦田 綏子

向うからおいでおいでと葛橋

地球から銀河へ贈る遠花火

猫じゃらし母のない子のように揺れ

大阪市 岩崎 公誠

古手紙僕の軌跡を記憶する

逆転を狙う野心に誤差がある

脱落を防ぐロープが切れかかる

大阪市 中村 忠敬

当落の分かれ目実弾乱れ飛ぶ

不精髭伸びても誰も気づかない

小児科の医者はニコニコ愛想よい

大阪市 伊藤 博仁

留守電に入れた自分の声を聞く

落ちこぼれ爪切り草に花が咲く

在庫品底つくころに帰る妻

大阪市 中井 正秀

事故多発安全第一忘れてる

街へ出ようティッシュぐらいもらえそう

大峰に喜寿の力を賜りぬ（大峰山にて）

大阪市 平井 露芳

構造改革出来ず太目のズボンはく

竹の子を盗んだだけで熊射たれ

サッカークジたまに当ると三百円

大阪市 内海 綾乃

ジャスミンに今日は風ありよく香り

大山も人と同じにうらおもて

枯らすまい丹精こめたサツキです

大阪府 東 文江

子に羨仮面をはずし鬼になり

興奮しドラマに文句言う家族

若き日の野心はいづこ夢と去り

大阪府 小栢 こずえ

雑草に負けてなるかよ炎天下

暑いこと何回言っても同じこと

草生えて夢みてまでも草を引く

大阪府 野田 栄呼

折り返し遙かに過ぎて老い飾る
七輪でサンマを焼いて亡母忍ぶ
年長に平氣でうるさい言う時代

大阪府 桑田 ゆきの

介護椅子押して尊い汗を拭く
シンプルな発言なおも評価され
晩学の辞書の一字に湧く活氣

藤井寺市 吉田 喜代子

母の字にいつも憧れ抱いている
大宇宙もひとりで淋しそう
雨蛙に覗かれていた身の不覺

羽曳野市 永田 章司

遺伝子を無視して願う親のエゴ
へそくりがデフレ効果で高金利
変人が参院選の風を変え

羽曳野市 森田 四三郎

足腰が弱ると愚痴も多くなり
爺さんの相手もテレビがしてくれる
雲囲氣に誘われ音痴の唄も出る

羽曳野市 山本 たけし

さりげない友の言葉が起爆剤
余生なお描き続けてるレイアウト
数えれば何回あつた片想い

東大阪市 笠井 欣子

ずかずかと悩み話せる友が来る
夕映えに女体寝ころぶような雲
ハーブ茶とくちなし咲いていやされる

吹田市 二宮 栄子

有難い生家に座る場所がある
ふる里に螢かえつたいい知らせ
歳よりも後を歩いて行くつもり

高槻市 乙倉 武史

生きている内はお酒と縁切れぬ
胃腸には許しを乞うてかき氷
切り札を持って手の内明かさない

高槻市 大崎 侑子

車椅子も一度母と歩きたい
乗せられる客が氣遣う華奢な車夫
蒔かぬ種蒔いた種より悔い残り

高槻市 西谷 治三郎

バーゲンの根性で突貫バイキング
肩書きをみんなはずした老人会
誘われた混浴ばあや二人だけ

高槻市 生田 義一

国際化老いを悩ますカタカナ語
喜寿近しまだまだ回れ夫婦独楽
休肝日忘れて今日も大目玉

高槻市 執行 稲子

土砂降りにおニエーの傘の傷を知る

生涯にきつとオーロラ見るつもり

追い風に乗ってファッションの勇み足

豊中市 みき わきみ

呆けに輪をかけて方向音痴なり

寺町の句会路郎霞乃に会える日々

わかつとる耳遠くとも遠くとも

豊中市 藤井 則彦

お互いにどうもどうもと雨蛙

井の中の蛙の方が楽な世に

パソコンを始めましたと長電話

豊中市 源田 啓生

耐えている盲導犬の優しい眼

知らぬまに馬齢が私置いて行く

気取ることなき師の叙熱風薫る

八尾市 中島 春江

ピヤガーデン女集いて大ジョッキ

ティッシュ配りも人を選別しています

他人には夫婦仲よく見せておく

八尾市 田中 トシエ

鬼瓦農継ぐ子には重過ぎる

悩みごとなのか妻の高イビキ

風向きで聞いてしまった地獄耳

八尾市 平川 幸枝

寂しさの夜の深さを打つ時計

誠実を貫きとおす夜が来る

母よりも寡黙な父の人間味

八尾市 高橋 明子

軒下に犬と仲よく雨宿り

いつの間に八十歳の坂越える

孫が来て帰りの淋し身に沁みる

八尾市 鷲見 章

六月の風さわやかに頬なでる

テーブルに花美しく飾りけり

みどりしてふるさとの山信貴生駒

八尾市 與田 明

女遊びの指もだんだん老化する

自己暗示九回裏でやったるで

パソコンに慣れてメールが好きになる

堺市 渡辺 さだを

ひまわりが暑中見舞をしています

職退いてゆつくり過去をなつかしむ

文学の径蟬はこぞってシンフォニー

(尾道句碑建立)

堺市 荻野 象山

要介護担う女房の細い腕

待っている会いたい人へ眼鏡拭く

愛眼鏡時々僕を鬼にする

御芳志拝受

西岡伸夫氏（尾道市産業文化振興部部長）

句碑建立賛助金拝受 板垣章丘氏

河内長野市 杉谷 カズエ

ミニガーデン似たり寄ったり花模様
さわやかにブチンとかんだ山椒の実
七夕にこより作りを引き受ける

泉佐野市 大工 静子

故里の知人有名人になり
はるばると江戸から連れてきた子猫
命名は元太と付けて強くなれ

柏原市 永浜 加津子

大の字の昼寝にやさし夏座敷
嘘一つ忘れてほしい閻魔さん
足かせが重くて家出したくなり

枚方市 大昇 隆広

歩の駒は返る夢見て一步前
古道具何をあせると言う丸味
古里にまた秋来たと友の文

枚方市 二宮 紫鳳

産休の里帰りの娘で活気づき
停年をひかえて二人の夢づくり
停年を迎えて嬉し趣味がある

風のまち川柳広場2001

日時 9月30日(日) 午前9時より受付
場所 青森県蟹田町ダイヤモンドホールKIDO
会費 4000円 (昼食・懇親会・記念品)

【宿題第一部】(事前投句2句・締切9月1日必着)
(欠席投句拝辞・官製ハガキ使用またはEメール)

特別選1『丸』橘高 薫風 (大阪府豊中市)
特別選2『父』笹木 義廣 (蟹田町長)

【宿題第二部】(各題2句・当日締切)

『世相川柳』東奥日報社編集局長 選
『滴』横沢あや子 (八戸市) 選
『毛』千葉 鉄男 (弘前市) 選
『闇』千葉 風樹 (黒石市) 選
『宇宙』北野 岸柳 (蟹田町) 選

【席題】『印象吟』(2句・当日発表)

宮村 玉 (田子町) 鳴海哲子 (八戸市)
佐藤俊一 (青森市) 共選

特別選投句先・問い合わせ先

風のまち川柳大賞実行委員会・特別選事前投句係
〒030-1393 青森県蟹田町高鍋屋44-2

TEL 0174-31-1112

senryu @ kaze. or. jp

主催・風のまち川柳大賞実行委員会

第九回相生市もみじまつり川柳大会

とき 10月28日(日) 開会 1時
ところ 相生市総合福祉会館4階多目的ホール
相生市旭1-6-28
TEL 0791-22-7125

参加費 1000円 出句締切 11時40分

お話し「面白い川柳」小松原爽介

宿題と選者 (各題2句・欠席投句拝辞)

「朝」岡田 玖美 (姫路)
「坂」渡辺良比呂 (兵庫)
「他人」西川けんじ (岡山)
「二番」大森 一甲 (神戸)
「予定」前川千津子 (神戸)
「自由吟」河内 天笑 (堺)

賞 秀句に市長賞他呈

主催 相生市・相生市教育委員会
相生市文化協会

企画 相生川柳会

後援 相生市観光協会・兵庫県川柳協会

問い合わせ先・大会事務局

〒678-0024 相生市双葉3-6-13

真殿舎句里 TEL 0791-22-1754

愛染帖

波多野五楽庵選

倉吉市 野口 節子

阿の心母の海から汲み上げる
人間が好きであちこち痛だらけ

和歌山市 西山 幸

幸福になろうなろうと豆の蔓
ひとり芝居にまだ喝采がもらえない

堺市 渡辺さだを

沙羅落ちて真顔に戻る羅漢さま
ホーホー蛍男はロマン棄て切れず

和歌山市 木本 朱夏

さらさらと夏きてセロリ丸鬻り
黴臭う赤線という死語の町

鳥取市 徳田ひろこ

疑問符がボカンと浮いた流れ川
みぞおちに蜜またたく旬の夏

米子市 政岡日枝子

情熱が抜けたか帽子萎びれる
似たような劇で渡り歩いている

大阪市 神夏磯典子

古希の壁大きく前にはだかつた
その時の風の速度へ合わせとく

西宮市 奥田みつ子

ひとりの道見つからぬまま闇になる
檸檬ころがす昨日の罪も消えそうで

弘前市 高瀬 霜石

残雪の山と重なる父の影
わが街もわたしも道路工事中

弘前市 斉藤 晶

紫陽花に哀しい話をせぬように
七夕にやはり子のこと妻のこと

松原市 玉置 重人

少子化が気になる種子のない果実
いのちとや苦いアロエの汁を飲む

弘前市 高橋 岳水

人であるかなしみ涙とめどなく
散り時を知悉している庭の花

富田林市 片岡智恵子

飽きもせずときめきもなく夫婦独楽
花なりに枯れて愛しい恋のあと

豊中市 田中 正坊

星が降る別れは早い方がよい
遠ざかる尾灯に未練吹つされる

富田林市 池 森子

舞い終えて一膳めしになった蝶
人生は激しき詩よ地を這うて

東京都 播本 充子

知り過ぎた罰か棚から降ろされる
旨いから黙って食べているのです

富田林市 藤田 泰子

脱皮して真の姿を見てもらう
正直な人だ目線を合わせない

今治市 月原 宵明

いつからかライバル杖をつき初め
その辺でけじめつけよと寺の鐘

京都市 都倉 求芽

幻影がいつも花壇のまん中に
七十点ほめられもせず叱られず

堺市 志田 千代

回転木馬まだ追越しを諦めず
回ったことが空しくなる日暮れ

倉吉市 牧野 芳光

シンプルに生きたし魚裏返す
沙羅の花やがては傷も想い出に

西宮市 牧渕富喜子

道草の得意は靴が家にある
後ろから火の粉を散らす騙し討ち

尼崎市 長浜 澄子

風いくつ読んできたのか父の樹よ
底抜けの底に残っていたわたし

高槻市 左右田泰雄

この山になろうと父の背を洗う
あざやかに朱肉を捺してから転ぶ

西宮市 門谷たず子

池田市 栗田 久子

日立市 加藤 権悟

鳥取市 武田 帆雀

鳥取県 林 露杖

会者定離妻よどつちが先だろう

鳥取県 小西 雄々
断ち切れぬ未練に零切れぬ傘

唐津市 田口 虹汀
振り向けば思い出の花美しい

森 茜
ほっとする一言欲しい症候群

塩路よしみ
和解して柳は風へ素直なり

吹田市 山本希久子
カリスマと錯覚してるバラの棘

弘前市 相馬 銀波
食べ残す箸も行儀が悪すぎる

宇部市 平田 実男
離婚する勇気がなくてまだ夫婦

米子市 野坂 なみ
風向きを味方にバズル組替える

海田市 三宅 保州
玉手箱の中は煙と限らない

出雲市 岡 あきら
動けなくなったら聞こう現在地

鳥取県 岩崎みさ江
日溜まりの森で毛虫と仲良しに

鳥取県 田村きみ子
ほどほどの忘れ上手になりました

東大阪市 北村 賢子
土産などいらん顔だけ見せに来い

弘前市 一戸 ツネ
人間の匂いが好きで生きてます

京都市 山本 磔
不思議だな妻が泣かなくなりました

松原市 小池しげお
取れそうな釦ちぎっていいです

黒石市 相馬 一花
てんぶらの衣を脱がす血糖値

熊本市 高野 宵草
本当の寸志もらって怒るなよ

和歌山市 川上 大輪
鶴を折る退屈しのぎではないぞ

弘前市 福士 慕情
間違いは許して欲しい花鉢

海田市 谷口 義男
惚けて無い証拠抓ればまだ痛い

岡山県 山本 玉恵
底辺の石です流されたりしない

八尾市 村田巳代一
へまをして人間らしい顔をする

高槻市 乙倉 武史
カキ氷胃腸に許し乞うてから

枚方市 海老池 洋
誉め言葉にも直球と変化球

和歌山市 榎原 公子
眠りから覚めると待っているヒナ

堺市 和田つづや
花カンナ燃え立つ不義は不義として

横浜市 清水 潮華
メロン割るナイフはいつも深呼吸

八尾市 井尻 民
バックして女戦う顔になる

八尾市 生嶋ますみ
夫看る昔の埃叩くまい

横浜市 近藤 道子
流れには乗れずさりとて逆らえず

米子市 鷺見 正子
地震以後屋根の自覚を持った屋根

横浜市 芦田 鈴美
つげ口をすれば耳鳴り高くなる

和歌山市 松原 寿子
まだ脈があつて絆に火をつける

高知県 桑名 孝雄
夢多い老女で皺が美しい

弘前市 櫻庭 順風
夕風の波に優しい亡母の私語

鳥取県 西沖 彰雄
切り札があつて灰皿引き寄せる

四条市 吉岡 修
どこまでが仕事かはつきりしない酒

鳥取市 録沢 風花
大海を知らぬ蛙の有頂天

堺市 矢倉 五月
誉めことば無いがビールは注いでくれ

鳥取県 土橋 睦子
縄梯子伝つて逢いに来た堂

富田林市 大橋 鐘造
プライドがまだ捨て切れぬ影法師

和歌山市 青枝 鉄治
他人ごと聞いておれない突然死

横浜市 三村八重子
井戸からのスイカにだぶる終戦日

香芝市 大内 朝子
てのひらの皺がわたしを褒めてくれ

今治市 野村 清美
楽しみに余生は明るい彩を塗る

弘前市 岡本 花匠
開放の窓を信じて愚夫の私語

羽曳野市 西村りつえ
母さんのルーツはきつと太陽だ

鳥取市 春木圭一郎
ほどほどの位置に頼れる友がいる

米子市 小塩智加恵
花奥座に正座し作句メ切り日

川崎市 和泉あかり
笑うこと増えて西瓜に塩をふる

箕面市 椎江 清芳
おもむろに弔辞をたたむ紙の音

奈良県 渡辺 富子
遣伝子に先祖の垢がへばりつき

大阪市 町田 達子
一本の道で迷うのは止そう

西宮市 西口いわゑ
スランプのわたしへ星がよく見える

鳥取県 土橋はるお
人好しでいつも巻き添え食ってます

出雲市 園山多賀子
梅雨時間源氏の恋を漁り読む

横浜市 田中 笑子
組板の鯉になつて裏帳簿

岡山市 矢内寿恵子
まだ生きる余生の辞書を引きながら

藤井寺市 太田扶美代
義理チヨコの愛が途絶えるこのあたり

岡山市 藤原 一平
向こう岸ばかり咲いてる赤い色

唐津市 仁部 四郎
六尺を従え母が詫びに来る

唐津市 井上 勝規
陽に焼けた麦わら帽子より有難う

八尾市 吉村 一風
曲り角待つてたように涙出る

愛媛県 黒田 茂代
歳月へあやしくなつてくる記憶

横浜市 菱田 満秋
徘徊の兆しケイタイ持たされる

和泉市 横山 捷也
悪妻が見事に喪主を演じきる

愛媛県 中居 善信
耳底に残る八月の地の呻き

倉吉市 山中 康子
勿体をつけて頭を下げている

大和郡山口市 坊農 柳弘
よろめかず媚びずに人の群れに居る

八尾市 村上ミツ子
ホップステップそのあときつと転ぶ

京都府 丹後屋 肇
ゆきずりの香りを盗む花泥棒

神戸市 森本みはる
手相見ぬうちに手相が変わるらし

岡山市 井上柳五郎
近親とひそひそきめたのし袋

奈良市 米田 恭昌
日日快調タバコも酒も旨すぎる

倉敷市 井上 富子
識字力すつかりおちたボールペン

河内長野市 加島 由一
よく言ってくれた蛙の子は蛙

大阪市 浦田 綏子
悪代官家紋が同じ抱き名荷

大和高田市 鍛原 千里
古傷を庇う女の赤い爪

尼崎市 内田美也子
にこやかに仲間に入り煙たがられ

和歌山市 玉置 当代
悔しさを踏み台にして今日がある

大阪市 前 たもつ
せめて歳生きて親父を乗り越える

米子市 青戸 田鶴
いつも同じ記憶が今も甦る

河内長野市 植村 喜代
どうしようもなくなり坂を下りて行く

岡山県 福原 悦子
弱虫のポケットにある捨て科白

寝屋川市 太田とし子
一畳のたたみで思う四苦八苦

和歌山市 楠見 章子
慣れることも無視することもなおざりに

倉吉市 米田 幸子
雑魚どもが互角に権利主張する

鳥取市 夏目 健一
身勝手な理屈個性と勘違い

砂川市 大橋 政良
からみつく視線ふりほどこうとする

追悼 東野大八先生



平成十三年七月十八日没
法名 法輪大八居士 八十八歳

岐阜県可児市清香苑日本ライン会館での七月二十日の葬儀の日は、朝から曇ひとつないかんかん照りの真夏日、波乱の生涯を閉じた川柳人東野大八氏の死を悼むかのように、姦しく蟬の声が聞こえ、斎場を一步外に出ると、雄大な木曽川の流れが目飛び込んできて、目頭の熱くなるのを覚える。

斎場の入口には麻生路郎、相元紋太を始め氏が親しかった川柳人の短冊が屏風仕立てにして置かれ、数冊の柳誌、ぎつしり書き込まれた大学ノートが何冊か机の上に置かれ、参列者の目を引いていた。

本人がお気に入りの句であったのだろうか、

むらさきの山少年は老い易し

大八

が色紙に書かれ、置いてあった。

当日、川柳塔社からは三連休初日と、事故渋滞のため往路を九時間かかって、板尾岳人理事長と前たもつ副理事長が弔問した。

(早川盛夫記)

東野大八氏略歴(本名古藤義男) 大正三年(一九一四)愛媛県生まれ。昭和十年、旧満州で現地除隊。雑誌『月刊満州』『新京日日新聞』記者の傍ら、『満州浪漫』、華文芸誌『明明』編集に当たるとともに、『川柳大陸』(のちの『東亜川柳』)の創立同人となる。昭和二十一年に北京から引揚げ、『日刊新愛媛』編集局長、『日刊岐阜民友』編集局長、『中部財界』編集長をつとめる。(社)全日本川柳協会顧問、川柳塔社相談役。

東野大八氏を悼む

野村 太茂津

片腕は大陸に生き友は逝く 太茂津

アメリカ映画「プラトーン」(ベトナム戦争を描いたオリバー・ストーン監督、アカデミー賞)を見た大八さんは感想に

「私は幾十余年ぶりに私自身が、苛烈な地獄の戦場に身をおく想いで、失った左腕の切り創が、まるで強い電流を通されたように幾度も激しく反応した」と書いている。

大陸川柳人同窓会(参加者五十余名で、北は青森から、南は熊本までの文字通りの全国大会、昭和四十年四月六日富士山麓須走・富岳荘で)のあと靖国神社参拝の時、この大八氏の片腕と私の左腕とが、拍手を打った。私の右腕は彼の背を抱いていた。

何故か胸一杯になり涙が溢れて、しばらくは互いに抱き合った。あの時の彼の片腕の力が強く私の背に残っている。

私の右腕の肘には、ビルマ戦線で英軍の戦闘爆撃機の機関砲の破片でやられた痕があるが、この三針縫った痕も、大八さんと思う時、いつもビリッと電流が通るように反応する。大八さんは私より一歳年上の戦友兄貴として常に尊敬していたし、人生の相談や教えを

乞うた。すると私の気付かない事を教えてくれた。そして時には彼の筆力で強く叱ってくれた。そんな時、私はペンを机に置いて、不動の姿勢でその手紙を読んだ。「拝読する」とはこのことであろう。

この教えも、平成十三年七月十八日以後は聞かれなくなった。

彼の死生観の一端に、次の事が書かれている。「私は三十余歳の若いみそらで、九分九厘まで死んでいた。いまわのきわにみた死の淵は、氷のように冷たく暗く、混沌たる奈落へ無限の下降を持続するところだ。場所は戦場だったが、あたりは砲火炸裂して阿鼻叫喚の騒然たる天地だった。しかし、傷ついた私は、天涯孤独陰々滅々たる静寂の古沼にいる感触だった。大陸の四月の、めくるめく真昼の陽ざかりというのに、刻一刻と枯葉色のフィルムを積み重ねていくようだった。

私という人間が、死神に両足首つかまれながら、縁あってこの住み難い娑婆へ逆もどりしたとき素直に感謝したことは、日本人という民族の有難さであった。以下略」

今、兄貴戦友大八さんを悼み、不動の姿勢である。大八兄貴は「太茂津泣くな」と言っている。

口惜しくて痛には勝てぬ身を撫でる 太茂津

大八先生さようなら

八木千代

毎月終わり近くになると「川柳塔」がきっちり届きます。たいていの場合は玉青画伯の表紙絵に見入り、一枚はぐって巻頭言を味わい、目次、目次下―川柳の群像―東野大八―もうここできゅーんとしてしまします。

バリバリの記者だったというだけに、その視点の正確さ、文の歯切れ、口調そのままでの運びの巧さ、耳の奥に先生の肉声が聞こえてくるようです。

大八先生に初めてお目にかかったのは大陸川柳会が山陰の三朝で開かれた夜、私は姉の介抱で半年間ハルビンに滞在していたと言う大陸との縁で(それも大半は感染して入院中)

まことに蜘蛛の糸のようなすかな縁でした。

葉先生、薫風先生にお目にかかりたくて、ずいぶん無理をして三時間半ほど瑞枝さんと家庭から逃避したのです。薫風先生の隣には上品な母上が座っていらつしやいましたから、今は昔の大事な絵となつています。

「きやらばく」には会の発足から大きな力で支えて頂いたことも、川柳塔の脊椎ともいうべき見識の持ち主だったと今更ながら有難く思い起こすのです。

奔放な筆体でのお手紙、時折のお電話での磊落なお声、今も胸がつまりそうです。

その大切な大八先生が七月十八日午後二時五十五分に亡くなりました。

川柳塔から「川柳の群像」が消えてしまうなんて、あの名筆に逢えないなんて。

思えば思うほど長い思い出の中でも中国の二度にわたる旅、正坊さんのお世話で上海、蘇州、桂林は昭和五十九年。北京から大同は

民話あり熊の基平と世の花 大八(絵は八重子夫人)

民話あり
熊の基平と世の花



その二年後。ともに中秋の清しい季節でした。

私たちは武庫坊さんの班で「ムコさんムコさん」と呼んでは笑い、このなりたてのピカピカのムコさまの頼りがいのあったこと。

葉団長はじめ、みんな若かったのです。その中でも生き生きと水を得た大魚のような大八先生。たいいてい隣席でしたが、その博識。

上海から蘇州への車中（火車といったかな）テーブルを囲んで中国茶や甘栗を頂きながら、「ここは呉の国」から始まって「三国志」の熱談を堪能させて貰いました。

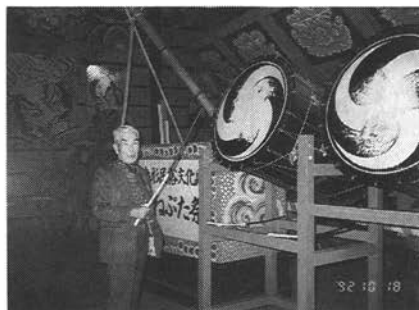
劉備、関羽、張飛、諸葛孔明、曹操——、三国時代の豪傑英雄の名を連発してお話。情熱の溢れる太い眉。まさに大陸人でした。

二回目の北京も大同でも、その土地土地の史実、正史の裏まで詳しく聞かせてくださり、「これが最後になるかも」と冗談に紛らせた呟きでしたが、郡上八幡、弘前——とその度に同じ言葉を聴くうちに、私も加齢につれて妙に不安な気持ちになったものです。

それが今、ほんとうに最後になったのです。追悼文なんてもう嫌です。もう書けません。

ただ同じ時代に川柳に生きて導いて頂いたご縁の有難さ、勿体なさに、此岸からお礼を申し上げるばかりです。

大八先生有難うございました。 千代



平成4年10月 弘前ねぶた会館で

大八先生の思い出

板尾 岳人

生き物が持つ避けがたい運命とは言え、人は一度この世を去らねばならない。そして永遠に会う事の出来ないとは、何と言う悲痛な事実でしょう。

七月七日尾道の路郎・霞乃夫妻の句碑建立の御報告のため、美濃加茂市深田へ。体が衰弱し朦朧とする中、「岳人、元氣出せよ」とおっしゃって下さいました。

その場に居合わせた者みな、大声で涙を流

しました。この言葉が最期となって、十日後の十八日午後、此岸から彼岸へ旅立たれました。先生の情愛の声として僕の体に沁みて、ひとり木枯らしにさらされ、寒天に碎けるような気がして寒気がします。（猛暑の中で）

先生の死は東方の象徴の星のように、にわか光を發して落ちて行くようで、剛直で素朴で誠実であった先生。彼岸へ柳人に逢いに逝かれたと思えば、なぐさめの思いとして納得出来るそうです。これが先生の人柄の美しさでしょうか。もう先生の静かな足音も聞えませんが、今日も先生宅の前の木曽川の水の流れる豊かに、そして深田神社の見事な大樹の枝振りも、先生の死も知らずに清浄無垢の姿で語りかけてくれそうです。

先生はこの世を去られました。涙の乾いた後には、何だか張合いのない疲労ばかりが残ります。でも、僕達の心の中に生きはじめ、棲み始められたのです。僕は先生が好きでした。度々男から男へ恋文をくださいました。檜ヶ岳山荘の穂刈貞雄氏も紹介してくださいました。そして、穂刈氏の檜百景のカレンダーを、毎年暮れに送ってくださいました。山に登れなくなった僕は、このカレンダーを眺めて上高地の河童橋の上に立って、北アルプス連峰を眺めている錯覚を抱きました。

もう一度槍ヶ岳山頂に立つてみたい。

空っぽの袖よその子がまたのぞき

北支の戦争で片腕をなくした先生の、ジンと寒くなるような句

満場の拍手われ異端者に非ざりき

拍手したくても、片腕では拍手のしようない悲痛なさげびの句

もう腕で抱いて欲しかる妻もまた

両手で抱きしめられない哀切の情は骨を刺す思い。

そして辞世の句

死にかけた話 他人は笑うなり

さようなら先輩

田中正坊

長城でけちな話がまた消える

「東野大八50句」を抄出するために、あちこち資料にあたっていると、こんな句が出てきた。昭和六十一年、川柳塔社の中国吟行で北京・大同を訪れた時の作品である。これは第二回目で、昭和五十九年に上海・蘇州・桂林を旅行しており、この時、お会いしたのが最初ではなかったかと思う。戦前からの柳歴を持ち、しかも八歳年長の大八氏が、新参の

私を古い友人同様に扱って下さったのは、橘高薫風氏との関係もさることながら、お互いに「ブンヤ」（新聞記者）上りという親近感によるもので、中国の大人（たいじん）というのが私の第一印象であった。

それから同氏のお住まいに近い郡上八幡市で開かれた翠柳吟社創立十周年大会や各地の記念大会、川柳塔社の新年おめでとう会、さては平成三年の台湾吟行などでもお目にかかったが、今も忘れられないのは、昭和六十年の青森県川柳大会に参加した後、大八氏ご夫妻と薫風氏、藤田泰子さんと私の一行が平泉・松島・仙台を足の向くまま周遊したこと、車中いろいろと耳学問をさせて頂いた。

没法子北京が還すおれの青春

見返しにこの句を書いた本を送ってこられた。兵役を加えて大陸生活十五年の哀歓を綴ったノンフィクション『没法子北京』（蝸牛社刊）で、同氏渾身の著作である。さらに平成八年には『人間彩影記』（葉文社出版刊）が出版されている。前者は書き下ろしだが、この本は『川柳雑誌』と『柳宴』に掲載したエッセイを収録したもので、昭和三十五年には川柳雑誌社から『風流人間横丁』を刊行している。このほか単行本としてまとめられていない文章は数えきれない。

その主なものに、『川柳塔』誌に毎号連載して二百数十回にわたる「人物群像」という川柳人の伝記がある。このうち半数以上は編集を担当していた私が最初に読み、中には資料を提供して記事にまとめてもらったものもある。『雑学』をもつて自認し、読みたがり書きたがりの私だが、博学多識で古川柳・現代川柳に造詣が深く、古今の川柳人と交遊のあることでは、大八先輩の足元にもよれない。私の句文集『ベンシル』の刊行は先輩のおすすめによるもので、過分の跋文まで書いて下さった。



平成3年9月 台湾で（右）

エッセーはともかくとして、この「人物群像」は、かねてから単行本化を要望する声があり、私自身もそのための企画を立てたこともあるが、実現には至らなかった。しかしこれは、一柳社だけでなく、全川柳界の文化遺産ではないだろうか。

川柳の向上発展と川柳結社の大同団結が常にこの人の念頭にあり、かつて大井正夫らとともに流派を超越した大陸川柳人同窓会を組織し、これを母胎として日本川柳協会が誕生した。現在の社団法人・全日本川柳協会の前身であり、設立以来、同協会顧問をつとめた。川柳界の大久保彦左衛門、今やなし。合掌。

大陸のはるか彼方へ消え行きし 正坊

巨星墜つ

早川盛夫

私が初めて東野大八氏にお目に掛ったのは、平成六年九月、鶴かこ川柳社（第四回お城川柳まつり）の大会の席である。その時の選者に東野大八氏を始め、斎藤清幸氏他、大阪からは川柳塔の西尾菜こ夫妻と橋高薫風氏をお迎えして、大山市制四十周年記念川柳大

会が盛大に行われたのである。その時はまだ挨拶を交わす程度の関わりでしかなかったが、その後何度かお会いしている間に言葉が交わすようになり、車でお迎えに伺ったり、大山善光寺にある川柳碑へ薫風氏と一緒にご案内したこともあった。

また第一回オール川柳賞記念大会席上でもお会いし、お話を聞くことが出来た。大変お酒が強く、懇親会などでは、私もいける方なので横に座らされることもあった。

平成九年には、東野大八氏、橋高薫風氏の推薦を得て川柳塔同人にして戴き、お手紙で励ましの言葉を頂戴した。

やがて前立腺肥大の手術を受けられ、闘病生活に入られてお会いする機会もなかったが、柳誌には健筆振りを発揮されており、まさかという感じの計報ではあった。

七月十九日の朝電話を戴き、通夜と葬儀の両日受付をさせて戴くことになり、せめてものご恩返しのできたかと思っている。

当日参列した川柳人から弔句を戴いて靈前に披講し、私の役目を終える。

次に私の好きな大八先生の句

美学とはきわまるところ首一つ

水すまし思案は少し流れてみ

叱られた子が口笛をすこし吹き

死にかけた話他人は笑うなり
老いてなお異国の星はまだ消えず

また著書『没法子北京』は、氏の十五年間にわたる大陸生活の中でも、敗戦の北京における哀歓交々の青春を綴つたノンフィクションの人間記録である。

戦禍で一瞬にして家を焼かれすべてを失つても、死の淵に身を晒す不運に遭遇しても、中国人は没法子の一言ですっぱり諦観してしまふ。一種のこれは偉大なる中国の民族的哲学である、と大八氏は語る。

没法子とは中国語で「仕様がなない」、「どうしようもない」と言う意味である。

そうしたことから、今日の東野大八氏の死もまた、あるいは没法子かも知れない。

私が氏から戴いた『没法子北京』の書に、こんな句が書かれていた。

幸せを母のいびきの横で知り 大八

早川盛夫さんへ

川柳界は、またひとり掛け替えのない川柳人を失ったことになる。ご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

安らかに眠れこの世は蟬しぐれ 盛夫

激動の昭和を生きた兵よ

青春は満州にあり没法子

満州を生き抜いてきたデスマスク

東野大八50句

水莖のあと行軍に持越され（川柳共栄園）

生菓子が出来ても満系無口なり

引眉毛ほんとの眉はこんなところ

のしかかる明日と云ふ日へ胡坐かく

死んだのは他人しんみりすればよし

珊瑚玉へ聞けば昔は流行妓

冷麦の水へすだれの目が動き

口開けて妻が寝て居る倦怠期

引眉も濃ゆく夜の蛾まちへ出る

白系の乞食に惜しい眼鼻だち

惚れて居る女箒は何處ですの

塔のある街へ駱駝の鈴が着き

喫茶店いま理髪屋に居た男

高梁の葉ずれ日本はあつちです

潜伏匿居る部落なり杏咲く

乾いてる錨の上のノスタルジイ

おっさんと言はれて夜のバナマ帽

闇の海死を引受ける音で鳴り

流弾が白しむしった木が揺れる

としよりの流しと飲んでいる吹雪

ホホホと笑って蝶々花を去り（僕の昆虫記）

カフエーの気分で蟻は花を出す

冗談はよせと離れたハエ同士

春風にまた飛んでみるてんと虫

ボクサーの型でかまきり身構える

くつわ虫調子が出ましたルンバです

水すまし思案は少し流れてみ

のみの子とはんぱ返りから稽古

百足いま後ろの足とすれちがい

こがね虫貧乏暇なしですとい

溜息も光ると螢は知らずいる

青空の広さをいなかまだ見てる

またしてもはずみのついた金ブンブ

げんごろう泥はふとんのつもりなり

大空は羽根が重たい川とんぼ

鈴虫の生命青さへすき通り

こと切れていくのか蝶も重くなり

B52黒く冷たく重くとぶ（ベトナム鎮魂）

へり乱舞 狂気相呼ぶ屠殺絵図

泣く子等へ母のぬく味が消えてゆく

鉄帽へ挑むはかなきワラの笠

首一つ笑ったままで水に揺れ

落橋も錆び墓も朽ちメコン河

揺れ動くジャングルの底その鬼火

監視哨狂った女今日もさまよう

停戦の花火歓呼の眼にしみる

象と蟻 寓話は生命あるごとし

おれに似た豪傑もいる水滸伝

紫禁城 礼儀三百威儀三千

むらさきの山少年は老い易し

誹風柳多留二四篇研究

33

女房が得意顔でしゃべっている様子。

八 16

花ものをいハねど女房けどる也

九 14

柳だのさくらだのとて出られやす

大野 賛。出来立Ⅱ当人はうまくやったつもりでいるが、他人からは出過ぎたと批判されるようなやり方。(『角川古語大辞典』)

小栗清吾・粕谷長生
橋本秀信・山田昭夫
伊吹和男・大野秀二

この女房、あまり評判はよくなからう。

清とは言うものの、亭主は吉原へ行っているのではないか。女房がそのつもりで居るだけ。

清 博美・佐藤 要人

佐藤 礎稿十 大野説。

257 じゃくめついらくから賑かなところ

を脱する筈のところを、煩惱の塊で賑わうのを皮肉ったともとれる。

小栗 「寂滅為樂」は、「煩惱の境を脱し、涅槃の境地にいたって、はじめて真の安樂があるということ」(『日国』)であるが、川柳では、謡曲『三井寺』の「入相は寂滅為樂と響きて、菩提の道の鐘の音」から、入相のことを示す場合がある。

橋本 賛。正燈寺から吉原へ。

粕谷 橋本説、補足して賛。

清 この際、正燈寺を持ち出す要はないと思うが。

佐藤 暮六つの鐘を合図にして吉原へ。

258 桜へもやらねと女房でかしだて

一五二
じゃくめついらくにてまくをはつすなり

安五義 5

じゃくめつのびづく時分にみんなまけ

安四喜 3

主題句は、吉原は入相の時分から賑やかになるところだということである。本来煩惱の境

小栗 出来し立てⅡでかした風をすること。

うまくやったというさまをすること。(『広辞苑』)

「亭主なんてものは、とかく何かにかこつけて吉原へ行つちまうものなのサ。だからウチでは桜見物にも行かせないのサ」などと、

259 目つふしを後家百八を持て居る

小栗 目潰しⅡ砂・灰などを打ちつけて、相手の目をくらますこと。また、それに用いるもの。(『日国』)

百八Ⅱ数珠の異称。珠が百八あるからいうのである。(『川柳辞彙』)

後家が、数珠をいつも持ち歩いて貞淑さを装っている。という句だと思ふ。数珠が、後家の身持ちの悪いのを他人に知られない為の目潰しの役目をしているというのである。『辞彙』が本句を引き「誘惑に勝つ」と脚注しているのには賛じがたい。

爪マ操ハ後家百八が万八か

六 13

町内へ来るとつまくるにくい事 天 梅 2

清 「辞彙」の説も成り立たない訳ではないが、礎稿のように解さぬと、句の面白さが半減する。

佐藤 礎稿賛。

260 よし廣をさして貞盛おちをとり

小栗 吉広 大山石尊参りの時に奉納する木製の納太刀。義広（時には「吉広」「義弘」とも）と銘を入れたところからいう。転じて、木太刀をいう。（日国）

落ちを取る 好結果をおさめる。拍手喝采をうける。（江戸語の辞典）

本句については、「史伝」に採句され、「左句貞盛は底本天明六年・天二才万句合、た、もりをさたもりと誤読し貞盛の字を当てたるもの」と解説がある。さし当たりこの説に従えば、平忠盛の「豊明の節会」（『平家物語』巻第一・第一句「殿上の聞討」）の句ということになる。天承元年十一月二十三日、豊明の節会の夜、忠盛の昇殿をねたんだ殿上人が忠盛蘭討ちを企てたのに対し、腰刀を差して参内し、後日これを咎められると実は木刀であったことを示して観感にあずかったという挿話がある。

主題句は、この挿話の木刀を、大山参りの木太刀「吉広」になぞらえ、これを差してすばらしい結果を得たものだということのである。

ただ、勝句刷の影印本を見ると、やはり「さたもり」と読めるように思う。因みに、活字本は「川柳雑俳研究会」刊行本も、本句の作者である雨譚の「雨譚注」（有光書房）も「さたもり」である。ただ、「平貞盛」では主題句の解にいたらず、礎稿としては三面子説を拝借して置すが、諸兄のご意見を承りたい。しやうぶ刀ナにて諸卿をおどす也 籠 324

忠盛ハ竹光を差ス元祖也

明元天 2

橋本 礎稿賛。平貞盛は将門の従兄弟で、秀郷とともに将門を討った将であり「将門記」・「前太平記」に詳しいが、管見の限りでは、主題句のような挿話なし。

清・佐藤 同。

261 奥中よろこびめかけしつをかき

小栗 「湿をかく」は、皮膚病である皮癬ができていること、あるいはそれが痒いので掻くこと。

殿様の妾が皮癬に罹り、身体をボリボリ掻いている。これでは殿様のご寵愛もあるまいと、奥（夫人）の人達はみんな喜んでい

いうわけ。

お見たてとよばるとしつをかきやめる

しつをかくたいこしんだいはめつ也 八 6

橋本 賛。大名・旗本の屋敷で、夫人の居室を奥という。

清・佐藤 賛。

262 けちなみえ坊八ツ山で駕に乗り

小栗 八ツ山は品川宿近くの地名。現在のJR線を跨ぐ八ツ山橋通りで、ここから北品川宿は目と鼻の先である。

遊客が八ツ山から駕籠に乗った。見栄を張って品川の妓楼に駕籠で乗り付けるところを見せようというわけだが、しかし八ツ山から乗るとはまったくけちな野郎だという意。

いうまでもなく、吉原は大門から内は「医者」の外、何者によらず乗物一切無用たるべし」とされていたが、品川は街道に面していたので駕籠の横付けができたことが背景にある。

そこいらで乗て横つけ何事ぞ 安二松 4

八ツ山で目のくれをまつけちなやつ

安九仁 3

清・佐藤 賛。

荀香のむ

宮西弥生選

大切な余命だ借りは作れない

底ついたことを知ってるのし袋

歳という鞭がだんだん恐くなる

懸命にボタン掛けてる自立心

あやまちの深き処に母も立つ

自分史は四コマ漫画でしめくくる

鶴を折る自分を安堵さすために

耳鳴りはわたしの軌道修正か

泣いて泣いて紙人形は重くなる

人間に飽きがくるまで生きてやる

ひまわりに教えてもらう夏の顔

恥を知る木の年輪の幅広し

月欠けて満ちて輪廻もこのように

どうしても手本にしたくないピカソ

命震えてたった一つの実は落ちる

飾り窓これというものの置いてない

見る人の思いいろいろ月の顔

闇に目が馴れると見える下心

横浜市 近藤 道子

尼崎市 内田美也子

大阪市 町田 達子

寝屋川市 堀江 光子

米子市 政岡日枝子

大和高田市 鍛原 千里

西宮市 西口いわゑ

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 木本 朱夏

富田林市 片岡智恵子

寝屋川市 龍島 恵子

八尾市 宮崎シマ子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 武本 碧

芦屋市 黒田 能子

尼崎市 春城 年代

和歌山市 吉村さち子

吹田市 山本希久子

老人の群れを支える一人っ子

風鈴も自分の音を持つている

巣立ちして軽くなるはず重くなり

流れ星待ちくたびれたんだらうか

曲がつたきゅうりレジスタンスの味がする

身に覚えのないタネまいていたらしい

見下ろされまいと棕櫚の木伸び盛り

孝行の代りに守る父の墓

一言を口に出すのに胃が痛み

麵棒を嫁に渡して安らぎぬ

探し物していて昔の風に会う

衝動買いします病名増えたので

花火見る時は一緒にいてほしい

安心をもらいに医者へいつてくる

大の字に寝ても寂しい足の裏

いつまでも同じ姿勢は続かない

折れそうなヒールで夏はまだ続く

遠くなるでも実家へは近くなる

露天風呂 賞味期限の切れた顔

傷心の渚にあった赤い靴

ブランドの顔で佯助つんと咲く

鎌かけてきたな刈られてやるもよし

マジシャンのロープは起立いたします

ガーデニング同じ手順で枯れる鉢

虫とりの子に仰天のいば蛙

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 西山 幸

羽曳野市 西村りつえ

富田林市 中井 アキ

和歌山市 楠見 章子

堺市 志田 千代

和歌山市 福本 英子

米子市 鷺見 正子

横浜市 清水 潮華

鳥取県 土橋 睦子

熊本市 永田 俊子

寝屋川市 岸野あやめ

藤井寺市 太田扶美代

鳥取県 さえきやえ

高知市 小川てるみ

米子市 青戸 田鶴

川崎市 和泉あかり

鳥取県 吉田孔美子

今治市 塩路よしみ

奈良県 渡辺 富子

倉吉市 野口 節子

和歌山市 桜井 千秀

寝屋川市 平松かずみ

大阪市 津守 柳伸

寝屋川市 森 茜

突然に私の坐る椅子がない

哀の風なぜかわたしへ吹きまくり

紫陽花の雨に蛇の目の傘を貸す

春夏秋冬出番待ってる花暦

つまずいて海のきれいな町に来る

一週間指にかくれたナスのトゲ

八月三十日絵日記のため海へ行く

無処罰の言葉のナイフ受けてます

虚か実かどくだみ草の花の白

シャッターの期待通りに陽が落ちた

六法にまだ縁のない平和主義

原爆忌まだわだかまり解けぬまま

余生いま小さな花を全身に

しあわせでした錯覚と気付くまで

添え木になって子に仕えよう母ごころ

突然に枝はしくなる下り坂

紫陽花も枯れてあしたが見当らぬ

爪派手に塗って私の色変える

あたたかな風に会うから生きられる

若い日の夢を実現してる今日

タダイマだけで子供の様子わかる母

未だ二人ではない三人の暮し

新たな期待でガンジー非暴力

雷を宥めて妻の座が堅い

絵手紙の短い言葉温かい

岡山県

和歌山市

出雲市

香川県

愛媛県

大阪市

西宮市

箕面市

尼崎市

米子市

倉敷市

大阪市

八尾市

鳥取県

鳥取県

羽曳野市

西宮市

三田市

香芝市

富田林市

東大阪市

八尾市

米子市

米子市

川崎市

矢内寿恵子

松原 寿子

園山多賀子

川崎ひかり

花岡 順子

渡部さと美

緒方美津子

出口セツ子

長浜 澄子

足達由美子

井上 富子

板東 倫子

高橋 夕花

岩崎みさ江

田村きみ子

徳山みつこ

門谷たず子

久保田千代

大内 朝子

藤田 泰子

北村 賢子

村上ミツ子

林 瑞枝

白根 ふみ

小林久美子

道連れの介護の杖が忙しい

昼の月つましく生きた母に似る

見えぬものハート開くと見えてくる

繕うてせつせと絆繋いでる

入道雲の力が欲しい細い道

憂の日のコーヒーなぜか香らない

大切な小指は彼のためキープ

本当の姿は暗闇の中に

正の字で子の夏休み取り締まる

風呂敷へふんわり包んできた言葉

めし粒の固くなりしを老母の胸

鳥取市

鳥取市

生駒市

大阪市

西宮市

伊丹市

八尾市

松江市

横浜市

和歌山市

西宮市

録沢 風花

近藤 佳子

飛永ふりこ

三浦千津子

奥田みつ子

櫻谷 郁子

井尻 民

川本 畔

鈴江 純子

古久保和子

牧渕富喜子

道子さんの句―人生も後半のランにさしかれば来し方をふり返

るものである。タイミングよく作者の句と接し心を打たれた。ふり出しに戻れない人生だから大切にしたいし、沢山の収穫を残したいもの。いわんや、人生に「借り」は残したくない。後味の悪いおもいなどはまっぴらである。美也子さんの句―「智に働けば角が立つ、情に竿させば流される」昔も今も義理は変つていない。いろいろな出費のある度、のし袋を開けたり閉めたり、何とユーモアのある句であろう。もっとフランクにおつき合いがしたい。道子さんの句―長い間、人間を続けていると有難くないお歳をいただくものだが、考え方によれば、毎日をつくり返る事も年齢のお陰であるしました、思いもかけぬ勇気もいただく事もある。もっと中味を重視して行きませんか。光子さんの句―けなげな生活態度に頭が下がる。ひたむきな精進の重ねとその気合いから、自立心は生まれるのであろう。ボタンの表現がまた良い。

秀句鑑賞

同人吟 桜井千秀

— 8月号から

賞味期限切れて夫婦に味が出る

驚見正子

ご依頼を頂いた時は軽い気持ちでしたのに
ガラ刷りが届いて、すっかり身構えてしまい
一句一句と対峙。とても堅苦しい鑑賞文とな
りました。その点はよろしくご勘弁の程を。

二階から紙飛行機を投げて

和田 つづや

こんな時は大声で「エイー」と叫びたく
るのでは……。誰を目がけて投げると言うの
でなく、自分自身の不甲斐なさへの行為。でも
それで多少は気が晴れると言うことで。

その中のただ一本が枯れている

和泉 あかり

咲き誇っているのも目立ちますが、枯れて
いるのは余計に目立つ。ただ一本の枯れ木に
心を乱しながら明日の自分を垣間見る作者。

ホラ吹きが揃い絵になる屋台酒

梅田 宣司

屋台酒は覗いたこともないのですが、側を
通ると気炎から雰囲気伝わってくる。まご
と、これぞ男はんの世界と言うのでしょうか。

番傘も蛇の目も知らぬ雨の街

矢内 寿恵子

近頃テレビで京都の町のシーンに蛇の目傘
の放映が増えて来た。消えて行く物への郷愁
からか。雨の日はやはり濡れぬ車が一番いい。
母のお出かけ一から十のメモがある

寺川 弘一

メモの通り買い終わってやれやれ。うっか
り後回しと軽く片付けて、買い忘れも度々。
一から道順を達せず書くことが大事です。
ふとある日易者の前に座ってた

生嶋 ますみ

同病相憐む、この句にそんな思いが湧いて
きて、相槌を打っていました。右が左か迷う
より占いに走るのが癖、一時の心の安らぎを
求める。悩むよりは賢明と決断の果てです。

童謡を唄うと風がタクト振る

内田 美也子

童謡は風に乗って、風は童謡に触れてその
柔らかなさを醸し出しているのです。幼き日の
歌声が今なお、故郷の風の中に潜んでいます。
立板に水のおひとを立てておく

山本 義子

「異議なし」諸手を挙げて同調。人前に立
つと巧く喋れないもどかしさから、弁舌爽や
かなお方には、一歩引いておくに限る。

四コマに今日のわたしを開くため

高瀬 霜石

人生は毎日毎日同じ繰り返しで善しとせ
ん。何だか悟りを開いた高僧って感じ。でも
誰しも言うか言わないかの違い。朝、昼、夕、
夜この四コマの中で、もがき続けている訳だ。
俺が死んだら猫に小判のこの蔵書

丹下 美津子

二階の三畳にぎつしりの川柳誌、いつの間
にこんな……。困ったとは思いつつ今の処手
離す気もなく、ただ本に埋まって物思い。

吊り橋を渡ってからは太い声

宗 水笑

ゆらゆら揺れる吊り橋は、声をおとして静
かに静かに。例えどんな大それた意見でもこ
は我慢の為所と、渡ってからにさいませ。

自販機の缶が空になる無人駅

荻野 鮫虎狼

客があろうがなからうが、無人駅の自販機は忠実、ひたすら冷やし続ける。時たま降り立つひとへの心配りが怠れないから。

不思議にも追い込まれると出る力

森井 菁居

そうですね、あんなに力自慢だった頃をすっかり忘れていても、そこは昔取った杵柄でさあの時発揮出来るのです。嬉しいじゃありませんか。作者の微笑みが見えてくる句。

せんべいを昔貰った恩がある

吉岡 きみえ

因幡の白兔は受けた恩を忘れず、折があればと機会を窺っていた。小さな動物の健気さが愛しい。たかがせんべい、されどせんべい。頂いた味の旨さは忘れてはいないはず。

空想で始まるわたくしのドラマ

城 多喜

自由自在に駆け巡る空想の中で、確実に掴み取らねばならない現実。そこから始まる明日からの人生。楽しくてちよつぱり怖い。

僕に似た子の欠点へ目をつぶる

美田 旋風

目をつぶると、案外短所も長所への足掛かりと思える。この親にしてこの子ありの感。

譜面通り踊る私は劣等生

野口 節子

出しゃばりなのに唄も踊りも苦手な私、譜面通りに踊れる作者が羨ましい。だが作者は自分の創作舞踊への憧れに燃えているのだ。

遣いつくばってびくともしない草の意地

光井 玲子

地面に這うように伸びる草の根、庭を占領されて、カンカン照りに草と格闘。幾ら意地を出しても日射に弱いこちらの負けです。

紫陽花の呪文にばかり動けない

西口 いわゑ

紫陽花の花ことばは、短気、移り気。その呪文にかかったと言ういわえさん。ご自分の持つ優しさ故か、ここは窮余の一策、貴女の大きな愛情で打ち勝つより外ありません。

暑さ寒さ雨にも止まる万歩計

福本 英子

それでいいのじゃないですか。どれだけと決められている訳でなし、足の向くまま気の向くまま、ご互いに気楽とんぼと言うことで。

履き馴れた靴にとつとつ穴があく

吉村 さち子

日常茶飯事を句に纏めるのが実に巧い。唯頷くばかり。穴のあいた靴に愛着があり捨てられず、矯めつ眇めつする姿が浮かんできてくる。

そしられてどしゃ降りにあう帰り道

森 茜

歳の差はあっても茜さんとは同じ初心者仲間。そしられても慰め合つた帰り道。もう二十年も前のことなのに忘れられぬシーン。

恙なく過ぎた六十路の河内弁

井尻 民

ナマの河内弁は聞く機会がなく、この句を鑑賞させて頂くのもおこがましいとは思いつつその土地に住み馴れ、その土地に骨を埋める気骨が感じられ、羨ましくなります。

人真似が上手で森へ帰れない

吉川 寿美

菌切れがよくて奥深い句。この作者独特の持ち味が、読者に感銘を与えること間違いないと、太鼓判を押しておきたい。

娘がくれただけで嬉しい赤いシャツ

齊藤 さくら

私も殆ど娘のお古を着ています。派手でもサイズが合わなくても平気。三年前に貰つた青いシャツ、小泉さん人気で自慢しています。

大中小とり混ぜて飼う腹の虫

西出 楓楽

私など特大で時々飛び出す癖があり、持て余し気味。これからは有明透かせて行きます。温厚な楓楽さんでないと、気が楽になりました。

シンプル

板垣草丘選



シンプルにできんか省庁新名称
シンプルな改革論で受けている
シンプルだけど一番高い服なのよ
シンプルな矢印だから信じよう
シンプルな男ブッシュホンが似合う
多機能を避けてスイッチオンかオフ
シンプルになってわからぬ全自動
パソコンに向かいシンプルぶっている
シンプルな暮らし百歳の笑顔
シンプルな暮らし夢見る大家族
シンプルな景色がみごと枯山水
シンプルに生きる世間の片隅で
シンプルを望みしがらみ捨て切れず
病んでからシンプルライフ強いられる
父さんの挨拶シンプルすぎないか
シンプルに生きた証を風が消す
シンプルな影に腹蔵など見えぬ
手も足も動くシンプルなる幸よ
シンプルな人工弁のしたたかさ
シンプルな名前に油断してしまう
シンプルに働いている信号機
シンプルな嫁に心預けてる

棲世 俊路 弘一 緑良 裕峰 保州 鐘造 公誠 求芽 みはる 健一 度 寿恵子 孝雄 朝子 順風 扶美代 春雄 典子

シンプルは馬鹿者なりと辞書にある (國) 輝夫
単純な人だ手相に書いてある 今日子
幸いにも超シンプルな家系です 千代
シンプルに生きて世渡り下手な亡父 像山
シンプルな墓石が似合う父と母 水笑
シンプルな線でなぞれるわが軌跡 英旺
シンプルな暮らしに戻る二人きり 盛夫
シンプルライフ男が回す洗濯機 ツネ
面接へシンプルな服買いに行く 遠野
シンプルな服装にする或る出会い 清史
シンプルが好きだが少し伐り過ぎた 伊津志
徒長枝切って年金暮らしする 照彦
照れ気味にシンプルな愛雀 羽次男
シンプルな紙人形に温かさ 庸佑
一汁一菜玄米を囁んでいる みつこ
佳
身辺をシンプルにして待つ天寿 兵八郎
回り道してシンプルに辿り着く ちかし
本物はもつとシンプルだったはず 大輪
シンプルなステンドグラスに透ける罪 愛論
シンプルが受けコンビニのにぎりめし 強一
人
シンプルな日の丸にある明と暗 圭二
地
シンプルなカバーを掛けた私小説 敏子
天
シンプルにくらしています 茄子胡瓜 岸野あやめ
軸
シンプルな間取りで寝起きしています

人妻

中井アキ選



初恋もセピア色して人の妻 彩子
人妻になった娘がもう戻り ますみ
鬼ごっこ追ったあの子は人の妻 (渡) 富子
旧姓のままでOL続けている (保) 絹子
近松のおはんもどきの恋があり かつみ
三度目でやっと人妻らしくなり あらた
人妻はボクにやさしくしてくれ 千代
人妻と判り気軽に言葉かけ 幸夫
大輪の笑顔人妻になってから セツ子
人妻に斜めに走る影がある 畔
人妻となつても理屈抜きに好き さち子
さすが人妻ジョークを軽く受け流す 健一
人妻の境界線が分からない 典子
忍耐はやめたと妻が狼煙あげ 茶子
人妻が他人の夫と出す和音 照彦
人妻に逢うのかメガネ拭いている 虹汀
人妻とひととき辿る花邊路 晴翠
むかし昔を夢見る妻のサングラス 巳代一
友達のとつても息が合う 時弘
人妻と呼ばれる艶のある間 あずき
人妻に死角があつた星月夜 靖巳
人妻のワルツは軽く身をかわす 俊路

人妻というときめきを武器にする
女偏心得てます人の妻

緑良
重人
孝雄

人妻という鑑札が効いている
人妻と紅葉散るのを見ている

度

人妻は良さだけ見える位置に居る
その時は人妻ということにする

ちかし
螢

人妻にとても愛想のよい夫
バツ印も人妻でない私

正子
大輪

人妻と後ろ姿に書いてない
人妻がくれた鮎玉ほろ苦い

よしみ
岳水

人妻が重くてノラに憧れる
人妻と少し危険な夢をみる

たず子
清芳

人妻に懸想している昼の月
サクラサクラ今も亡夫は生きている

千里
由一

人妻にゆめりゆめりと揺れている
人妻とコーヒを飲む不整脈

扶美代
邦昭

人妻と聞いて何処かではつとする
有夫恋 夫に見えぬ場所に置く

可住
充子

人妻はバラよきれいな刺がある
人妻が光ってみえるから怖い

みつこ
善信

人妻と逢う約束の白い靴
天

しげお

愛妻弁当おこはプーメランになる
軸

高瀬 霜石

人妻になって妹光り出す

軸

うるさい

渥美弧秀選



官僚の耳にうるさい真紀子節
うちの犬よりもうるさいよその犬

強一
安子

部屋割りは軒かく人かかぬ人
耳鳴りがうるさい夜は眠れない

正雄
像山

泣く子より親の大きな叱り声
飼い主はうるさい思わないのかい

美津子
修

うるさいが軒の燕に餌をやる
口うるさい父を偲んで墓洗う

靖巳
たもつ

うるさいが孫のピアノは褒めてやる
候補者のマイクうるさい街にする

タミ
寿恵子

うるさいでも生き甲斐がある子沢山
うるさいがワイフいいなと生きたれぬ

清史
昌路

身に覚えありうるさいと逃げことば
うるさいのが休んで職場活気づく

昌鼓
邦昭

報道のうるさい取材目に余り
うるさいと虐待される子の瞳

鉄治
四三郎

うるさい愚痴馬耳東風と聞き流す
切札を持つてうるさい問いつめる

ゆきの
彩子

妻だからうるさいも言う血糖値
うるさい部長恐妻と聞き好きになる

俊子
周信

小うるさい亡夫でしたがと涙ふき

弘一
綏子

女房はうるさい客のランクつけ
酒やめよタバコやめよとカルテ言う

公誠
洞庵

息詰まるゲーム解説喋り過ぎ
したたかなハエとラーメン待つている

志洋
哲男

嫁姑どちらが今日は留守にする
うるさいさを逃がれ一人のイヤホン

（編）
政良

喪が明けて世間の口がこううるさい
十年先のうるさいさが役立つの

求芽
緑良

消しゴムの下にうるさい私語がある
見て見ない振りには出来ない老婆心

ひかる
霜石

しあわせなことによく鳴る腹時計
赤ん坊を起こして回る選挙カー

大輪
可住

健康食健康食と攻められる
耳栓をはずし雑音聞きません

雄々
しげお

人の目がうるさいすぎますお月さま

佳

たまに来て義母が糠床かきまわす
消沈の遺族にマイク付きまとい

満秋
正剣

間に合ってますの口調が強くなる
お隣の犬もピアノも夜通しだ

裕峰
妻子

草取りの汗にヤブ蚊が付き纏う

（保）
絹子

野次馬が上げる党首のボルテージ

充子

一斉に団地がのぞく救急車

泰竜

目に残るうるさい母のあの笑顔

森下 愛論

選句する時もうるさい蟬しぐれ

軸

初歩教室

題——引く

吐田公一 はん だ きん いち

前回の合成法について例示で解説しよう。

○ノ一ネクタイ和氣あいあいを演じてる（無名）
○ノ一はノ一はつきり言つて支持を得る（無名）
この二句は同じ人の「ノ一」という題でご投句いただいたものであるが、ノ一ネクタイの六音字をノ一タイと四音字にし、これにノ一タイだから齒に衣を着せないで喋れる状況を持つてくると、▽ノ一タイではつきりものを言う——までが出来上がる。あとはこの下五に何をもつてくると一番ピッタリになるかというところであり、日曜のテレビ討論などを見ていると、ノ一タイの都知事の姿が彷彿とする。

▽ノ一タイではつきりものを言う都知事
となると川柳らしくなったと言えるのでは
添削句

○主婦の座を引退しても口出しす 文江

言い切らずに余韻を残すように

▽引退をした主婦の座にまだ未練

○もういいと愚痴る夫の袖を引く 昌鼓
上五の抽象的表現が拡がりのある語であればよいのだが。具象化すると

▽娘の縁へ愚痴る夫の袖を引く

○お別れに最後の紅を引いてやる 栄翁

最後の「紅」とあれば「お別れ」は重複表現

▽世話かけた妻へ最後の紅を引く

○どうするか引くに引けない立場です 三喜夫

上五が冗長な説明句

▽夫婦喧嘩引くに引けない仲裁者

○引金を引くよう記者はマイク向け 彰雄

引金の表現、分らぬでもないが多少無理があるようだ。

▽話引き出すよう記者はマイク向け

○親しさの一線を引く人妻と 三郎

情緒を詠み込むようにすると

▽人妻へ一線引いているワルツ

○妻よりは早く暮引く年勤定 清

内容がしつかりしていれば下六でもいいが

▽すまないが先に暮引く年の順

○低金利目減りで寒くなる老後 像山

原句では引くにやや遠い感じがする

▽年金の足を引く張る低金利

○引き受けて後で後悔する私 郁代

後悔先に立たずというように後では冗長

▽しゃしゃり出て引き受け後悔する私

○風邪引けばくすりよりも先ず安静 謙次
説明句。小道具を用いてみると

▽風邪引きへ先ず安静と聴診器

○保育園保母が手を引く泣いてる子 きらり

原句を倒置法でやってみたが？

▽泣いてる子保母が手を引く保育園

○上司には違うと言えず引き下がる 綾乃

「違うと言えず」が表現不足といえる。

▽横車通す上司へ引き下がる

○50%引き帰つて見れば期限切れ 益子

縮めて読んでも上七。上五に整えると

▽五割引き帰つて見れば期限切れ

○意志固く妻の介護へ引く市長 輝夫

高槻市長について兵庫県知事がおられ、時事吟としては後者を――

▽病妻の介護へ知事の椅子を引く

○引き算をすれば自分は零になる トシエ

面白い見付けだが、下五がいだけない。

▽今からは引き算ばかりになる余生

○友達も一線引いてお付き合い 和香

友達を省略してみると

▽一線を引いてもめないお付き合い

○釣音痴餌引いても気にしない さだを

内容が乏しい。天下国家のことを考えている男を想像すると

▽太公望餌引かれても気に留めず

○生も死も潮の満ち引き波まかせ 比佐子

下五の表現に一考を。中八になるが

▽生も死も潮の満ち引きにある運命きんめい

○一步引き補助席になれ心地よい 栄子

補助席を主婦の座を譲った姑の席とする

と、嫁との仲もうまくゆくのでは――

▽主婦の座を引けば居心地いい家庭

○定年に若いと義理で惜しまれる 照彦

情緒性のない説明句

▽後任へ椅子引き渡す定退日

○有名人引き入れ臨む選挙戦

構えてるようで句が固い。

▽タレントを引っ張り出して選挙戦

○負けまいぞ長引く不況も怖くない 更紗

標語を読んでいるよう

▽改革の足を引っ張る不況風

○引き起し躊躇依然勝ち名乗り つよし

勝ち名乗りは躊躇して受けるもの。貴乃花

のことを思うので

▽引き起しゆとりを見せる貴乃花

○引き際をきれいにしたい老の日々 よしこ

原句もいいが。句意が異なるが

▽I-Tの時代引き際考える

○二次会へ引くに引けない酒の席 たえ

引くに引けないとあれば義理が絡むのでは

▽二次会へ引くに引けない義理の席

○アニメの面袖引っぱられ夏祭り サト子

アニメの面（孫）が夏祭りへ行きたいのか、

面が欲しくて袖を引っ張るのか不明。上六に

なっても助詞は必要

▽アニメの面が袖を引っっぱる夏祭り

○引き際に男の意地が見えかくれ 満子

▽引き際を濁し交替劇終る

○引いた手にあまりに軽い母いとし 勝久

手を引いて軽いとは？

▽引いた手に伝わる老母の瘦せ具合

○かけ引きのうまい女房が舵をとり 菜月

いい句。だが最近の川柳では女房という言葉

業は余り使わない。上手な妻がでは？

○引き潮にモノクロで見る砂遊び 妙子

中七はビデオカメラの意か？正直私には分

りかねる。

▽引き潮に親子で築く砂の城

○楽しみは引き潮待つて浅りとり 錦

楽しみと待つてが冗長

▽引き潮へ親子ではしゃぐあざりとり

○転職へ髪引かれつつ独り発つ 孝明

転職を擬人化すると

▽後ろ髪引かれ転職独り発つ

○不景気が長引くはずじゃなかったに 半覚

時事を読むとすれば

▽長引いてる不況へさらに米百俵

佳句

後継者育て引き際あざやかに (木)美代子

しっかりと生きて爽やかな幕を引く 敏子

押されても引かずどしどし押す総理 栄呼

大漁の手応え確か網を引く 純

第一線引いて真価が問われ出す ふりこ

駆け引きが下手な私の勇み足 賢

屋台引く父の背だんだん丸くなり 四三郎

世渡りのかげ引きの差で勝負つく 英旺

引き金は最後の手段時期をまつ 欣子

引きついだ経理不明な穴だらけ 侑子

コヒー豆ひいて今日が動き出す 宏子

握手した後も尾を引く嫁姑 智加恵

ここまでと線を引いている子供部屋 (山)雅子

出無精の祖母引っ張って夏祭り 好勝

引き潮になって故郷から計報来る 裕峰

引き際が念頭にあるトップの座 (三)八重子

引き際を誤ったのか四面楚歌 美柊子

一言の嘘が身を引くはめとなり ふみ

(表現がいい)

恋の熱引けばいつもと同じ朝 (伴)洋子

(着想がいい)

逢いに行く少し濃いめに紅を引き みはる

(女の情念を――)

私の句

添削へ誤字確かめる辞書を引く

わが柳眼の中欧記

ドナウよいつまでも青く

早川 棧 世

長い間、ぜひ一度行ってみたくて念願していた中欧の国々を、やっと回ってきました。感激です。しみじみとした余韻です。そして、ガイドブックにないみやげ話を、ちよつとさせて欲しいのです。

中欧という言い方は、歴史的な呼称である割に一般的でないのですが、オーストリアやハンガリーなどの諸国です。戦後いち早く永世中立を宣言して主権を回復したオーストリアを除き、大多数の国が社会主義体制に組みこまれていました。このため冷戦時代には西側諸国、西欧に対し、政治的な意味で東欧と呼ばれた国が多いのです。中欧というのは、大ざっぱに言って、第一次世界大戦まで、六百年にわたってヨーロッパにおける政治、文化の屋台骨であったハプスブルク帝国の領域です。ハプスブルク家は、代々政略結婚を重ねて覇をとえたヨーロッパを代表する名家

です。この地域は欧州のまん中、今もヨーロッパ本来の伝統が息づき、中世のお城や町並が日常生活の中にあるのです。

次の姫美人で世界から釣書

たとえば、チェコの首都というより、プラハの春として、自由を求める壮絶なたたかいで知られた百塔の町は、バロック、ゴシック、ルネサンス、アールヌーヴオーなど各時代の名建築が渾然同居して、いささかの違和感もないのです。市街を見おろすプラハ城はまさに王たちの居城の見本、壮麗のきわみです。城内に錬金術師たちが住んでいた黄金小路があり、あのカフカも一時期住んでいました。

文学も錬金術のうちと知り

中欧を貫いて、ボルガに次ぐヨーロッパ第二の大河ドナウが、景勝の地を流れます。農業や漁業に寄与するだけでなく、昔から東西を結ぶ文化、産業の大動脈でした。半面、管理権をめぐって英仏など列強の争いが絶えず、冷戦時代はソ連の軍艦が遊弋していました。我々日本人は、ドナウを情緒的にしか捉えられませんが、「美しく青きドナウ」は、プロイセン軍に敗れた祖国の人たちの士気を高めるためヨハン・シュトラウスが作曲したものですし、「ドナウ川のさざ波」だって軍楽隊のために作曲されたものです。

対岸がもう外国であることも多く、幾多の民族の集散と角逐がありました。ドナウを見下ろす丘にみやげ物屋さんがあり、先祖はウラルを越えて来たそうです。今は平和ですが

アジア系千年森にかくれ囃む

ただ川の色はどこでも黄褐色でした。これは減点です。同行の人が通りかかった土地の女性にそのことを質すと、女性は即座に「私たちの心の中で、ドナウ川はいつも青いのです。」と答え、少しはにやにや様子を見せました。余計なことですが、ポーランドの女性たちはフランス人形さながらに可憐で、このあたりの女性たちはしつとりと美しいです。

わが胸にドナウ青という少女

さらにについてですが、チェコではボヘミアの大地がはぐくみ香り高いビールが世界的に有名です。他の国では豊穡な沃野からとれるワインがとてもうまいのです。当然のことですが、国によって自慢の料理があり、その国でとれるワインがそれにぴったりののです。そして、どこの国でも「実はわが国のワインが、世界で一番おいしいのだよ」という話を聞きました。ウィーンは大帝時代以来、広大な版図をはじめ各地から導入した料理を、より洗練したものに仕上げました。パンも、それにケーキも絶妙です。フランス料理もそ

うですが、世界的に美味は皇帝たちの遺産です。郊外では農家がとれたてのワインを飲ませます。ハムやソーセージを好きなだけ食べ、生演奏に興じます。ホイリゲです。

JTB森の酒場の詩情売る

ところで、ヨーロッパの旅は飛行機を乗りつぐことが多いのです。私は機内から地上を眺めるのが好きで、地上の風景からその国の経済情勢や国民性がうかがわれます。

飛行機の窓は図解の国富論

今回の旅は東ドイツから始めたのですが、東西を隔てていたベルリンの壁が崩壊して十年あまり、その残骸は観光資源として残り、人々が集まるカフェテラスの建物には、銃弾のあとが今もなまなましいのです。ドイツの人たちには、我々以上に戦争について切実な思いがあるでしょうが、ドイツ国防軍はNATO軍の中核であり、ヨーロッパの列強はアメリカに次ぐ兵器の大輸出国なのです。

森しかない国が地雷を買いつつけ

結局は国力順の平和論

東ドイツから陸路でチェコに入りました。国境を越えると、次々と短い衣裳の女性たちが道路の脇に現われます。一九八九年頃から社会主義体制が崩壊を始めて、市場経済への

移行は、大勢の金持を生み出しましたが、もつと大勢の食えない人々をつくつたのです。治安の悪化は、アジアの国を回つたときも何度か聞きました。

資本主義国境で美女媚を売る

団体と行き交い四五人すりに会い

日本のみな中流をほめ無難

ウィーンは世界の音楽家憧憬の都です。権威と伝統のある国立オペラ座は、盛装した紳士淑女が集まります。服装についてはきびしいのです。ところで立見席は三五〇円、仮に

立見席で見ても、関東の夫人たちなら「さすがに本場のコンサートは違いますわ。ホールも豪華であかぬけしているし、あの音色にはほんとうに聞きはれました」ぐらいは言いそうですね。わが大阪のおばはんたちはすごいのです。ケルントナー通りを歩いていると、道のまん中にあるカフェテラスから大声です。「ちよつとオ、うちら三五〇円で小沢征爾見てきてん。あんたらも行つといでエ」「ジバンでトイレへ行つたんでエ」大阪の女性は形式主義や権威を嫌い、現実的で親切です。

大阪の女オペラ座安く見る

おばはんたちに助けられたことがあります。いくつもの国境を越えましたが、通過のたびに通貨を交換します。出国すればその国

の硬貨は使えないのですが、うまくしたもので、国境付近にはだいたい売店があり、残った小銭をキャンデーなどに代えます。しかし時間は僅かです。小銭の額より多いお菓子を持って私がまごまごしていると、見かねたおばはんがそれを取り上げ、混雑しているカウンターへ突進しました。どう折り合いをつけたのか、かなり多かつた善の菓子を全部店のビニール袋に入れて持ち帰り、私に言いました。「あんた、あかんねエ」

前述のケルントナー通はウィーンのメインストリート、アマの音楽家たちが路上で演奏しています。バイオリンひきや、オペラの歌曲を歌っているのがいます。大樹の茂る広い市立公園は、シューベルトなど有名な音楽家の像がいつぱい、ここも無料の演奏会場です。園内のホールで安いコンサートを聞きました。ウィンナーワルツになると近隣からきた老夫婦が踊り出し、ほぼ全員で即席の舞踏会になりました。GNPは日本より低くとも、市民生活の豊かさを体感した思いでした。

一つ最後に。内紛の続く旧ユーゴスラビアはほんの陸続きでし、あちらこちら、民族抗争、宗教紛争は絶え間のない悲しみです。

殺さねばならぬ信じる神遣い

隣人を撃つ少年に重い銃

本社 八月旬会

八月三日(金)午後五時半

アウイーナ大坂

連日35度を越す猛暑の中、八月旬会は97名の出席者により定刻開催された。

はじめに7月18日に亡くなった相談役の東野大八氏の御冥福を祈り黙祷を捧げる。

東野大八氏には20数年間の長きに亘り、川柳塔誌に「川柳の群像」を執筆頂いており、とても残念である。病の中、8月号まで責任を果たされ、その後病状は悪化、帰らぬ人となつてしまわれた。

お話は参与の阿萬萬氏。東野大八氏の思い出を語る。

共に同じ川柳誌にエッセーを書き、文通を交わした仲であった。

最近の年賀状に「口癖はこの世の旅もあと少し」と書かれている。

大八氏の川柳ノートには、ぎっしり川柳の話が詰まっている。また柳歴の古い大八氏は、多くの川柳人に関する文献を持ち、麻生路郎の若い頃のことを書いたものもある。

手元にあった昭和58年8月発行の『菜の花』の連載エッセーのひとつを紹介して、大八氏を偲ぶ。

初出席に星野きらりさん(大坂市)を迎える。月間賞は藤田泰子さん(富田林市)に輝く。

(司会―遠野) (記名―朝子・月子)
(受付―昭子・春) (清記―義)

席題「水」 太田 扶美代 選

風に揺れ水に浮かれて凡夫婦
甘い水探しに螢 灯をともす
水上に花束投げる胸の中
ふるさとの水も土産になる時代
母逝つてオアシスの水涸れました
紅白の水引きつけて大そうな
水くさい俺に黙つて逝つた奴
水を買うそんな日本になりました
水くさい仲を装うロゼワイン
水のない川で子供が遊んでる
水を得た魚は元に帰らない
炎天下 水はしつかり飲んでおく
水平線明日の夢をかき立てる
水脈を探して旅をする根っこ
原爆忌知らぬ子どもの水遊び
水風船と呼んでくださいシャボン玉
慰霊碑に水を捧げる十五日
神さまの怒りに触れた水不足
水田に夢を育てるこしひかり
人生の明日へ回る水車

愛 論 武庫坊 東 雲 楓 楽 東 雲 利 昭 義 澄 香 靖 巳 紫 香 希 久 子 典 子 朱 夏 一 歩 正 坊 尚 士 英 子 菜 月 寿 美

水流すようにあなたを忘れよう
友情を水臭くする借用書
原爆忌水を求める声がする
水っぱい味は私の愛情よ
端切れかと思つてる水の高いこと
私を知り尽して誘ひ水
そう早く水に流せん男です
水蒸気になつてしまったわが美貌
魚心了解したぞ水ころろ
苦い水ばかり飲んでる反主流
名水に選ばれ値段つきました
生温い水を飲み干す負け戦
佳
水遊び母も一緒に濡れてやる
故郷の水も都会でにこりだす
ばれそうな嘘は真水で薄めとく
八月の蛇口しばらくお湯が出る
シンプルな景色見事な枯山水
人
この村のいくさの歴史水利権
地
水かけ論母は上手にせき止める
天
切り返す言葉落とす水たまり
軸
ホタル伝説そこにやさしい水がある
兼題「チャンス」 海老池 洋 選
決断がチャンスの命握つてる
満津子

房 子 遠 野 笛 生 利 昭 いつみ 澄 子 修 森 子 春 金 太 天 笑 朱 夏 正 雄 五 月 玄 也 美 代 子 公 誠 天 笑 シマ子 諷 云 児

ワンモアチャンス花束と逢いにゆく
積み上げた努力チャンスはきつとくる
あきらめず磨けばチャンスきつとくる
告白のチャンスに舌がもつれてる
絶好のチャンスに飛べぬカタツムリ
きつとくるチャンスへ今日も羽根磨く
大リーグチャンスに強い宇宙人
入試ミスいまさるチャンス言われても
金借りるチャンス逃がしてから落ち目
チャンス掴むまで六法は膝に置く
バスもチャンス待ちくたびれた頃にくる
あの時にチャンス逃がしたから平和
チャンスには弱い男のアレレギー
チャンスをば逃す石橋叩きすぎ
絶好のチャンスに財布しけている
八起き目のチャンスへ男四股を踏む
むざむざとチャンス逃した昼の月
ラストダンス終りたくない人と組む
鼻歌でチャンス掴んだ人もいる
チャンスだと掴んでしまったバラのトゲ
わたしにもチャンス下さい夏帽子
少しずつ毒を効かせて待つチャンス
チャンス到来理性が水をさしてくる
チャンスかもふと神様と目が合った
くよくよするあのチャンスに乗ればいい
ワンチャンスあればと強気くすさない
価値観の違いでチャンスまた逃がす
チャンス到来今逆転の恩返し
ノラになるチャンス妻は忘れない

充子 照子 ふりこ 洞庵 睦子 大輪 三男 一步 月子 澄子 希久子 靖巳 重人 愛論 隆盛 朝子 たもつ 洞庵 修 真理子 アキ 朝子 かりん 扶美代 三男 靖巳 女 恭昌 淳一

ピンチからチャンスに変わる時の運
チャンスには強い代打で男売る
息吹かかえずチャンスへマウスツームス
ぬるま湯につかりチャンスを見失う
ライバルのチャンスわたしにはピンチ
住
二人きり喉からからになるチャンス
残されたガラスの靴にあるチャンス
チャンスには滅法強い草の種
埋れ火に風がチャンスを持つてくる
置き物ではないをチャンス wait っている
人
一瞬のためらいチャンスまた逃がす
地
四季咲きのバラはチャンスに慣れすぎる
天
美しく羽根をひろげたのがチャンス
軸
目の前をいままもチャンスが逃げるかも
兼題「ふと」 長浜澄子選
生涯の道連れふとした出会いから
老い早し無常の風がふとよぎる
ひらめいて家事一切を放りだす
残高はゼロでも元気のんきなり
遠花火B29をふと思つ
核ボタンふと押したくはないですか
ふと視線合つて一生縛られる
油さす車輪へ命ふと思つ

美代子 一風 賢子 萬的 朱夏 正雄 賢子 鹿太 たず子 扶美代 諷云児 千里 森子 満津子 清山 充子 月子 たもつ ダン吉 弘一 典子

この暑さ蟻の過労死ふと思つ
ふとヒント浮かびピンチを切り抜ける
ある日ふと天使背いてみたくなる
ふと本音洩らしちよびり酔っている
ふと見ると特価の同じシャツ着てる
我ながら無欲になったとふと寂し
ふと見ると妻エルメスの列にいる
これから先がふと気にかかる蝸牛
満ち足りた日々へ空しさふとよぎる
妻がふと優しいことを言う不気味
自己中になつていくなふと気付く
ある日ふと老いゆく余生考える
ライバルの泣きどころかと見てしまふ
ふと思ふ余命がわかるものならば
ゆうすげの花疲れた足をふと忘れ
流れ星ふと兄のこと八月忌
故郷がふと浮かびくる立葵
老妻がふといとおしい時がある
切れそうでふと故郷を口ずさむ
飽食に飢餓の国の子ふと思つ
酸漿の朱にふと立ち止まる亡姉の紅
安楽死したいと父がふともらふ
十年後ふと考えて竹を踏み
住
百までも生きる辛さをふと思つ
抜け殻の蟬にリストラふと思つ
幸せの絶頂にいてふと孤独
ふともらうたつた一言だが宝
或る日ふと悪魔のささやきに乘った

いつふみ 久峰 朱夏 笛生 朋月 女 正坊 英子 楓楽 正雄 泰子 諷云児 千里 あやめ 義子 美代子 いわゑ 倫子 修 洞庵 森子 月子 柳弘 扶美代 かすみ 森子

人

介護保険痴呆の僕をふと思ひ

金太

地

バセリふとたまには主役したくなる

楓楽

天

気がつく仕事に鬼にされていた

保州

軸

遠雷へふと父のことはのこと

兼題「待つ」

福本英子選

言葉尻待つてまじと書きたてて

充子

左遷地に旨い地酒が待つていた

満津子

おいでやす西瓜冷やして待つてます

春

待つ人が居て道草もおもしろい

いゝわゑ

パートのママ待つて公園黄昏れる

寿美

待つ時間ほんとに疑い深くなる

度

人間の理性ひたすら待つ地球

かりん

待つたびに僕はでつかくなっている

ダン吉

バーゲンに待ちくたびれる喫煙所

尚士

宮城へ待ちに待つてたこの鳥

舞夢

弱み持つ身で待たされてばかりいる

玄也

いつの日か放して欲しい小鳥籠

重人

待ちあぐね伝言板のこわい文字

シマ子

参拝へ待つたをかける内と外

一步

夏を待つ顔は元気に満ちている

武庫坊

待つてますあなたの言葉あなたの手

あやめ

一票で山動くのを待つている

金太

台風の来訪を待つ熱帯夜

利武

指切りを信じて来ると待つている

朋月

何かあつたらしいので夕飯待つてやろ

月子

この道と決めひとことを待つている

寿子

賑やかな大阪弁で人を待つ

紫香

何時ものところでおかしく一人の待ち合わせ

三男

午前様妻が無言で座つてゐる

いづみ

参つたと言つてまで待たせてもらいます

扶美代

ささやかな幸せを待つて冷や奴

朱夏

先に来て待つております惚れてます

瑠美子

寝て待つてこれでも幸せかも知れね

哲男

あなたとはもう別れよう待ちぼうけ

泰子

何よりのみやげ元気を待つていた

修

不景気に待ちくたびれた招き猫

恭昌

真つ直ぐな炎を待つてゐるのです

森子

いいかげん恥ずかしくなる待ちぼうけ

楓云児

つけばくろ何時も何かを待つてゐる

楓楽

産院の廊下で父の刑を待つ

度

花時計胸が高鳴る五分前

正雄

待つて訳でないが順番やつてくる

典子

一時間以上待つたと嬉しそう

笛生

化粧直しに行つた女が戻らない

大輪

許す気で待つてゐるのに雨になる

たす子

軸

鼻くすり効かせて待つてゐる返事

天

兼題「嘘」

宮口笛生選

狼が来た少年のジョーク

充子

ちよつと嘘入れておもしろい話する

清山

嘘ひとつついてごはんのまずいこと

月子

愛哀し男の嘘をまた許す

寿美

澄んだ目の嘘にすっかり騙される

公誠

水中花女の嘘が美しい

正坊

あの日からあなたの嘘に羽交いじめ

菜月

軽い嘘ませて話題を盛り上げる

久峰

帽子かぶり直して嘘をつきに行く

義朝

心配をかけまい嘘のあたたかい

度

ほめ言葉の真ん中へんに嘘がある

いゝわゑ

同じなら大きな嘘を言うておく

シマ子

ピンク色の嘘にだまされてみたい

扶美代

嘘でいいやさしい言葉欲しいだけ

千里

嘘通す女泪の名演技

寿美

嘘を言うような唇してません

瑠美子

病欠がこんな処で吞んでゐる

梨里

教科書に嘘を入れたらあきまへん

一步

長生きの人生嘘もたんとつき

和香

一人旅女の嘘がよく弾む

哲男

メル友の嘘に揺れてるサクランボ

洋

嘘に嘘重ねて化粧厚くなる

希久子

見えすいた嘘でも嬉しい歳になり

遠野

腹式呼吸してゆつくりと嘘をつく

たもつ

天国があると牧師も嘘をつき

五月

嘘一つつけずにヒラのまま終える

金太

梅十の要冷蔵は嘘だろう

金太

滅私奉公あれば大きな嘘だった

諷云児

ほんまやでと顔が嘘やと書いてある
夫婦なら嘘も誠もすぐ判る

佳

嘘下手な夫やさかい信じてる
二日酔昨日の嘘が胃にたまる

ウッソーはほんまかいなの新語らし
嘘つきにされていっつきに呑んでみる

好きだよと嘘も言ってほしかった

人

彼の舌抜いて下さい闇魔様

地

針千本飲みなれている女だな

天

病む友になんでほんとうが言えようか

軸

癌告知医者も家族も嘘の口

兼題「過去」

河内天笑選

砂浜に埋めても過去は胸に棲む

侵略の過去伏せている歴史本

靖国参拝過去を引きずる蟬の声

原爆ドーム過去を未来へ語り継ぐ

過去達が騒ぐ八月の炎暑

八月の雲過去からのメッセージ

過去の傷灰になるまで従いてくる

形状記憶消すに消せない過去がある

過去のこと忘れまじと寝される

過去はみな忘れまじと庵主さま

過去形と言っにはちよつと生臭い

森子

子

きらり

春

天笑

男女

哲男

月子

英子

洞庵

修

高栄

子

坊

正弘

照子

柳生

笛生

アキ

いわゑ

諷云児

保州

庸佑

倫子

子

子

子

子

子

子

さらけ出す過去は私の勳章や
過去すべて美化して胸にしまい込む

生き抜いてこの悔しさを過去にする

過ぎたことごとくどくどく語るボケはじめ

新しい愛で過去をみな押し流す

遠浅の浜なつかしい海の家

戦前は蛸も躍った魚夜市

納屋の隅過去の栄光ころんでる

愛のボール受け損なつた過去を悔い

サスペンス哀しい過去をあばき出す

忘れたい過去が私を追ってくる

恋人は都合の悪い過去をかくす

過去たちの私いじめてからの酒

もう過去にしましようという恋ひとつ

バリウムで焙り出された荒れた過去

左手で箸を持つてた過去がある

振り向かぬ過去が時時呼びにくる

過去のこと喋りながらぬひとりぼち

えりあしに問はず語りの過去匂う

セピア色これがバアバの七五三

過去形の女ばかりが寄ってくる

栄光の過去あつたのに青テント

カルテには真つ正直な僕の過去

佳

被爆者の語りを過去にしてならぬ

すつたもんだした過去に乾杯だ

他人さんが過去を脚色してくれる

思い出をいっぱい持った握り飯

過去形で話せばみんな美しい

千里

ルイ子

扶美代

一歩

一風

利武

利武

朋月

淳子

達子

欣子

とし子

たず子

寿美

瑠美子

房子

紫香

朱夏

きらり

度

玄也

かすみ

満州

冬葉

典子

洋

弘風

過去にさかのぼりはげしくなる喧嘩

つまずいた過去があるから許せます

天

ローカル線過去へ過去へと走り出す

軸

バツイチ同士でおんなじもの背負う

せんりゆうぐるーぶGOKEN

第2回誌上川柳大会作品募集

題と選者 各2句合計4句を1組とする

「海」 三宅 保州 (第1回優秀者)

橋田吊久朗 (")

木原 鶴子 (")

前川千津子 (ふあうすと)

「雑詠」 渡部光一郎 (歌誌 未来遊子)

日下 敬 (俳誌 船団)

番野多賀子 (呉番傘・川柳展望)

中野 千秋 (GOKEN)

締め切と発表 9月20日 11月発表誌送付

投句料 1組1000円 何組でも可

賞その他 ①各選者特選句に呈賞②成績

優秀者の中より次回選者をお願いします

③投句用紙はA5 (15cm×21cm)の紙に郵

便番号・住所氏名(雅号)・電話・題・作品

投句先〒790-0923松山市北久米町276-5

山本毅方せんりゆうぐるーぶGOKEN宛

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 8月号から

春木圭一郎

何時屢こう夫に内緒の赤い靴

高山清子

どんな仲のいい夫婦にも一つや二つは内緒にしていることがある。それが何とも言えぬ味をだす。一つに赤い靴がある。脳天をプラス思考に切り替える

両川無限

プラス思考の人ばかりだと住みよい国になるのだが、そうも行かないのも人生。雲々々今日はクジラになつて

花岡順子

雲が流れるのを見るのが好きだ。いろいろな形を楽しませてくれてあきない。雲の流れたあたりにあの人が住む。

雑魚なりに夢と希望は持つて

澤裕子

雑魚の方が案外確かな方向性を持つて

振り出しに戻れば見えてくる明日

録沢風花

自分の位置が見えなくなつたとき、やはり原点に還るのが一番。何がしたかつたのかが分かり未来像も浮かぶ。

おにぎりがめっちゃおいしい草むしる

須磨活恵

気の合つた友や理解のある家族と広げる弁当、笑顔がこぼれ会話がはずむ。やはりおにぎりがめっちゃおいしい。

幸せな出会い見つけた回り道

武本碧

一直線に目標に向かって進むのも大切だが、道草や回り道をしたために、きれいな花や素敵なひとと出合うこともある。

会者定離今朝も女房がいてくれる

坂本兵八郎

私には保護者のような妻がいる。生活に関して全く無知な私は、ちよつと脈のおそい妻が今朝も生きているだけでほつとする。

転ぶ度女は強くなりました

百田幸

女も男も転ぶ度に強くなる。

そこが痒いここが痛い

井上つよし

弱点を見せ合うことで親近感が増す。

屁理屈に二対一がもどかしい

福永ひかり

自分の言い分が正しいと思うのに相手は主張を変えない。理不尽な申し出に屈してしまひそうだ。誰かそばにいてほしい。青空へ恥じない道を選つて

小谷孝美

罪を重ねて今日も生きている私へ青空は問いかける、それでいいのかと。迷いながらも正しいと思う道を歩もうとする私。

悔しさを碎いて明日のバネにする

伴洋子

また勝負に負けた。至らなさを痛感し悔し涙をやる気に変えて研鑽し、きつと明日は勝利者となる。

切れがあるのに黙つていてくれる

山本磔

本当の強者はそう言うものかも知れぬ。自分が勝利者となつたとき、けつして力を過信してはならぬ。

パソコンに錆びた頭を試される

根岸方子

ワープロからパソコンへITは進む。ついで行こうとすれば相手は待つてくれる。

羅漢さまおいしい水をありがたう

山宮愛恵

プレ夢フェスタとっとり (第17回国民文化祭・とっとり2002) **文芸祭川柳大会・県民文化祭主催事業第25回鳥取県川柳大会** **第22回川柳塔鹿野みか月川柳大会作品 募集要項**

1. 趣 旨 平成14年に開催する夢フェスタとっとり (第17回国民文化祭・とっとり2002) の成功に向け、県内における開催機運の醸成を図るとともに、リハーサルを目的として、「プレ夢フェスタとっとり」を開催する。

2. 日 時 平成13年 (2001) 10月21日(日)
 午前10時30分～ (受付は午前9時00分開場)
 当日投句の宿題と選者 (50音順)

「 峠 」 泉 比呂史 選・「 庭 」 梶原サナエ 選
 「 走 る 」 川上 大輪 選・「 夕焼け 」 竹治ちかし 選
 「 読 む 」 山田 止水 選・「 鏡 」 八木 千代 選

参加料 事前投句していない方は、当日2,000円
 事前投句している方は、 当日1,000円

3. 会 場 鹿野小学校体育館
 〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町大字鹿野2888番地 電話 0857-84-1100

4. 内 容 川柳当日出句 (締切は午前10時30分)、入選作品の発表、選評、表彰

5. 主 催 鳥取県・鳥取県教育委員会・第17回国民文化祭鳥取県実行委員会・鹿野町・
 鹿野町教育委員会・第17回国民文化祭鹿野町実行委員会・鳥取県文化団体連
 合会・鳥取県川柳作家協会・川柳塔鹿野みか月

6. 事前投句応募規定

(1) 応募方法

- ① 未発表作品を、1人各題2句詠とする。(応募作品はお返しいたしません)
- ② 所定の応募用紙に名前(ふりがな)、住所、電話番号を記入してください。なお、大会及び前夜祭への参加の有無についても明記してください。
- ③ 作品は縦書き、黒の鉛筆かボールペンで楷書で書いてください。

(2) **募集締切** 平成13年 (2001) 8月31日(金) ※当日消印有効

(3) **応募料** 一般 1,000円 小・中・高校生 無料

振込先 鳥取県川柳作家協会 口座番号 01330-1-29645

(4) **表 彰** 特選及び入選作品を選び、当日会場で発表します。

特選作品の中から、県知事賞、県議会議長賞、鹿野町長賞、などを決定し、表彰します。(小・中・高校生の部は、鹿野町長賞のほか)

(5) **事前投句の題と選者** (50音順)

「安 心」 橘高 薫風 選・「うれしい」 森中恵美子 選

(6) **応募先** 〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1517

第17回国民文化祭鹿野町実行委員会事務局

(TEL 0857-84-2299 FAX 0857-84-2598)

7. 問い合わせ先 ・第17回国民文化祭鹿野町実行委員会事務局 (TEL 0857-84-2299)

・鳥取県川柳作家協会事務局 (TEL 0857-23-1170)

・川柳塔鹿野みか月事務局 (TEL 0857-84-2100)

(〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町鹿野 国民文化祭鹿野町実行委員会事務局)

吟行のご案内

川柳サークル卯の花

第7回「卯の花」の吟行を左記のとおり行います。参加ご希望の方は、氏名及び乗車希望地を記入の上、川島諷云児宛に9月10日(月)までにお申込み下さい。

吟行日 9月28日(金)

行き先 信楽の里と甲賀忍者屋敷

集合地 高槻現代劇場及び京都駅八条口

行程 8:30 高槻出発↓9:40 京都駅八条口↓京都東IC↓名神高速↓栗東

IC11:30↓12:20 甲賀忍者屋敷見

学↓12:40↓15:00 信楽(昼食・陶芸

教室・買物)↓栗東IC↓名神高速↓

京都南IC↓16:30 京都駅↓17:30

高槻

宿題 「当日雑感」2句(句箋は車中で

お配りします)

費用 6,500円(車中で申し受けます)

御不明の点は川島諷云児にお問い合わせ

ください。(0726-96-2765)

御参加をお待ちしています。

第73回 奈良県川柳大会

とき 9月16日(日) 正午開場

ところ 生駒市芸術会館「美楽来」

Tel 0743-74-1101

近鉄生駒駅から北西へ徒歩6分

(駐車場が狭いため電車・バス利用)

参加費 1500円(発表誌呈)

欠席投句料1000円。見学無料

宿題「額」 杉森 節子選(前回受賞者)

「露」 笹倉 良一選(生駒番傘)

「咲く」 松本 多加選(あかね若帖)

「答」 中原比呂志選(川柳塔なら

「紙」 宮口 笛生選(平城)

「遊ぶ」 植野美津江選(やまと番傘)

「駅」 吉田 太一選(奈良番傘)

出句締切 13時 各題2句 席題なし

※欠席投句の方は9月1日(日)までに左記へ

お送り下さい(投句料同封)

〒572 寝屋川市打上243西4-207

〒0802 奈良県川柳連盟事務局

阿部光雄Tel 072-821-2733

昼食は各自お済ませの上、御来場下さい

◎奈良県川柳連盟理事会(10時30分から)

各川柳会の理事は10時20分頃御来場下さい。

第28回 堺まつり協賛

秋の誌上川柳大会

題と選者

「叩く」 河内 月子 共選

「叩く」 菱田 満秋 共選

「虫」 小島 蘭幸 共選

「虫」 小林 由多香 共選

「越す」 木本 朱夏 共選

「越す」 波多野五楽庵 共選

「大」 小林すみえ 共選

「大」 河内 天笑 共選

「大」 共選

投句要領 一題二句。同じ作品を便箋の左

右に二句ずつ書いて下さい。

便箋は四枚

出句締切 九月末

投句料 一〇〇〇円。各題天地人に呈賞

作品集及び賞品発送は十一月初旬

投句先 〒593-8305

堺市堀上緑町二丁十六-三

河内天笑方堺川柳会

電話〇七二二七八四七〇六

はなやかなお国自慢の傘おどり
返却の傘に温もり届けられ
追憶へときどき想う亡妻の傘
陰になり日向になつて母の傘
悔しさに傘にかくれて拭く涙
傘が手にあるから大も怖くない
思慕よせて傘のぬくもり知る二人

高橋川柳サークル卯の花 川島雲児報

欠席してもまたかと当てにされてない
奥さんが偉い無遅刻無欠席
欠席をした一日は長かつた
気まぐれに來た公園で本を読む
のと自慢まぐれに鳴つた鐘三つ
起伏十年まぐれではない助演賞
まぐれだと言わなくなった棒グラフ
上を見て歩く人が降つてくる
居酒屋へ背中を押したにわか雨
日銭追う男に憎い雨が降る
雑兵の哀しさ火の粉浴びている
人徳をしのぶ別れへ雨が降る
ダイヤルが女ごころとすれ違つ
一一〇番声が震えて喋れない
ダイヤルで疑心暗鬼を確かめる
ダイヤルをキツチリ回す几帳面
あいまいな噂がいつか火を孕む
あいまいな女と夏の午後を飲む
あいまいな伝説卑弥呼火の女
ほどほどの暮らし年金ありがとう

康女
久枝
正光
豊枝
智恵子
静江
雄々

比ろ志
あやめ
節子
紫香
五月
石舟
スミ子
重人
尚士
メ女
澄子
庸佑
満寿蔵
柳宏子
稲子
泰雄
活恵
晴美
武史
芳子

年を終たゆとり絆を太くする
早寝してヒントは枕からもらう
はめ過ぎたおでん三晩も一人食べ
真紀子発言溝が深まる外務省
誕生日なのにだあれも気がつかぬ
円なら目で大人の嘘を聞いている
謙遜の裏に自慢がちらちらと
発掘の埴輪めざめてよく喋る
身の程を知つて梯子にのぼらない
退屈の虫がよからぬ夢を抱く

竹原川柳会 時広 一路報

雨なのは一体誰のせいですか
さわやかな笑顔西瓜を抱いてくる
愛いっぱいバラは地球が大好きで
さわやかな風に吹かれて旅に出る
さわやかな笑顔が並ぶ同窓会
さわやかさん呼ばれた昔追う女よ
さわやかな緑の中でハイチーズ
さわやかな国に改革してほしい
こんには大きな声の子に出合う
駅長外一で頑張る里の駅
五つ目の駅よと孫にとくと言ひ
喜怒哀楽吐いては吸ひ込む駅の灯よ
なつかしい駅だ二人の出発点
夕やみに犬がチヨコンと無人駅
ローカルな香が立ち込める道の駅
自分史のところでどこに駅がある
妹の絵手紙届き初夏の彩

秀夫
義一
萬的
吉之助
治三郎
靖巳
しげお
諷云児

千枝
蘭幸
淑喜
汎美
笹舟
貞子
蝸牛
厚子
勲力
不朽
房代
規宏
正風
静枝
孝枝

佳句地十選 (8月号から)

八田

敏

寝たきりになると靴を母の日に
よっぱどのことかしぶちんから電話
持病ひとつかかえたままの五月晴れ
澄んだ眼を昔はみんな持っていた
本心が見えて距離置くおつき合ひ
言い勝つて心に重い雨が降る
傘貸してまたの逢瀬をこころ待ち
奥の手に使つています惚けたり
うっかりがいつも火種になる夫婦
庇う手と突き放す手の親ごころ

スミ子
千秀
能子
笹舟
千代
諷云児
正三郎
扶美代
博泉
孝男

人生を紙一枚にしばられて
母と折つた紙人形は胸に在り
千羽鶴つぎつぎと生む紙の音
千羽目の鶴はましろい紙で折る
すき込んだ花の命を知る和紙か
初孫に紙の兜をちよんとのせ
十年日記今スタートをしたとこ
いくら待つてももう来ない紙芝居
三文判押しても強くなる紙だ

城北川柳会

川久保陸子報

地球儀の赤色の国消えそうで
わだかまりちよつと控えて話そうか
一本を葉と思つて飲んで
しまひ風呂胸の涙もさっぱりと

政子
寿美子
東雲
トヨ子

紫陽花が喜んでゐる走り雨

逢いたくてもお百度踏んだ家の前

笑つたり泣いたり孫を追うビデオ

雑草の花にもいのち抜かずおく

ひと言に私の地図が狂いだす

折々のガーデニングに癒される

もぎたてのトマトにあつた初夏の味

皆帰る家があるなり急ぎ足

しがらみも絆も少しづつ緩み

ジョーカーを孫ににらまれ出し損ね

人の字の支えの方に妻がいる

夢に見たオリンピックが遠くなる

一杯を出して料理がほめられる

生きてきた証を残す墨の色

アルバムをはがしたところ恋の傷

一言で事がおさまる苦勞人

好きな花見付けた蝶は満ち足りる

きつと咲く拳の中の夢の種

よしと云う父の一言けりがつき

雨の日のピラは悲しい顔をする

すぐ替えた首台本にない科白

紫陽花が雨の別れを抱くしづく

一枚のピラが家中掻き回す

くされ縁切れずに来たと老夫婦

欠点を割り引き合つて仲が良い

標的を絞ると明日が見えてきた

三幸川柳教室

三宅 保州報

タクシーの無口へ客が機嫌とる

嘉平

達子

久留美

志華子

一枝

修

高栄

昭子

あやめ

ただし

綏子

睦子

倫子

はじめ

藤子

春蘭

八重

ひさ乃

千里

満津子

典子

求芽

柳弘

とし子

あい子

順三

公一

無に戻れもどれと風が頬を打つ

まだ無名粥をすすつてゐるビエロ

無派閥で通すわたしの処世術

イチローにヒット無い日がダニユース

無条件降伏きみの腕の中

無駄ばかり積み重なつた歳の数

切り札を抱いた男の無表情

的少し外した嘘にある温み

嘘のない人生だからよく眠る

嘘ひとつ言つたことないのが誇り

嘘ついているから笑うヤジロベエ

口紅のきれいな嘘に嵌められる

美しい嘘で傷口洗われる

嘘一つコップの中を狂わせる

年月は嘘でなかつた玉手箱

化粧する顔は女を忘れない

少年化に孫も従兄弟もいなくなる

化けるのが下手で尻尾をつかまれる

ざあますに化けてもお里すぐ剥ける

裏打ちが不足だったか化けの皮

土壇場で化けると元に戻れない

ダンジリを伝えるマイク酔うている

哲人はにぎやかな場で物思ひ

居酒屋の愚痴ににぎやかな風になる

賑わいの中に孤独を捨てにゆく

チャンチキおけさ踊る社長を憎めない

にぎやかに尾を振る犬を捨てられず

賑やかな喪服の群れとすれ違つ

にぎやかに送つてくれと遺書にかく

伸二

昭枝

町子

義雄

朱夏

正一

利治

豊太郎

孝子

美寿子

よし子

鉄治

みね

碧

正簡

一步

章子

三千子

千秀

和代

和子

純子

賢司

登美代

桂香

保州

当代

公一

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

そろそろと腰をあげよう日が昏れる

地平線明日を信じた陽が沈む

温暖化世界は明日を不安がする

叱られて行く所もなし昼寝する

明日まだ生きる自信の予定組む

今日のことは胸にたたんで明日の窓

また明日描き足す色は鮮やかに

明日の日は未知数だから今跳ねる

もう一本明日からたばこ止めにする

無伴奏いずれそんな日が来る夜が来る

川柳塔まつえ吟社

恒松 町紅報

銀行へ預けた金が太らない

汗をした金も銀行では軽い

金利ゼロ気にする程の預金なし

銀行のロビー川柳展がある

銀行でお土産もらつてから迷ひ

銀行が貸したお金を虫が食う

ドブ板を渡れば天才画家の家

天才のその後はとんと聞いてない

三歳児ピカソのような才を見せ

天才も見上げて仰ぐ富士の山

天性の才能秘めた笑顔の児

天才はいないが元気なランドセル

夏祭り浴衣着る娘に涼貰う

着ることに夢中になった玉葱よ

派手を着る気分転換してみよう

聖子

恵美子

好栄

民子

ちよえ

はるみ

かつ子

博利

清泉

白汀

静恵

紫見

政子

螢

早苗

秀山

正業

茂美

注湖

日出子

幸子

房子

浜丘

畔

きみえ

背広着て座った椅子に別れる

何回も着替えて光り出す金魚

父の日のシャツの封切る五年ぶり

ペンネーム二枚看板使い分け

手作りの看板で買った野菜市

代々の金看板が消えた謎

後継者あり看板を高くする

看板が活を入れてる三代目

誠実を看板にして老舗の灯

メモをとる友の器用な手に見とれ

途中からメモも出来ないカタカナ語

犬も猫も記憶するからメモしない

小包に料理のメモを入れておく

秘書が出すメモで挨拶茶をにごす

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

散る日まで輝き続けたよう命

親方の輝き弟子の腕に出る

目鼻つけ輝き出した只の石

輝いて目元やさしい旅の妻

お陽さまに輝く母もひまわりも

輝かしい戦果に酔った日の悪夢

汗の手に輝き出した夢の種

嫁の顔サツと輝く寝め上手

名乗るほどでないが一票持つている

匿名の封書きれいな女文字

匿名の投書で疼く脛の傷

匿名の手紙とどいてからのウツ

俊一 久枝 亮

聡美

保子

長吉

桂子

与根一

多賀子

太泡

久子

義良

すみこ

知恵子

叮紅

優子

豊太

美子

君枝

英子

三男

佐代子

よしこ

保州

精子

あつむ

和重

匿名で本音が言える投書欄

匿名で善意を心の強い人

匿名の善意世間に灯をともし

テンブラの帳簿と見抜くマルサの目

受験日にテンブラ食べたらまた滑り

新婚さんテンブラばかり揚げてゐる

何だろ君に惹かれてゆく心

何気ない言葉一つに迷わされ

何事もない幸せを抱いて寝る

何事も相談されず蚊帳の外

何なにと詮索好き近所の目

何ですかお呼びですかと不服そう

この俺を誘う笑顔に何かある

何よりの健康という形見分け

何人が支えてくれた人生路

何べんも回ってワンとまだ言えぬ

何しても自由崩れていくモラル

何度でも重荷おろして明日へ賭け

川柳梨花

石上

多忙でも妻はゆつたり食べている

業校の下遊ぶのに忙しい

半世紀添うてうるさい時もある

見ず聞かぬ顔で同居の老夫婦

我が歳を確かめてから譲る席

白百合は詫びる姿で咲いている

力いっぱい生命線を伸ばしている

ふる里の橋につながっている絆

夢うつ押しした判子が物を言う

勝康 和

射月芳

鉄治

佐一

紀美女

輝子

さち子

富美子

健三郎

順子

三喜夫

正博

和子

泰子

大輪

克子

寿子

悦子報

一夫

完司

よしえ

章久

宏

節子

螢

蛙

明かつみ

弁天さんにうつつ抜かした罰あたり

ゆめうつつ六十五年すんじやった

一匹のメダカとなつて世を泳ぐ

面白く男と泳ぐ花名刺

泳ぎ疲れて肩書を捨てました

桐箱に納めて壺も箔がつく

校庭の青桐傷が絶え間なし

皐月晴れビール党にはたまらない

皐月の風をマフラーにして会いに行く

師を見舞う淋しきまでの五月晴れ

キュービッドの矢さやかに受け立つ皐月

お釈迦さまも象さんに乗る五月晴れ

肩の荷も少し軽めになる皐月

昨年はこれを着たのか皐月晴れ

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

印付け孫の成長見る柱

平成の大黒柱細くなり

鼻柱強い妻だがにくめない

柱時計が鳴ると昔の灯がゆれる

孫が来て物干竿に花が咲き

さあ脱いで筆とりとられる洗濯機

氷河期を流れる洗いだらしのジバン

洗濯機まわす程でもないひとり

渓谷を歩きたいのちの洗濯す

葉にも毒にもされず独り棲む

ゆつくりと朝湯うれしい旅の宿

濃過をした見舞言葉に笑みもらう

梢山も混んで来たよと言う便り

蟹郎

石花菜

重忠

美恵子

忠良

幸子

求芽

東雲

芳光

高栄

克枝

睦子

悦子

和歌子

幸子

節子

みち子

年子

昭三

孝一

比呂志

和子

武庫坊

しづ子

愛

富江

郁子

染めあげてサルビア朱く海に向つて

風鈴に瘦せた男が腹を見せ

やめた筈の酒だが人待ち顔の酒

空梅雨でなかつた物干竿の泪

過去を知る女が消えた無人駅

ブランコが少年になる日曜日

ぶつかつてぶつかつて少年の脱皮

いつからかあなただけの海が浅くなる

八十になつても折る私の幸

静かな街六甲ランド美術館

風が死に風鈴だらりと無残なり

共通の話題だけある老夫婦

つないだ手化石になつていた恋よ

炎昼に揺れているのはわが影か

川柳塔おつばこ吟社

木村あきら報

やんわりと母の一言胸を刺す

一本道なのに迷つた夫婦路

手応えがあつて嬉しい敵に逢う

ステテコがうろうろしてる休刊日

よく出来た話に一寸嘘がある

欠点を上手に隠す夏化粧

俺だつて猫が帰りを待っている

孫と来て昔に戻る夏祭り

何気なく言つた言葉に刺がある

妻の留守しみじみ分かる有難さ

日曜日休むどころか目が回る

人の中作り笑いがうまくなる

二度とない生命線を補修する

義芳

水聲

定男

光穂

満壽蔵

寛之

恵子

千恵

正子

全彦

弘一

半蔵門

薫

吟笑

文仙

勝

かおり

賢

はつ恵

あきら

八重子

いさむ

放任

ひかり

よしみ

輝夫

輝夫

風鈴を押さえて孫の寝顔見る

よさこいのリズム弾けて夏盛り

湯上りにビールが美味しい夏の宵

川柳塔唐津支部

久保

若者の群れて地球を尻に敷く

古書棚読みたての本がざらにあり

老醜をオーデオコロンではずんで

真夏日を亡母が待つてる熱いお茶

怒鳴らない親爺は怖いよ寂しいよ

勲章のような園児のカットパン

座つてるだけで良いとの数合せ

三遍も読んだが誤字に気が付かず

悲しみの過去を鏡に塗り込める

腰弁で歩幅変らぬ二度の職

文字通りほんにうるさい五月蠅

憶病で山頭火にはなれぬ俺

京都塔の会

都倉

越して半年 花の鉢にも位置決まる

愛犬に幼児ことばで話しかけ

紫陽花も涙溜めてる梅雨晴れ間

賞味期限少しぐらいいは躊躇せず

陽が昇る二人の歴史まだ続く

親孝行な話を節穴から覗き

みんな帰つて犬安心の高軒

生きたとはテラスの花に水をやる

まちまちにとれる言葉で四苦八苦

まちまちのお皿が並ぶ三世代

寿々女

くに子

治延

正剣報

兵八郎

實

タミ

勝視

幸夫

晴翠

水笑

輝夫

高明

四郎

虹汀

正剣

求芽報

英旺

達年

武庫坊

しげお

美穂

正坊

輝美

啓子

啓子

まちまちの顔で羅漢が雲見てる

厄落とししようやと帰る呑む話

厄除けのお札あるけど事故つづく

人生に少しの厄はスパイスに

厄除けの鬼が泣かした子をあやす

しんきくさい話聞いてるあはらしさ

何時までも素人くささがまた魅力

生ぐさい話聞いくる遺産分け

こげくさい噂が駈ける昼休み

泥くさい少女が脱皮するテレビ

世界地図こもかしこもきなくさい

水臭い男になつて出世する

青くさい話を舐めた返り討ち

お札など言わんといや照れくさい

頑固くさいおやじが店の奥に居る

カビくさい納戸で昔に逢っている

ご意見が一致しました自動ドア

外食は焼肉で一致する家族

全員一致という仕方なく手をあげる

P.T.A.満場一致でそそくさと

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

草の上恋のささやきこつそりと

こつそりと夜中に帰る恐妻家

川の字になるのを連れた里帰り

医者話こつそり聞いてから不安

ひからびた人參もある冷蔵庫

メインディッシュ野菜になって齢知る

こつそりと帰るつもりが犬が吠え

萬的

柳宏子

百合子

宏子

克治

メ女

高栄

英一

ただし

福子

庸佑

芳子

欣之

比志

紫香

求芽

友照

幸代

益子

春子

賢次

ただし

陽子

まみ子

幹治

いさむ

いさむ

かじか鳴く冷えたビールに味をそえ
 幼な児の使いこつそり見届ける
 帰るまで折り続けるランドセル
 こつそりとジベタリアンの傍を過ぎ
 みずみずしい野菜はみんな外国産
 男爵が親爺の顔で宅急便
 大物は隠し口座に保釈金
 錦など着なくいいよ待っている
 おぼんざいの命を守る京野菜
 不揃いの野菜も元氣朝の市
 まず一本冷えたビールを抜いてくれ
 この皿をこつそり割ろうかと思う
 こつそりと開けたら妻が目の前に
 往き帰り覗けるとこに母がいる
 コンサート余韻楽しみ変える道
 しのび逢いフオーカスされて箔が落ち
 子ら帰省鶴居が急に低くなる
 末席へ単身赴任の父帰る
 盆栽のように育てたミニトマト
 父帰る舞台の炎今も燃ゆ
 無農薬野菜で保証する長寿
 帰ろうか散歩の犬は首あらず
 夏休み帰る郷なき都会の子

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

長一 祥風 セツ子 馬洗 直次 ヤギエ 柳童 敵子 昭子 見清 実 喜美子 正安 保子 雪子 勝 よしろう 黒兎 久子 千里志 緑骨 契子 正三郎 富喜子 五月 義子 石舟

ルイビトン持てば淑女になれますか
 メール読みひとり笑っている淑女
 失敗の一つ二つは軍資金
 失敗の数だけ神に手を叩く
 染め替への出来ぬ失敗作が出来
 失敗の人生ボクも啄木も
 失敗のたびに鱗が落ちてゆく
 失敗はいつでも部下のせいにする
 モナリザが壁か何か言うたはる
 自分から作つた壁に寒く居る
 手術後の壁越え今日は髪洗う
 大阪弁言葉の壁は無いらしい
 目に見えぬ壁のほりゆく遍路笠
 壁なんぞ持たず甘える姑さんに
 壁に凭れています夕日が泣いてます
 梅漬けてきれいな赤を待っている
 近代化蛙メダカも住みにくい
 暗号も混ぜて呼び出すEメール
 行書から草書になつて父も古い
 死に神とワルツを踊る春の宴
 車椅子助けさわやか雨の坂
 機密費がないから無事である我が家
 価値観が違つて仲のよい夫婦
 立つ位置が変る風向き風の彩
 制箸が曲つて割れた日の不安
 彦星に会いたしと書く墨をすり

うぶみ川柳会

上田

宣子報

千代 房子 しげお 武庫坊 能子 正坊 求芽 尚士 いわゑ てる 美代子 哲男 比ろ志 江美 磔 トミエ 高栄 奮水 たず子 春蘭 松煙 靖巳 光久 澄子 鹿太 文 美ツ千

イノブタの焼肉料理ジゲ起こし
 遣伝子をいろいろ秘めて雑種です
 賢くて丈夫なボチは雑種です
 雑種になる大和魂消えた国
 多面性あつて雑種だなどと思う
 背伸び駄目パチンと財布締められた
 シヤボン玉パチンと振り出しに戻る
 惑いから抜けず輪ゴムを弾かせる
 美しい笑顔パチンといま割れる
 背伸びした途端パチンと叩かれる
 目障りな頭がひとつ聳え立つ
 拳骨の味は頭が忘れない
 スクーブの速記のメモは頭文字
 頭ごなし叱つても今効きめなし
 頭から出来ぬと決めて悔い残し
 病んで知る添えるあなたの手の温み
 シヤボン玉パチンとはじけ春の風
 叱つたあとユーモア添える父が好き
 背信の匂い何度も読む手紙

はまゆう川柳会

中後

清史報

くにお よしえ 克枝 ユリ子 ひろこ 良男 登美枝 和枝 芳江 完司 重忠 黙光 華子 天人 一枝 静生 あづま 宣子 美佐子 太一 国彰 比斗志 公治 サト美 利ぼん 雅視

北山の筏流しに酔うスリル
拳より無視の痛さが身に沁みる

泰作
生米子

無視されて人のこころが見えてくる
無視されてピクツと動く自尊心

苗子
登

だんらんの輪から外れて父がいる
無視されてひとり淋しく傘をさす

修也
慶一

じろじろと見る気はないが気にかかる
じろじろと値踏みをされる面接日

清史
平和

じろじろと見られて笊だマユがない
じろじろとまさに渦中にあるらしい

佳子
さだ代

じろじろと見られて気付く裏返し
じろじろと美女に見とれて足とられ

惠美子
雄造

特価品じろじろ見つめ品定め

光

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

雨傘を帰りは忘れおぼろ月
独り旅ちよつぱり長い宿浴衣

信子
その

猛暑にもクーラー嫌いの老母の部屋
海鳴りは汚した海の悲鳴かも

江美
鹿太

蒸し暑いカラツと暑い方が良い
ハワイ沖くやし立つのるレクイエム

尚利
亀与子

まあるい地球を水平線が主張する
引き返す十七歳が煙草やめ

伊サミ
昭三

ワルツにのりクイックターンで花が咲く
心地よい昼寝チャイムが邪魔をする

孝一
まさ

倒産の銀行支店につばめくる
暑さちとゆるんで老いの墓参り

義芳
弘治

噂まで乗せて涼しい路地の風
北風に向う男の背が温い

正治
満寿蔵

身の程に合わせた知恵で自然体
海あらし止んで夫婦も仲直り
熱帯夜汽笛が耳の底で鳴る
絶好調小泉節が小気味よく

川柳塔なら

坊農

柳弘報

走り雨みどりの笛に笑い声
筆の牙え一氣に走る心一字

カズ子
むつみ

信じたい胸から伝わってくる冷氣
喝采へ少しためらう胸のバラ

理恵
佳子

神様に波長に近いいい気分
遠い日の傷にはあふれず雨しとど

惠美子
敏子

言葉にはいえない想いを胸に秘め
よく変わるあなたの気分困ります

博一
秋泉

雨蛙予報をもらす俄か雨
目標に向かいひたすら走る亀

富子
春雄

胸の奥消えない火傷抱えている
度が過ぎて気分損ねたまむし酒

とし子
光雄

自供して胸のつかえをスツとさせ
天候に気分が咲いたりしほんだり

光栄
春蘭

気分爽快何時何時までもこのように
気分よく帰す小店聞き上手

真理子
典子

いたわりへ素直に聞けぬ胸の傷
転んでも起きて走って母の膝

あやめ
絹子

いい気分ドラマの佳境電話鳴る
ルンルンの気分になれる風見鶏

孝子
洋子

胸おどるのわけを知ってる花時計
野仏の顔の汚れへ五月雨

直子
一風

善人に旗を持たすとひた走る

人生を走ると仏見失う
感情に走って落ちた敵の罠

章久
和夫

走れなくなれば看板下ろしします
責任を取る首筋は雨に濡れ

重人
雅文

気分爽快コップの水も透きとおる
海はゆりかご守唄きく母の胸

道子
光雄

てのひらに走りつづけてきた月日

秋雄

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

ITが百科事典を呑みこんだ
主婦多忙のんびり出来る日が欲しい

寛子
春恵

なるほどと思ういい事続くから
明日の夢見つめるヒント辞書さがす

信子
はじめ

子の名前辞書を片手に字をかくす
息子等の使った辞書で親学ぶ

和甫
操子

生きている百科事典は大切に
孫つれて梅雨の晴れ間を散歩する

昭恵
静子

接点を見つかるほど丸く住む

多哥由

川柳塔みちのく

小寺

花肇報

確かめたつもりが出来た婚になり
初孫へめろめろになる鬼の面

一光
きよし

跡継いだ息子の汗を拭いてやる
ハタと止む軒いのちを確かめる

大吾
妙子

スピードに縁ない亀の歩幅です
ゲートにもなれず溺れる一気飲み

ヒサ子
順風

桃源の月と揺れてる千鳥足
プロの味ははの仕草を眼に残す

慕情
銀波

鈍行が好きです秋の一人旅

ふさゑ

あるがまま流れに乗って金婚諸
鼻の先で勝負が決まるさつき賞
恍惚の海に溺れたシルエツト
めろめろのネプタと化した最終日
影になりきって匠の鑿を研ぐ
番付のしこ名を探すムシメガネ
ジャガ芋の花の質素を見習おう
まだ慣れぬ扇太鼓が重すぎる

川柳ささやま

酒井

末のこと案じています休耕田
末っ娘が一番役に立っている
残された余白は好きな色で塗る
欲目かな里の苺のあまいこと
神さまも欲目で合格さしてくれ
寺の鐘ゆつくり罪を白にする
弾まない毬を相手に畑仕事
五月晴れ白いシャツが風に舞う
故郷は欲目が何処よりいい所
しみ抜きが出来ぬ白です長い道
角砂糖の白はすぐに崩れ出す
ああシヨック好きな茶碗が割れました
勉強が足らんの声は重かった
白旗をあげた笑顔が夢に立ち
友がいてシヨック小さく乗り越える
白羽の矢立てるが的に届かない
胸にある波紋しずめる角砂糖
癌らしいみんなやさしい口になり
残り火をもやして楽し畑仕事

花匠 愁女 ツネ 井蛙 一人 五楽庵 純子 恵美 多美子 美智子 八重子 つみ子 つかほ 君代 穂子 房江 泰子 美緒子 美紗子 富美 みはる 寿子 可住 靖子

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

自由謳歌の話題あふれる若い街
人生が面白いうち旅に出る
つらい道明けがあると風は言う
夏帽子ヘコサージュ付けて鏡前
へそくりは生きてるうちに使つとく
曲りなりにも節目節目の峠越え
高軒あれば晩酌症候群
都会では鏡が売れているそうだ
峠こす度に眠りが深くなる
盛り上がりその気になって踊つた
色々の痛みが攻める盆と暮れ
欲さうり捨てて肩の荷かるくなる
なつかしい人の去来や西雲
一本道たまに仏とあとさきに
生きて行く痛み分け合う一つ屋根
笹竹がしなるほど書く願い事
やがて似る今は溺れぬ酒だけど

川柳塔鹿野みか月

土橋

命まで捧げる夢は見たくない
すみません捧げたいもの揺れている
ご先祖に捧げる花の手入れする
一生を捧げて鯉が川上る
事故現場に捧げる花はうなだれて
日が巡り捧げたハートセピアいろ
おんぼろの私捧げる物がない
誕生日母に捧げる車椅子

瑞枝 初枝 春枝 麗 やえ 玲子 すみゑ 蘭 なみ 恵子 千秋 千春 日枝子 千代 富美子 八重子 ふみ 望報 英夫 みどり 武子 久枝 公子 富人江 房子 睦子

ご先祖にメロン捧げるご命日
牛小屋の匂いの残る部屋に住む
トンチンカントンチンカンと譜が勇む
ふたありで笑って福を呼び寄せる
風の子はキシヤミ四つも気にならない
満ちたりたパン耳捨てての氣になれぬ
生け贅を捧げにんげん生き残る
介護ですあなたの好きな紅引いて
捧げきった色で熟れてきたトマト
捧げもの匂の生ものがええぞ
かばちや煮る技を孫らに教えとく
特技とてないが忘れるのは得意
一日を無事に終れる技ひとつ
菊作り技は文化の日に誇る
のん気だよ宝をみんなとり逃がし
今日もまた呑気なもんにとされておく
長生きの秘訣は呑気にと翁
呑気そうに隠せる緻密な計画表
ストレスが無いから呑気だと思ふ
底ついた暮らしも何のケセラセラ
のん気それから気苦労の檻のなか
死ぬことは考えてない暢気もの

かわはら川柳会

上田

買うことの出来ぬ人生苦楽あり
タイヤキを買つても税金払わされ
取り立てを買つて魚の立ち話
愛の花買つてくれます母の日に
メロドラマ握り合つて手が温い

節子 茶子 喜与志 弘子 幸枝 忠良 孔美子 きみ子 石花菜 菊乃 くに子 汲香 野草 八重子 保子 なが子 節満 美恵子 諷人 螢 登生 一薫 寿子 余史子 輪多郎

不可能を可能にドラマして見せる
用辞から幾多のドラマ読経さく
鏡台に我が人生のドラマ見る
幸せのドラマ演じて肩がこり

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

遺言を日毎に延ばす古稀の背な
アナタしかいないと決めたのが誤算
最後まで決めた手は見せず逆転し
電話からかなり美人と決めている
顔も見ず決めて失敗した見合い
お目出度が決めた手となった親の許可
この女と決めた女房と共白髪
私の切り身を売っているパート
胸の内話してすかつとティータム
老いさきのタイムリミット気にはせず
コーヒータム心に風を入れておく
同じ屋根下タイムが違ふ老夫婦
タイムカプセル移り行く世の今を詰め
定年日タイムカードの手が震う
陰口を言うて自分を責めている
子のしつめたしのせいと責めてくる
ストレスの悲鳴が責める心電図
その言葉十年遅いと責められる
責任者責められ役を一手受け
責めるのはよそとらんびの子はとんび
他人責める資格あんななどに無い
過へ自分ひとり責めすぎる

泰良 聴 悦子 俊路 吐来 六点 耕策 利武 久仁子 章司 ダン吉 昭平 敦子 昇 泰子 一知 美喜 洞庵 獲沓 かつみ 敏 絢子 柳宏子 庸佑

人前は優しく責める思いやり
機密費を責めた外相吊るし上げ
責めるのはよそう海が凪いでいる
よちよちと術後は妻の肩を借り
リハビリの足のさばきにある望み
よちよちの余生に少し彩つけて
付き合ひの広いお方でいつも留守

サークル檸檬 小林 一夫報

それなりの野心持つてるルーブタイ
野心家の目線吃水線を越す
豊かさを心に覚えてきた我欲
大志から野心へ欲が染めていく
人生百年たかが野心は知れている
老いてなお逆転ホームー待っている
友達と同じ視線を持つている
いい音色悪魔の笛がこちよい
野心もうないが美人は美しい
いざという時まで爪はしめておく
麦わら帽子じんの野心ない軽さ

とよなか川柳教室(前月分) 安藤寿美子報

旅人で眺める富士は美しい
美しい花の盛りに明日を問う
美しいひとりの景にカメラむけ
神様もちよつぱり情けバクシヤン
美しい姿のままで逝きました
みんな皆輝いているクラス会
美しくないけど妻は笑顔よし

志洋 専平 重人 たけし 満寿蔵 さとみ 一壺 楓楽 あずき 遠野 保子 靖巳 房子 希久子 智恵子 正坊 いわゑ 義子 清山 義江 エミ子 トシ子 舞夢 藍 しずえ

美しく老いていきます紅の自負
美しい文字で女の置手紙
里山の築百年に夕日映ゆ
心の眼開けば何にでもある美
泣くたびに美しくなる想い出よ
化粧より健康美人を願う今
病癒えて外に出た日の日の光
美術館 監視の席が退屈さう
通り抜け美の競演の花吹雪
花束を受ける涙が美しい
ササユリに会いたくなくて登る山
焼きいもを食べても様になる美人
いたいけな子らの悲報に胸うずく
おならした美女の替え玉すぐに出る
美しい言葉で別れ告げられる
美しい女美しく欠伸する
お多福の鼻の低さが美しい
エステなど無縁 自己流美顔術
生涯を綺麗に閉じた母を追う
美しい友情だった少年兵
螢の灯 本は読めぬが明日が見え
こころ豊かに支え合う美しさ
美しい富士の麓に散骨を

横浜あおば川柳会

清水 潮華報

好きだよのひとこと言えずただ歩く
花ビラに少女の指がすききらい
虐待に無いが鞭には愛がある
車道側歩いてくれる孫となる

都代子 美代子 道子 千代 蛙 絹子 千津子 英子 節子 慶子 幸代 伽羅 朔子 朋月 美智子 満州 さらり 豊子 久留美 わきみ 祿骨 春 馬洗

雨垂れの旅情を誘う秘湯の夜
八ミリを構えてあんよの一步待つ
老婆はどうして居るか静かな
愛だけじゃ食て行けない娘の悩み
人混みを深紅のドレス抜き手さる
尺玉は夏の夜空を一人占め
夕立があがり茶畑よみがえる
花火観るゆかた待てる雨あがり
恵みから恐怖に変わる雨の乱
愛してる言わなければ愛してる
万歩計万歩歩いたことがない
鮮明に恐怖が過ぎる子の脳裏
炎天に終戦という憂気楼
紫陽花の色を濃くして雨あがる
古傷がうずいて雨を予報する
シヨツキングペンク脳裏を突き抜ける
愛を盛る朝のジュースに訳があり
愛されて花も女も開花する
愛妻の顔がちらつく三次会
出歩けるうちだと旅に忙しい
梅雨空に隅田の花火咲き誇り
どしゃぶりと相合傘は燃えている
猫拾う動物愛を叱られる
手紙でも書こうか雨が続くから

嘉信 早智 三郎 かず枝 純子 道子 鈴美 サト子 ふみ 徳三 為佐子 弘和 句多留 あらた 笑子 今日子 街湖 良子 和可 亜希子 政勝 十三子 潮華 満秋

川柳大坂 高木 信酔報 すがお 國治 比呂志

ごつい手で赤ちゃんの頬つついてる
リストラムも親父が軸となる家庭
税務署の習慣人を信じない
軸吟に選者の姿勢感じ取る
七福の掛軸かけて縁かつぐ
骨折ったその見返りは求めない
孫娘平和のための鶴を折る
習慣を変えたら世間広く見え
しきたりをしつかり守る清め塩
かくしやくと背の軸しんと傘寿舞う
円満な夫婦やらかい冷や奴
九条を変えたと軸になる男
無意識でいつもの場所に立つ車内
花鉄残した軸が生きて来る
取り替えた軸へ派閥の古タイヤ
習慣で疑うこともせぬ仲間
干したてのやらかい布団が恋しい
やらかい味はしみてる亡母の味
広島のを想わす焼けた軸
晩酌一杯飲まねば僕は日は暮れぬ
八十を過ぎて朝の軽いキス
引きぎわの折れた男の潔さ

利昭 ひろし 金太 喜楽 可南子 一步 敏 柳昌 重人 一風 笑風 ダン吉 かよこ 洛醉 鉄心 柳宏子 圭 美花 宏 柳弘 まつお 信酔 寿美報 吉川 青美報 朝子 柳伸 たもつ 観子 章久

苦勞した母の勲章深い皺
苦勞性妻が死んだらどないしょ
家計簿にいつも苦勞をかけてます
買つてまで苦勞しろとは言わぬ母
行きつめた屋台で飯面つて変える
屋台の灯少し暗くて救われる
通夜帰る故人唄んで屋台酒
チャルメラが鳴けばお腹の虫も泣く
耳よりな話屋台で聞いている
ガード下屋台の椅子もよくしゃべる
元氣出る大阪弁を聞く屋台
風除けも無いが温みのある屋台
夫より信頼してるマスコット
マスコットに男ひとりを飼っている
球場を沸かす元氣なマスコット
事故現場揺れてる無傷のマスコット
ライバルの怪我へ見舞の赤いバラ
ふり向くと怪我する前だけ歩いて歩く
子育てでの苦勞は言わぬカツボウ着
罪意識なく少年が喫う麻葉
立志伝の屋台の章が光ってる
マスコット握って見えてる流れ星
ボロボロの熊でも孫のマスコット
屋台曳く夫婦夕陽に影ひとつ
引き取りの車で揺れるマスコット

志華子 修 遠野 洋子 千里 度 ひと乃 東雲 庸佑 アキラ 日出子 幸子 雅文 なぎさ 柳宏子 柳弘 のほろ 寿美 萬的 三男 千梢 道子 珠美 清成 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報 しげお 庸佑

小難ですみ神からの要注意

災難を吹っ切るように髪を切る

休ませてもらうことさらに咳を入れ

ことさらにそこだけぐい下心

女にはことさらに効く誉め言葉

大切なメダルを胸にペンダント

栄光の過去は語らぬメダリスト

ことさらに言われなくても蛙の子は蛙

鈍い奴ことさらに念を押したのに

野菜切る音が聞こえぬ旅の朝

寝たきりにならぬ手相を信じたい

何言っているのや政治討論会

生きている実感 冷水グツと飲む

隙狙うように仕事が埋めにくる

メダルと共に破れた靴も飾られる

金魚すくいの母子に鍵の鈴が鳴る

行く路をメダルで決めたこともあり

倉吉川柳会

松本よしえ報

外相へ集中怠さふつとばす

大気圏抜け出すはでな旅もある

思い出を作りて二人旅に出る

お客さんとんで出て来る孫の連れ

幸せすぎだろとか数珠の手がだるい

何気なく聞いているが胸を刺す

しんがりの俺の出番もさつと来る

米櫃を出てから知った貧富の差

出る出ると脅され車買わされる

一喝が出せず飲み込む子のしつけ

慶子

知香子

周信

ただし

つづ子

英子

靖巳

萬的

正三郎

見清

求芽

寿美子

柳宏子

正坊

博子

メ女

絹子

小生

志郎

泰輔

久子

さみ子

睦子

次男

雄々

松盛

紀美子

髪型が決まらぬだけで怠くなる

出かけるぞ今遊ばんと先がない

出来ちゃった夏の最中に披露宴

青リンゴ吐き出し口につてやる

気前よく広げた墓塵が畳めない

出る時はこんな深傷を予想せず

大水害うちの田んぼが池になる

朝礼で怠い話を聞かされる

飲酒運転の毒ですが罪は罪

倦怠期隣の花に手が出そう

シンプルな表紙が包む火のページ

気も使い金も使つてお中元

センス良い人はシンプルでも似合う

タンポポの綿毛飛び出す親離れ

七夕というのに丸い月が出た

気を抜いて母の話になま返事

怠いけどやっぱり今日も飯を食う

わたしだけ少しはみ出た停止線

男とはさびしいものよ月が出る

赤い実を食べて元気が湧いてくる

川柳やがわ

江口

掘り出した破片に隠れているロマン

四十十川の夜明けロマンが立ち込める

冷静に違反みている信号機

違反せず走りつづける父の貨車

違反して巧みにくぐる法の網

整形の美人は違反だと思ふ

違反多発の町で十字架ゆれている

智子

重忠

(前)喜美子

康子

よしえ

(西)喜美子

賀寿恵

悠子

季芳

秋草

ひろこ

照彦

日出子

和枝

石花菜

瑛子

十三男

宣子

螢

美ツ千

度報

利昭

英千子

忠央

波留吉

庸佑

仁清

度

駐車違反は悪いとみんな知っている

地球への違反を叱るタイオキシシ

少々のマナー違反は目をつぶる

そこにあなたが居るので恥かしい

機密費に寄つてたかつた恥知らず

妻と書く文字が乱れるハネムーン

恥ずかしいと思つていい腰かじり

恥じらずわす問う少年の目がきれい

地下足袋が恥ずかしいのかこの父の

修理屋が来てブレイカー入れただけ

掏うほど小銭を持った寺まわり

土壇場で友の厚意に掏われる

手で掏う砂のごとくに終る恋

よいところ掏うて褒める温い人

大物を死角で掏うレポーター

弱いとこ見せぬ女の泣きばくろ

一歩下がれば回りの人がよく見える

風船の自由は風にさからえず

父の日の父幸せに昼寝する

新曲を年甲斐もなく口ずさむ

旅だより丸いポストの懐しさ

先生と互角に語る同窓会

くろぼ川柳会

武田

帆雀報

先生が怖い生徒は優等生

更年期鏡に怖い皺を見る

機嫌とる私がちよつと怖そうだ

怖いほど自分の弱さ知っている

弘一

たもつ

茜

亜成

勇太郎

遠野

恵子

一風

重三

修

シマ子

とし子

一笑

一磔

あやめ

かすみ

朝子

洋

佳風

時弘

順三

光三

博泉

小生

喬水

悦子

あらた

月明かり川面に映る怖い顔
父ちゃん顔は怖いけ話されぬ

トネルが怪談を生む夏の夜

ITの隙間に怖い穴がある

伏魔殿怖さ知らずが戸を開ける

流されて来るのはみんな流し難

暖流に乗った鮎が生け捕られ

浮く術を覚え流れに乗っている

桃が流れてばあさんの御葬式

歳月に流れた汗の甘くなり

漢になって流れる過去はふり向かぬ

初孫の名札可愛い保育園

新札で人の温みをまだ知らぬ

札束を数える暇が今はない

くたびれた切り札首にかけている

身の程を知らぬ札束よく動く

質札を残したままで旅に発つ

喜怒哀楽くぐり汚れた古い札

信じると紙のお札も恐ろしい

切り札の匂を高値で売りました

長柳会

加島

由一報

民の目が国会中継鍵開く
理屈では勝てない妻にビールつぐ
ハイテクのホテルの鍵に馴染めない
いつ来てもいいわと鍵を渡される
屁理屈を言うほどまでに孫育ち
楽しさを知らぬ余生の影法師
理屈っぽい友の話に目を逸らす

千太郎
けい子
正一
由一
敬二
和子
たけし

ふみ子

はるお

みち子

敦子

一眸

清美

常子

一揆

つや子

遊子

公弘

幸子

八千代

和代

美佐枝

菜美

小鹿

静生

美智子

帆雀

鍵なんかかかったことない母の胸

理屈いい白黒通す頑固者

屁理屈をもつともらしくおしとおす

楽しさをいつぱい持った軽い靴

我が家の改革の鍵妻が持ち

古代史を紐解く鍵は土の中

神様も養銭箱に鍵をかけ

隠し場所変えては探し回る鍵

理屈っぽい男はいらぬ祭り笛

理屈などないさ惚れたら僕の負け

宮仕え終えて心の鍵を解く

鍵掛けた部屋は私の小宇宙

中の下の椅子で楽しく生きている

大原川柳社

矢内寿恵子報

縁起とや担ぎ担がれ進まない
唄声を残して友は世を去りぬ
心残りないと言ったら嘘になる
のどまでの質問そつとかみ殺す
質問をしても答えぬ母の星
異端者の質問読んでる顔だ
小さな傷質問されて不整脈
質問の返事待つ日の青い空
質問の総攻撃に汗まみれ
即答をさけて質問模索する
新担任質問攻めに四苦八苦
新世紀質問さえも難かしい
縁起担ぐ亡母に似てきたなと思っ
質問に答えられない事はなし

みづえ
さちこ
あやこ
玉恵
辰江
妻
悦子
喜美子
巴子
敏子
南花
しず
みさえ
たつ子

一慧

マサ

もこ

美和子

良男

和代

文次

正美

富美子

直樹

幸雄

正子

潤子

問われても足で覚えた赤提灯

点滴に質問ためる患者さん

若女将質問攻め頭は空回り

いきなり質問頭は空回り

質問しやうと納得して帰る

質問に確と解答ないまま

なぜなぜと問うてくれます好奇心

傷心土足で上り込むマイク

めぐる忌へまだ問いたらぬ事ばかり

川柳さんだ

北野

哲男報

雷鳴に豊作祈り耳塞ぐ
雷が落ちる覚悟の里帰り
雷鳴に子も泣き止んで聞き分ける
雷鳴が遠のいてから米洗う
稲光蚊帳の話孫にする
浴衣着て火花と遊ぶ親が居る
遠花火音はあとから届けられ
見納めと毎年母は火花見る
グラウンドの土の匂いに滑り込み
風ばかり読んで明日へ進めない
想い出に変わる一緒に居た時間
姑が来る超早業で片付ける
思うよう家事片付いた日は最高

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

人間を許すと川が光り出す
宇宙旅人間浮かれるのは早い
沖縄で人間軽すぎないですか

弥生
柳宏子
ダン吉

ひでの

はるみ

昭子

絹子

静子

こふゆ

あすなろ

はじ芽

寿恵子

歳子

開子

千代

義子

藤朗

章子

哲男

サクラ

哲子

能子

澄子

敦子

久恵

五時からの男といわれ生きてます
人間を悪魔に変える薬漬け
人間の心に神も鬼も住む
雨の日は心湿って人恋し
姑に耐えぬくことで磨かれる
いつわりを言わぬ鏡だから磨く
靴磨くまだ人生歩くため
母のヒス心ゆくまで磨く鍋
磨くほど応えてくれる床柱
軸足を磨く母への鎮魂歌
気まずさを知ってか猫も寄りつかず
一喝が温い空気に入れ替える
笑い声やんだ気まずい人らしい
沖繩に日本中の低気圧
支持率の総理へ目下高気圧
嫁姑気圧の谷で生きている
うまいもの食べると直る低気圧
人間の耳にたしかな銭の音
灯台の灯が残り火を呼びに来る
真夜中に札も妻を見た怖さ
通天閣の顔はやつぱり夜がよい
ライバルの汗に同じ夜がある
真夜中に這い出してくる過去未来

岩美川柳会

石谷美恵子報

一風 きよみ まさと 加津子 ますみ 度 弘直 柳伸 頂留子 年人 千里 宏 欣之 のほろ 修 典呼 民 洋 明 とみを ばっは 太郎 元紀 シマ子

親と子の焦点合わず別に住む
焦点を絞る恋とは女とは
午前二時隠したものを outcomes 出してみ
前髪で隠すわたしの深い傷
のろろと握った寿司はうまくない
鯛とみて詐欺師が俺を釣りにくる
隠すもの何もないのも寂しいね
腹が立ち缶を蹴つたらはね返る
七難を隠す色白美顔術
空き缶を思い切りふみニヤツとす
のろろの性格恋も逃げてゆく
日本海ハンブル文字の缶の山
焦点は百万本のバラの中
のろろの亀も虹の絵なら描ける
弱点を隠すと友が減ってくる
玉手箱鯛の燻製入れてある
紅一点の美女に男の目が光り
隠しても隠しきれない目が語る
空き缶の捨て場所がない持ち帰り
缶ビール開けてひと日を締めくくる
隠れよい大きなひとの陰にいる

川柳ふうもん吟社

杉本

李男報

静生 蟹 大漁 一瑞 完司 重忠 一京 一夫 孝男 和歌子 睦子 睦子 よしえ 和枝 圭一郎 忠良 雅女 裕子 喬水 節子 美恵子

身のほどを知っているから恐くない
裸一貫この世に恐いものはない
老いてなお時々美女に恋をする
時々機密費にメス入れなさい
ひた隠す本音時々酔って出る
忍耐の衣身に着け姑となる
万札にアレルギーなど起きません
逆噴射妻が時々困る
時々二枚の舌を使い分け
アレルギーあなたの熱い手に弱い
先生が恐くないからおそろしい
ごめんねと寝た子の涙拭いてやり
押して引く力学知らぬ間に覚え
煩惱がまだ老骨に恋をさせ
冷や飯に慣れて善悪見分けつき
晴れた日も時どき曇るのが女
煩惱が時々添い寝してくれる
死は恐くないけど生きているのが恐い
戦中派時々思うダンゴ汁
時々はけんかで愛を確かめる
水虫とダニが仲よくやってくる
アレルギー猫がくしゃみをしてござる
時々妻の死角で浮気する
好きな蟹食べたければ痒くなる

川柳クラブわたの花

吉村

一風報

山節子 美恵子 多哥由 益子 佐智枝 のり代 一京 一瑞 昌鼓 雅女 茂登子 志げ緒 健一 喬水 圭一郎 良雄 由美子 信子 無限 金祥 茶人 毅 孝男

ここからは子でも入れぬ胸の奥
人の手の温さ伝わる闇の中
気まずさの空気伝える電話口

幸枝 隆盛 恭一

あだ名聞き納得いったあの笑顔

悪口は気にせずそこで燃えるゴミ

砂吐かぬアサリの意地を知る夕餉

持ち物をみんなシヤネルに揃える子

前うしろ電話が歩く世となつて

老眼を磨き美人を振り返る

水菜には鯨と仏間から返事

人間の欲無くなれば南無阿弥陀

不景気で竹輪の穴が大きくなり

夜勤明け白衣着替えて別の顔

人間の顔で悪魔がほくそえむ

湯けむりが旅情やさしく包み込む

自信持つ男の眉は動かない

動物に笑われているよ人間

やみ夜など何処に行つたかネオン街

悪口をさかになしたら弾む酒

風の子は塾で我慢を強いられる

七タや天の川にも銀の橋

自己弁護心の奥を見抜かれる

マンネリのたわ言聞いてくれる嫁

路地の奥ぬくいコントは絶やさない

川柳塔打吹

米田

幸子報

黒幕と言われオヤジとも呼ばれ

じわじわと寄りを戻して元の鞘

類かむりしてそつと出た盆踊り

じわじわと夫婦別姓風に乗る

黒幕はなぜか網からいつも洩れ

いじめられ肚に据えかね下剤呑む

奈良司

友甫

正純

一道

ますみ

トシエ

まさこ

いつみ

春江

知佐子

美代子

民子

明

八寿子

備道子

宏至

ミツ子

道子

君江

春子

一風

幸子報

佳女

晴光

美姜子

賀寿恵

泰山

幸香

なだめたりすかしたりして遂に喜寿

ハンカチで間に合わないよ汗しすく

言い勝つて腹式呼吸ばかりする

人間の腹ほど黒いものはない

黒幕は苦味走つたい男

父さんの腹にビールの海がある

腹立てて見ても相手は縄のれん

バイトバイトリラックスなど程遠い

じわじわと蝕んでくる骨の音

じわじわと胸にしみ入る祖父の言

虎の子がじわじわ減つて子が巣立ち

バックには日銀がいる安心せい

腹べこの夫にけさも起こされる

黒幕の屋敷に狸出入りする

黒幕がすつこけ子亀右往左往

キティちゃんのタオルも並ぶ洗面所

食欲なお腹の虫を飼っている

腹の皮面の皮も一級品

タオル掛けにパンツを干して叱られる

黒幕の奥に凄い女が立つている

百の罪千の涙を拭くタオル

腹ん中四十曲りや水車小屋

じわじわと流れを変えぬ采を振る

黒幕を操る糸がよじれ出す

岬川柳会

八十田洞庵報

折れ合つて互いが杖の老夫婦

しなやかに生きる骨折れない柳

親切心骨折り損で恨み買ひ

澄子

和子

忠良

きみ子

よしえ

和枝

龍枝

セツ子

順子

しろう

孝恵

芳光

玲泉

博丈

玲子

美ツ千

一夫

和歌子

完司

睦子

螢

石花菜

節子

幸子

倭子

和美

とみ

荒波に洗われ光る校員

大波小波母の港に戻ります

貸す限り覚悟をさめる腹づもり

八十路まで直すつもりの癖ひとつ

ライバルのつもりが無二の友となり

笹巻の届くつもりが節句過ぎ

まだ生きるつもりで医者のはしこする

自慢の子美人のつもりがパパに似る

万札を出したつもりでつりを待つ

ゴミに出すつもりと服に亡母の声

貯めた苦つもり貯金に残が無い

美人の娘釣つたつもりが逃げられる

過去ひとつ波打ち際においてくる

救世主一人一人に住んで居り

お遍路を細切れにして生きのびる

園児から折紙習う老年期

鼻をかむふりして拭いた涙粒

洗濯も掃除も明日するつもり

終の果ておおきに言うて逝くつもり

翠洋会

穴吹 尚士報

楽々と学校出たが仕事なし

孫が来る楽しい風を連れて来る

精一杯生きて安楽死を望む

明日からまた失業者になる楽日

もうこゝらで楽になれよと言う辞令

極楽へ行く看板が見だらぬ

墓参り祖母に歩幅を合はす坂

母のいる里は心かくくつろげる

よし子

朋子

みつ子

令子

ユミ子

悦子

里子

富美子

孝子

みや子

昌夫

東雲

勇

茂平

蛙城

勝

桜琴

年子

洞庵

尚士報

さだを

叡子

希久子

真理子

恭昌

靖巳

正雄

志華子

それぞれにゆつくり花が咲いている
住み慣れてゆつくり座る風涼し
母が居てゆつくり出来た里の朝
喝采に暮ゆつくりとゆつくりと
予定日が過ぎたが生まれそうにない
ゆつくりと修復作業文化財
再会のそれから先は言えません
再会の喜び告げる花手桶
五十年ぶり会う友の幼顔
古い独り自由と言われ喜べぬ
杜の都欒並木のまっしぐら
実年を語る思い出磨いてる
妻の気分しだいで変る酒の爛
改革の痛みに耐える覚悟問う
そは降る雨五輪旗垂れる御堂筋
三代目広い屋敷を更地にし
暑い日々ソーメンばかり炊いている
一合で酔える友達いて楽し
梅雨あける日記は今も白いまま
ときときはジョーク使つて身を躲す
悔いのないように埋めている余白
大文字くよくよしても始まらず

川柳塔おとり

原 みさを報

東雲 日の出 蕉子 伽羅 舞夢 尚士 久峰 正坊 照子 千梢 宣司 絹子 富子 さと美 千枝子 会美 蛙 喜美子 楓楽 澄子 義一

削ったり埋めたり森の絵が描けぬ
ポケットでなかなか消えぬ女の炎
女三人寄つてなかなか強い城
良縁と思う話が進まない
地蔵さまなかなか抜けぬ胸の刺
仲間でもなかなか腹は見せられぬ
旅支度出来てなかなかかみつかれず
境界の溝になかなか春が来ぬ
不況風ダルマなかなか目を開けぬ
胸のうちなかなか言えず春は去り
人と金願ひ通りに動かない
打たれ強くなつてなかなかへこまない
営業になかなかグラフ昇れない
仏さまにうれし涙を見てもらう
涙腺がさらりと乾く他人ごと
意見する方の涙が先に落ち
酸性雨地球が泣いているようだ
わが人生くやし涙が三度ある
星空の下干し草が匂つてた
ネクタイを結んだ頃が懐かしい
二人つきりで逢い懐かしい森にする
新婚の頃の洋服捨てられぬ
友達を思えばセピア色ばかり
浴衣の糊少しかために母を恋う

川柳高知

川竹

松風報

由多香 雄々 幸次郎 孝子 一弘 道子 伝住 富貴子 風花 黙昭 邦通 敦子 小生 登美 舍人 宏章 艶子 彰雄 和子 芳光 みさを 幸々

喜びを満面にした退院日
たつぷりと愛を注いだ子の謀反
お散歩は駅前にある焼鳥屋
薫風のシャワーを浴びる散歩道
身についた散歩が朝の至福時
薫風へ散歩休んでなるものか
散歩道不夢と語る裏参道
散歩する夢ばかりみる車椅子
京料理器見に来たようなもの
三猿を守り補聴器取りはずし
器には凝らぬ男の一人膳
大器には遠いが塾は休まない
方円の器にたまる水のうつ
親の目に叶う器が見当らず
龍馬には土佐の器が小さすぎ

とよなか川柳教室

安藤寿美子報

英夫 孝雄 呆斉 てるみ 和江 京史 哲雄 快功 三郎 佳風 温夫 圭風 松風 トシ子 きらり 千津子 都代子 美代子 春 清山 伽羅 勇治 英子 幸代 蛙

再会をしてから平常心なくす
再会の偶然もアンカレッジで
再会の友と体の話から
再会の友と語って夜もすがら
擦れ違ふ人の背中の遠い夏
再会を信じて暑いさよりなら
奇遇だねこんな所で再会は
USJで億分の一の再会す
再会を約した友の原爆忌
たこ梅へ再会の友連れていき
再会に思われた人思う人
くちなしの香り友とのめぐり逢い
再会に足をにぶらすしりあり
再会の犬と抱き合う昭和基地
そつなく過ぎた初会も再会も
来年もこのメンバーで会いましょう

富柳会

池

森子報

酔う程に心拡がる青嵐
大きな駅ティッシュ貰いにまた回る
人間不信とても指切りなどはせぬ
家中を這って磨いているところ
這い上がる苦勞話は軽くする
淋しくてひとつ余分に出すお血
三昧の音をビールで受ける夏座敷
土を這う虫けらはどの意地を持つ
スーパ血今日の予定が浮いてます
灰汁消えてのつべらぼうの顔になり
忘却の古傷スリリングな匂い

舞夢 節子 藍 久留美 美智子 千代 エミ子 緑骨 馬洗 朋月 豊子 知香子 絹子 道子 わきみ 慶子 春蘭 東雲 信子 ひろこ 宏 亮幹 淳一 扶美代 冬虹 己代一 紅紫朗

川柳藤井寺

高田美代子報

愛されて愛して重い枷になる
その時を恋と信じてから狂う
待つ人のない炊きたての豆ごはん
スタートはあふれる愛と皿二枚
這うかなるメツカ折りの土を這う
這うことを忘れた蟻の自閉症
焼鳥とビール至福の中にある
皿一枚投げて女は火を鎮め
這うような登山見下ろすロープウエー
先祖から子孫へつなぐ棚田這う
同病が励まし合った青い空
流し難だけでは気持断ちきれず
回る寿司には無頓着皿の数
これからは自分のための花舞台
受皿のないリストラが吹き荒れる
亡き人と勘違いする風の音
決断がまだつきませぬ夜半の月
密約を風と結んでいる死角
雨期乾期わがふる里に詩がある

アキ 登子 夕子 けい子 花梢 昭水 一慧 三和子 初太郎 一夫 幸代 男子 文子 たかし キミエ 欣之 森子 喜代子 かつみ みよ子 昌子 利武 マサ子 昭子 婦美枝

▼お願い 各地柳壇の原稿は、所定の
原稿用紙、所定の様式30句以内でご提出
下さい。
「9月24日までに到着した原稿は、11
月号の掲載となります。」

妻が病み家の中から音が消え
補聴器で音の世界の有難さ
着メロが柵の中で鳴っている
ポストからポトリいい音いい便り
ふつと御飯が炊けた日のリズム
本当の痛みかすかに音がある
老姉妹欲の深さもうり二つ
父そっくり足の爪までそり返る
罵詈雑言そっくり皿に盛つてある
電話口いつも姉妹を間違える
一合の酒がそっくりしゃべり出す
そっくりと言われて母の鼻を見る
片減りの靴に親子は争えぬ
借金もそっくり付いてきた遺産
再婚はそっくりでない人がよい
そっくりに咲いて命のない造花
贗作が師匠の腕を越えている
逃亡をあきらめさせたモンタージュ
そっくりになろうと赤を足している
目鼻だち間違ひもなく夫の子
昭和一桁歳は忘れたことにして
父の日は花束よりも缶ビール

正一 春蘭 淳一 絹歌 扶美代 一箇 雅枝 大八 桂子 栄子 悦子 一点 瑠美子 龍一 千里 和樹 アキ 重人 美代子 志洋

柳界展望



★第4回鳥取県川柳文芸大会は、7月8日新日本海新聞社大ホールで開催された。当日の本社関係者の天位は次のとおり。

五七五という日本語の魅力
土橋 螢

無医村に流れ流れてきた博士
河内 天笑

病魔とのいくさに花の季も過ぎて
石谷美恵子

脱皮した妻がこちらを振り向かぬ
植田 一京

★第2回生駒市民川柳大会は7月15日開催され、本社は関係の受賞者は次のとおり。

（生駒市長賞）
リモコンを握ったままの熱帯夜
池 森子

★2001年尼崎川柳大会は、133名の出席を得て7

月20日尼崎市立労働福祉会館で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

裏切らぬ杖が何時でも側に居る
櫻谷 郁子

★第19回夜市川柳大会は、7月29日堺総合福祉会館で開催され、当日の本社関係者天位は次のとおり。

鈍いから気楽に話してくる
寺田 甚一

一発必中背中が撃たぬのが掟
池 森子

につこりと笑って首を取りにくる
浅野 房子

くすくすれば僕の裸はまだ笑う
太田扶美代

朱の鳥居並べて潜る気にさせる
菱田 満秋

ブチトマト熟れてステッキ買いに行く
太田扶美代

ヒマワリが後ろを向いて咲いている
新家 完司

野球拳になったら女には勝てぬ
小林 妻子

★去る7月7日に行われた「麻生路郎・葭乃句碑建立

記念川柳大会」の除幕式、川柳大会の様子が、7月8

日、7月10日の山陽日々新聞に両日ともトップ記事で紹介された。

▽人事往来△
■河内天笑主幹は7月8

日、鳥取県川柳文芸大会に出席のため鳥取市行。

▼訃報▲

■井上白峰氏（同人・大阪市）は8月6日逝去。83歳。

8月8日北区玉泉院で行われた葬儀には、柳友多数がお見送りした。

☆第2回現代柳人の集い日時11月25日 会場岩手県北上市日本現代詩歌文学館 宿題△甘い・江畑哲男△町・大友逸星△チャ

ンス・大野風柳△世・佐藤岳俊△光・辻晩穂 各題2句

締切10月2日 千円

投句及び問い合わせ11月04-8503 北上市本石町2-15

60「現代柳人の集い」係

★故川上富湖

さん（平成12年1月27日没）

が、6月23日の「あじさい

忌」に、西村記念館の庭の石碑に名前を

刻まれ顕彰された。この忌は新宮熊野地方で活躍した文化人を供養する行事で、平成9年に父親の大矢十郎氏の名前も刻ま



れており、親子揃っての供養となった。

当日は新宮市のはまゆう川柳会の皆さんや親族が出席した。

TEL 0197-65-1728

当日題11月25日 会場岩手県北上市日本現代詩歌文学館 宿題△甘い・江畑哲男△町・大友逸星△チャ

ンス・大野風柳△世・佐藤岳俊△光・辻晩穂 各題2句

締切10月2日 千円

投句及び問い合わせ11月04-8503 北上市本石町2-15

60「現代柳人の集い」係

▼訂正とお詫び▲

■7月号P43下段1行目 津川紫光・津川紫晃 P

153上段右素身郎氏電話番号一五八九三二四八九三

8月号P5上段20行目の「数字には出ないあなたの

いいところ」を、本人申出により削除 P30上段13行

目、嵯峨野保子・嵯峨根保子 P67下段16行目、

菅田かつ子・菅田かつ子

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 ねやがわ	14 日 (金) 正 午 から 内緒・刺す・皮肉・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
高槻川柳 サークル 卵 の 花	14 日 (金) 正 午 から そっと・隠す・ポスト ほのぼの・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
城 北 会 川 柳 会	15日(土)午後1時から 華やか・ステップ・そっと 自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 花 梨	15日(土)午後1時から 長・柏木・空蟬・うっすら 自由吟	鳥取勤労者総合福祉センター(鳥取駅南)1F会議室 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から 素直・迫る・雑言・打算	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
岬川柳会	16日(日)午後1時半から ほのぼの・互い・平均・自由吟	岬町 美崎苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 甘い・サンプル・風呂・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
東大阪市 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から 高い・ページ・自分・石	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日)午後1時から 不足・浪人・センス・「魅力」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日)午後1時から 平気・フリーター・ぎっしり	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
川 柳 塔 みぞくち	24日(月)午後7時半から 自分・隣・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
京 都 塔 の 会	26日(水)午後1時から 香・……にくい・一過	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
南 大 阪 川 柳 会	26日(水)午後6時から 信仰・円滑・評判・モダン	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から 酒・携帯・文化	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
富 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 中身・図る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩 3 分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 耳・有意義・変わる	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 みちのく	1 日(土)午後 4 時から プライド・だんだん・挑む	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 2 階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	2 日(日)午前 11 時から 第 9 回和歌山県川柳大会	JAビル本館 5 F 大ホール A (8 月号 P.114 参照) 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 塔 唐津支部	2 日(日)午後 1 時半から 愚・戸・中年	唐津市 栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	6 日(木)午後 1 時から 白湯・耳・綴る	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ 7 分・JR奈良駅北歩 5 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	7 日(金)午後 1 時から アリバイ・化粧・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 打 吹	8 日(土)午後 1 時から チョッピリ・封・地方	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土)午後 1 時半から 強い・ブーム・弁当	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町381 竹内すみこ
八尾市民 川 柳 会	9 日(日)午後 1 時から 策・Eメール・日没・将来	山本コミュニティセンター内 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
西宮北口 川 柳 会	10 日(月)午後 1 時から 逆・踏む・ぼんやり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	11 日(火)午後 1 時から 風・焼く・バランス	豊中市立登池公民館 阪急・モノレール登池駅西へ 150 米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11 日(火)午後 1 時半から チャンス・台風・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	13 日(木)午後 1 時から 押す・声・たかい	堺市総合福祉会館 2 F 第 1 会議室 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑

編集後記

☆9月1日の西日本川柳大会前夜祭で、薫風名誉主幹と葉先生の句碑が、川柳の町弓削町で建立されます。行事の多い折ですが、除幕式には一人でも多くのお方の参加をお願いします。貸切バスあり。(8月号P13)

☆9月24日の薫風名誉主幹叙勲記念川柳大会の事前投句は締切りましたが、この大会は句を競うというより、叙勲を祝い皆様に楽しんでいただくのが目的です。参加申し込みがまだのお方は、8月号に同封のハガキを至急投函して下さい。

☆10月7日の川柳塔まつりも、事前投句と参加申し込み締切が迫っていますので、よろしくお願いします。

☆東野大八先生が8月19日鬼籍にはいられた。「川柳

の群像」を無償で29回も執筆していただいたご恩の大きさは、筆舌につくせるものではない。先生の滋味ある文章のない本号は、大きな穴があいたようで淋しくてならない。心からご冥福をお祈り申し上げます。

☆先生とは91年に台湾、92年に東北へ一緒に通っていただいた。ご存知の通り先生は戦争による隻手で、ご不自由だろうと旅行中手をお貸しすると、「結構」ときっぱり断られた。そこには人に負担をかけることを潔しとしない、毅然と自立した姿勢が窺われた。以来先生を健常者として接するように心がけた。

☆ある時頂戴した葉書に、「文章は思い切り崩して書きなさい」とあった。しかし私には未だに余裕がなく、苦心惨憺で駄文を連ねている。先生すみません。(ふ)

ひとこと

ジュニア川柳を育てよう

新しい川柳の芽をと、ジュニアの部を作ることがかねがねの念願でした。中学の教科書に俳句はあっても川柳が無い。岬中学選択履修として川柳講座を持ちました。

昨年は3年生20名(6クラス)の国語の授業に各クラス毎に川柳講座を開きました。資料を山積みにして初歩教室を始めましたが、

さすが明日をになう若者の芽が躍動するのが、ひしひしと感じられました。夏休みの宿題の一句に次の句があります。

いい気分勝手に足が靴をはく
そして私へ

川柳へ情熱燃やす八十田さんの句を作り卒業しました。

小学生の一句

先生の化粧もおちる冬休み

感動です。

(八十田滝庵)

○このところ愛猫のアキユキの様子がおかしい。アキユキとは、野坂昭如に非ず、中上健次の小説の主人公、秋幸から取った名前である。雀でもとかげでも鼠でもムシャツバリツ!と捕まえてくる野生児の黒猫である。つやつやした黒い毛並の下半身が脱毛し、地肌が見えてくる。

○掛かりつけの獣医に見せると「トラウマですね。う

ちで3例目です」と嬉しそうに言う。トラウマとはラテン語で「精神的外傷。心の後遺症を残すような激しい精神的ショック」である。「何かありましたか」と獣医殿。どうやら同居している妹のパートナーの入院、退院騒ぎでアキユキに構ってやれなかったことが原因にあるらしい。

○「カウンセンシングに來なければいけませんか」と私。

「私、猫の言葉は解りません」と獣医殿。それが医者なの言うことか! 自慢じやないが、うちの猫は喋るのだ。ことに十数年居る茶太郎は人間と会話が出来る。「おはよう」と呼びかけると、「ウニャー」と応える。私の元気の素はこの愛猫達。

○酷暑の夏も漸く一段落の気配。体力、気力を取り戻しこれから始まる川柳大会、秋の陣に備えたい。(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表(11月号)

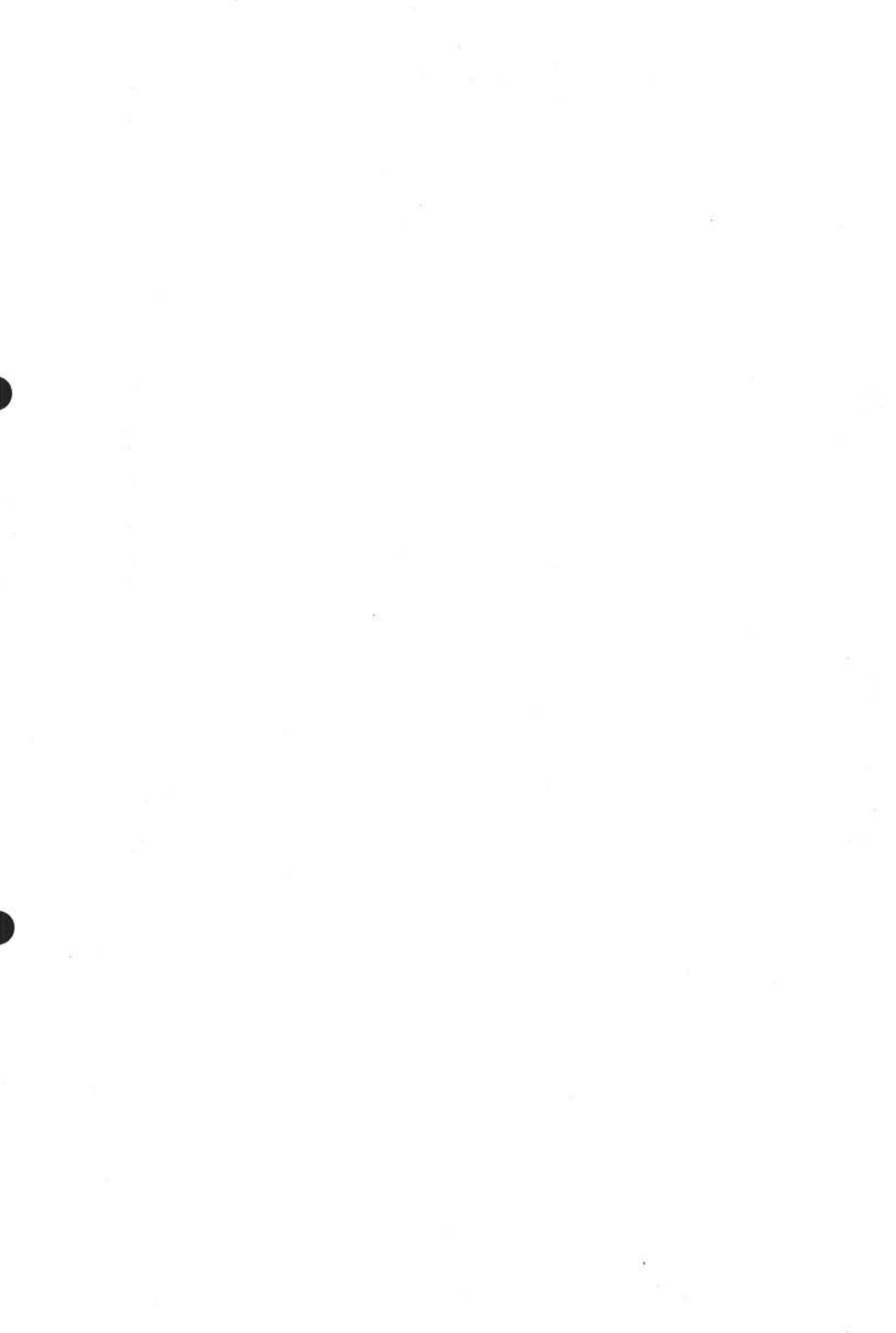
地名

姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑 選
水煙抄 (8句)	板尾岳人 選
愛染帖 (3句)	波多野五楽庵 選
茴香の花 (3句)	宮西弥生 選
課題吟 (3句)	「愚」 木村貴代子 選
「戸」	福田登美 選
「中」	小野句多留 選
初歩教室「ソフト」(3句)	吐田公一担当

12月号
課題吟「未完」「ノルマ」
「ゆっくり」
初歩教室「粒」

本社9月句会

とき 9月7日(金) 17時開場・18時半締切
ところ アウリーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「風」 川上大輪 選
「呼ぶ」 山本義子 選
「輝く」 中原比呂志 選
「美しい」 山本希久子 選
「杯」 河内天笑 選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

本社10月句会は10月7日の第7回
川柳塔まつり記念句会として開催
いたします。

夜市川柳募集

第4回「大」池森子選
ハガキに3句 9月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

〒545-0005

定価 六百元(送料84円)
半年分 四千元(送料共)
一年分 七千九百元(同)
二〇〇一年(平成十三年)九月一日発行

編集兼 河内権治
発行人 河内権治
印刷所 美研アト

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-1691
振替 〇〇九八〇一五―三三三八番

橘高薫風叙勲記念川柳大会

と き 平成13年9月24日〔月〕振替休日

午前11時30分開場・午後1時開会

ところ リーガロイヤルホテル 3階 光琳の間

〒530-0005 大阪市北区中之島5-3-68 TEL (06) 6448-1121

〈第一部〉お 話

1:40

立命館大学教授 木津川 計氏
作 家 田 辺 聖 子氏

〈第二部〉パネルディスカッション

2:50

司 会 N H K 学 園 大 木 俊 秀氏
札幌川柳社 斎 藤 大 雄氏
川柳公論社 尾 藤 三 柳氏
柳都川柳社 大 野 風太郎氏
番傘川柳本社 森 中 恵美子氏
俳 人 坪 内 稔 典氏

〈第三部〉作品発表（欠席投句拝辞）

4:00

雑 詠（当日投句）川 柳 大 学 時 実 新 子 選

雑 詠（事前投句・締切りました）橘 高 薫 風 選

各選者1句 別々の句をお出し下さい

当日投句締切 12時30分

〈第四部〉祝 宴 3階 光琳の間

5:00

会 費 第一部～第三部 2,000円（橘高薫風全句集・別冊川柳塔呈）

第四部 8,000円（フルコース）

各会費は当日集めさせていただきます。

宿 泊 12,000円（朝食付き）

参加・宿泊申し込みはハガキをお願いします。

当日は平服でお越し下さい。お問い合わせは本社事務所へ

TEL (06) 6629-6914

主 催 川 柳 塔 社